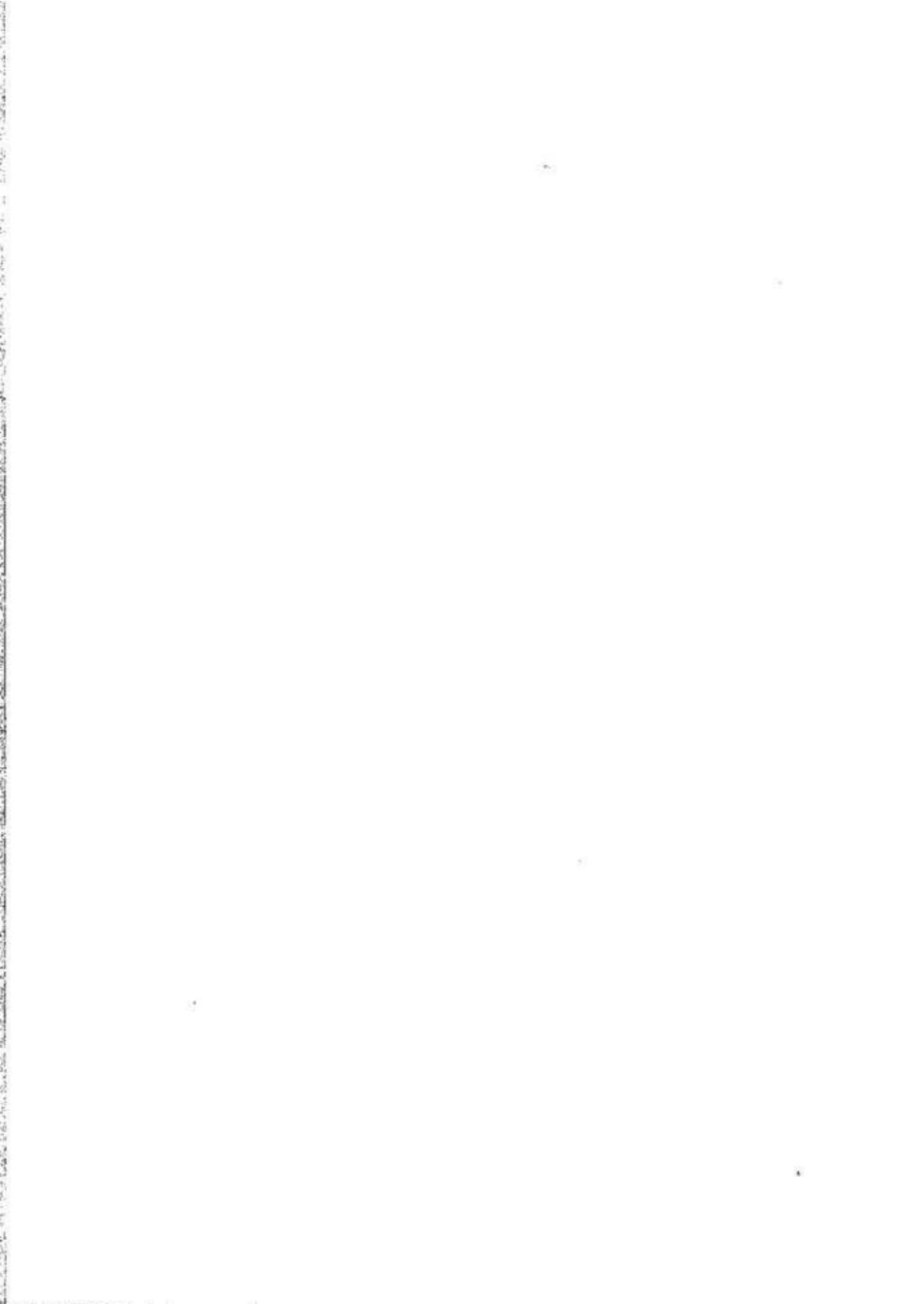


財團法人八尾市文化財調査研究会報告53

- I 跡部遺跡（第19次調査）
- II 跡部遺跡（第20次調査）
- III 跡部遺跡（第21次調査）
- IV 太田遺跡（第2次調査）
- V 萱振遺跡（第18次調査）
- VI 萱振遺跡（第19次調査）
- VII 萱振遺跡（第20次調査）
- VIII 小阪合遺跡（第31次調査）
- IX 成法寺遺跡（第16次調査）
- X 竹渕遺跡（第6次調査）
- XI 中田遺跡（第29次調査）
- XII 中田遺跡（第32次調査）
- XIII 東弓削遺跡（第9次調査）
- XIV 美園遺跡（第4次調査）

1996年

財團法人 八尾市文化財調査研究会



財團法人八尾市文化財調査研究会報告53

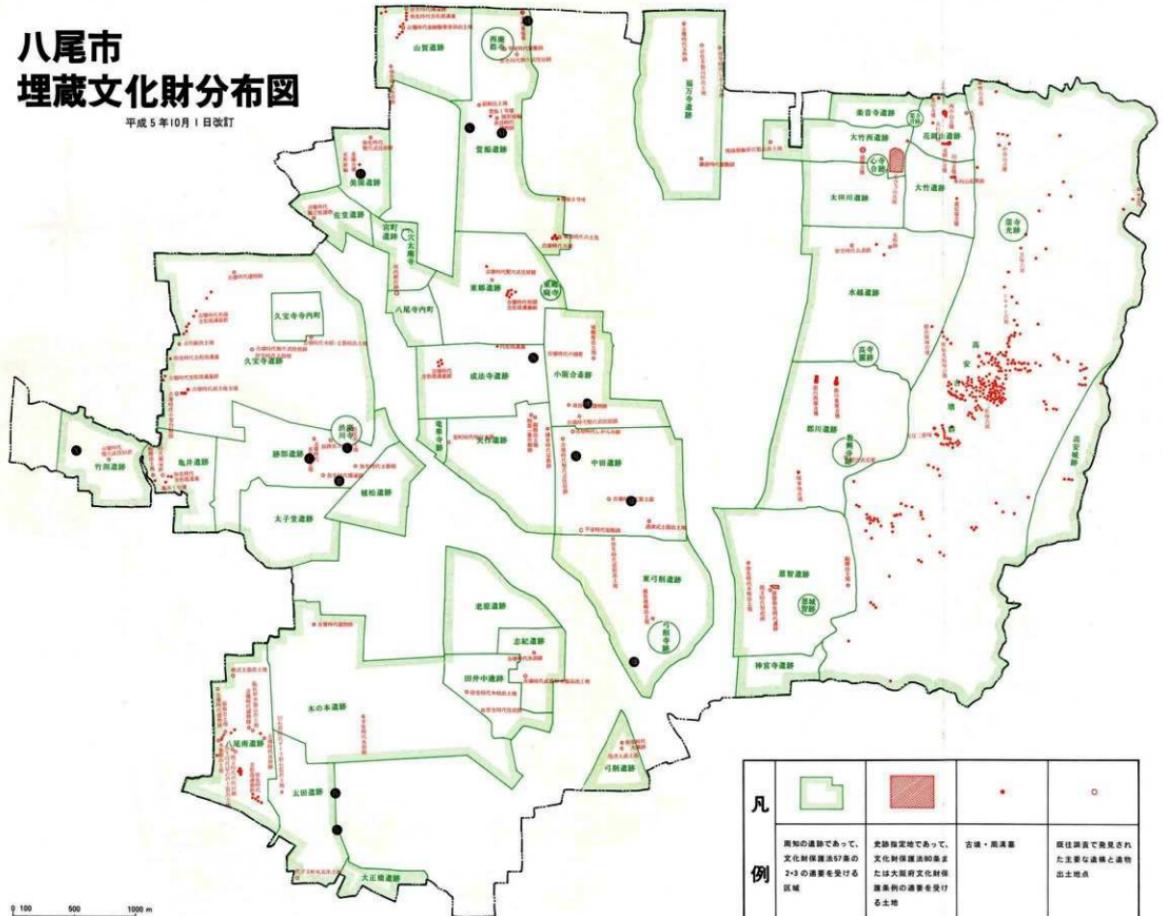
- I 跡部遺跡（第19次調査）
- II 跡部遺跡（第20次調査）
- III 跡部遺跡（第21次調査）
- IV 太田遺跡（第2次調査）
- V 萱振遺跡（第18次調査）
- VI 萱振遺跡（第19次調査）
- VII 萱振遺跡（第20次調査）
- VIII 小阪合遺跡（第31次調査）
- IX 成法寺遺跡（第16次調査）
- X 竹渕遺跡（第6次調査）
- XI 中田遺跡（第29次調査）
- XII 中田遺跡（第32次調査）
- XIII 東弓削遺跡（第9次調査）
- XIV 美園遺跡（第4次調査）

1996年

財團法人 八尾市文化財調査研究会

八尾市 埋蔵文化財分布図

平成5年10月1日 指定



凡				
例	既知の道路であって、 文化財保護法57条の 2・3の適用を受ける 区域	史跡指定地であって、 文化財保護法50条の 1に規定する古跡の 適用を受けた土地	古墳・周溝墓	既往調査で発見された 主要な遺跡と遺物 出土地点

はしがき

八尾市は東に生駒山地、西に上町台地、南に羽曳野丘陵に開まれた河内平野の中に位置しています。

平野部は、淀川や旧大和川および生駒山地西麓から西へ流れる中小の河川の堆積作用によって形成されており、肥沃な土壌が広がっている地帯であります。人々が生活する上で好ましい条件が揃っていた地域であり、古来より集落を形成し、田畠を耕し、日々の生活を営んでいた遺跡が多く存在しています。また、生駒山地の西麓にも人々が生活を営んでいた遺跡が多く存在しています。

現在、その遺跡のほとんどは河川等の堆積作用や近年の土地区画等の整地によって地中深くに残っています。近年、住宅建設や工場建設等の大規模な開発が多く行なわれるようになり、地中に眠っていた遺跡が破壊されることが頻繁に起きてきました。そこで、これらの文化財を開発による破壊から守り、先人が残した文化遺産を後世に永く伝承させることが我々の責務と認識し、文化財の保護・保存の徹底をはかってきたところであります。

本書は、平成7年度に実施しました跡部遺跡（第19・20・21次調査）、太田遺跡（第2次調査）、萱振遺跡（第18・19・20次調査）、小阪合遺跡（第31次調査）、成法寺遺跡（第16次調査）、竹渕遺跡（第6次調査）、中田遺跡（第29・32次調査）、東弓削遺跡（第9次調査）、美國遺跡（第4次調査）の9遺跡の発掘調査を記したものであります。

本書が学術研究及び本市の地域史の一資料として広く活用され、その一助となれば幸いです。

末筆となりましたが、これらの発掘調査におきましてご協力いただきました関係機関の皆様方に対しまして心から厚くお礼申し上げます。

1996年9月

財團法人 八尾市文化財調査研究会

理事長 木山丈司

序

1. 本書は財団法人八尾市文化財調査研究会が平成7年度に実施した発掘調査成果報告を収録したもので、内業整理及び本書作成業務は各現場終了後に着手し、平成8年9月をもって終了した。
1. 本書に収録した報告は、下記のとおりである。
 1. 本書掲載の地図は、大阪府八尾市役所発行の2,500分の1（昭和61年8月）・八尾市委員会発行の『八尾市埋蔵文化財分布図』（平成5年10月1日改訂）をもとに作成した。
 1. 本書で用いた高さの基準は東京湾の平均海水面である。
 1. 本書で用いた方位は磁北及び国土地標の座標北を示している。
 1. 遺構は下記の略号で表した。
 穴穴住居-SI 潟-SD 井戸-SE 土坑-SK 小穴 SP 自然河川-NR
 挿立柱建物-SB 落ち込み-SO 土器棺墓-上器棺 土器集積-SW
1. 遺物実測図は、断面の表示によって次のように分類した
 弓生土器・土師器・瓦器・埴輪・石類-白、須恵器-黒、木製品-斜線。
1. 各調査に際して、写真・実測図の他にカラースライドも多数作成している。市民の方々が、広く利用されることを希望する。

目 次

はしがき

序

八尾市埋蔵文化財分布図

I	跡部遺跡 第19次調査 (A T95-19)	1
II	跡部遺跡 第20次調査 (A T95-20)	7
III	跡部遺跡 第21次調査 (A T95-21)	19
IV	太田遺跡 第2次調査 (O OT95-2)	33
V	萱振遺跡 第18次調査 (K F95-18)	43
VI	萱振遺跡 第19次調査 (K F95-19)	53
VII	萱振遺跡 第20次調査 (K F95-20)	59
VIII	小阪合遺跡 第31次調査 (K S95-31)	63
IX	成法寺遺跡 第16次調査 (S H95-16)	73
X	竹瀬遺跡 第6次調査 (T K95-6)	79
XI	中田遺跡 第29次調査 (N T95-29)	93
XII	中田遺跡 第32次調査 (N T95-32)	107
XIII	東弓削遺跡 第9次調査 (H Y95-9)	117
XIV	美園遺跡 第4次調査 (M S95-4)	123

報告書抄録

I 跡部遺跡第19次調查（A T95-19）

大村文子

例　　言

1. 本書は、八尾市春日町3丁目地内で実施した公共下水道工事に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する跡部遺跡第19次調査（AT95-19）の発掘調査の業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第理 625-3号 平成7年4月3日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託をうけて実施したものである。
1. 現地調査は、平成7年6月21日から8月10日にかけて、坪田真一を担当者として実施した。調査面積は約17m²を測る。なお調査においては山内千恵子が参加した。
1. 本書の執筆・写真撮影及び編集は坪田が行った。

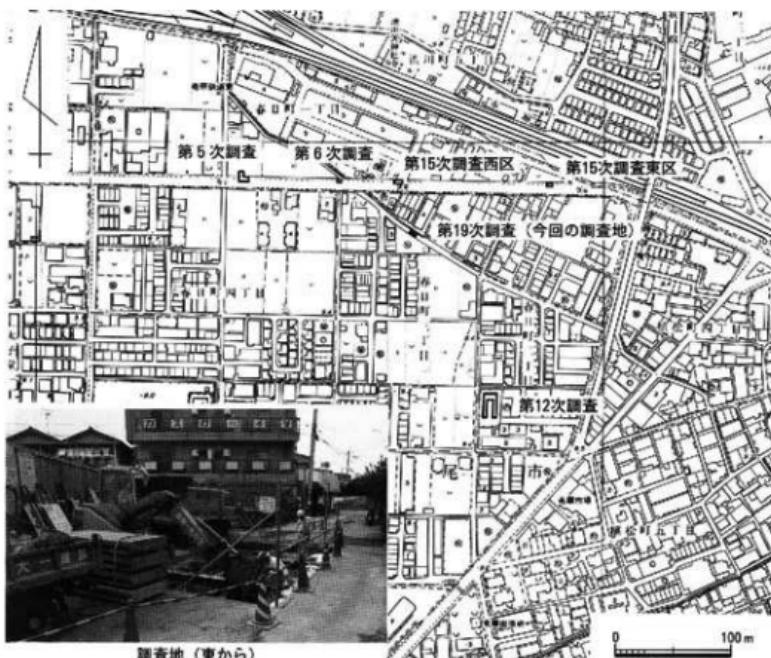
本　文　目　次

1.はじめに.....	1
2.調査概要.....	2
1) 調査の方法.....	2
2) 基本順序と出土遺物.....	2
3) 検出遺構と出土遺物.....	4
3.まとめ.....	5

1. はじめに

跡部遺跡は八尾市の西部に位置し、現在の行政区画では跡部北の町1・2、春日町1~4、太子堂1・2、東太子1、跡部本町1~4、跡部南の町1・2、安中町3がその範囲となっている。地理的には旧大和川の主流である長瀬川左岸の自然堤防上に立地しており、同地形上では北で久宝寺遺跡、東で植松遺跡、南で太子堂遺跡、西で亀井遺跡と接している。

当遺跡では、昭和53年に春日町1丁目で行われた旧国鉄職員寮建設の際に、弥生時代前期の土器や鎌倉時代の瓦が出土したと伝えられ、その後昭和56年以降、八尾市教育委員会・当調査研究会により数次の発掘調査が行われている。平成元年の当調査研究会第5次調査では埋納された銅鏡が検出され注目された。これらの調査成果から、当遺跡は弥生時代前期から近世にわたる複合遺跡であると認識されている。



第1図 調査位置図 (S = 1/5000)

2. 調査概要

1) 調査の方法

今回の調査は公共下水道工事に伴う立坑部分の調査であり、当調査研究会が跡部遺跡内で実施した第19次調査である。

調査は地表下約1.2mまでを機械掘削とし、以下約1.3mを人力掘削により実施した。そしてその後、工事深度である地表下約5.2mまでについては機械掘削により、調査区の北壁を残しながらの断面観察、及び遺物採集を実施した。

2) 基本層序と出土遺物

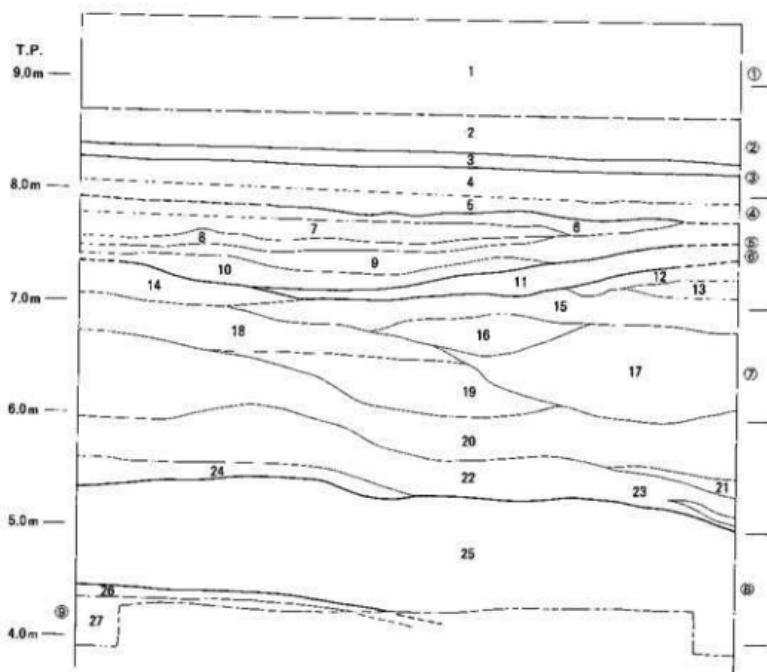
第①層は盛土、第②層は旧耕土である。第③層・第④層からは古墳時代中期～後期頃の土器が出土している。1・2は同一個体と思われ、口径16.8cm、器高は約14.0cmに復元される土師器高杯である。淡褐色を呈し、焼成良好で硬質なものである。また図化しえなかつたが器壁が薄く外面平行タタキの製塙土器の小片、時期不明の須恵器壺片が出土している。平瓦（3）も出土しているが、SD1の遺物である可能性がある。調整は凸面格子叩き、凹面布目、端部へラケズリで、淡灰茶色を呈し焼成は不良である。

第⑤層以下は河川堆積の様相を呈している。第⑤・⑥層は河川の最終堆積部分と考えられ、調査区中央で落ち込む溜水堆積状況であり、平面・断面観察から東西方向の流路方向が想定できる。第⑤層中位では、北部で層厚約10cmの微砂層がみられる。両層からは、弥生時代後期末から庄内式期に比定される土器（壺・高杯・鉢・壺）の小破片が少量出土している。図化したのは鉢（4）のみで、調整は外面ハケ・内面ヘラミガキである。レベル的には、第⑤・⑥層が北部～北西部調査地で確認されている布留式期包含層にあたり、第⑥層の黒褐色土はこの包含層が落ち込んだものかもしれない。第⑦・⑧層は層厚3m以上を測る流水堆積層で、東に向かって下がっている。第⑧層上部からは時期不明の摩滅した土器片が1点出土している。第⑦層下部には層厚10cm～20cmの植物遺体層（24層）がみられる。また第⑨層上部は植物遺体の影響で灰黒色を呈する。

当地の層序は、東北東約130mに位置する第15次調査区の層序に類似している。ここでは、標高約7.8m以下、層厚2m以上にわたる砂層が検出されており、弥生時代後期末から古墳時代前期にかけての自然河道または洪水層と考えられている。当地の第⑤～⑧層の河川堆積は、この砂層に対応する可能性が高い。



第25～27層



基本層序

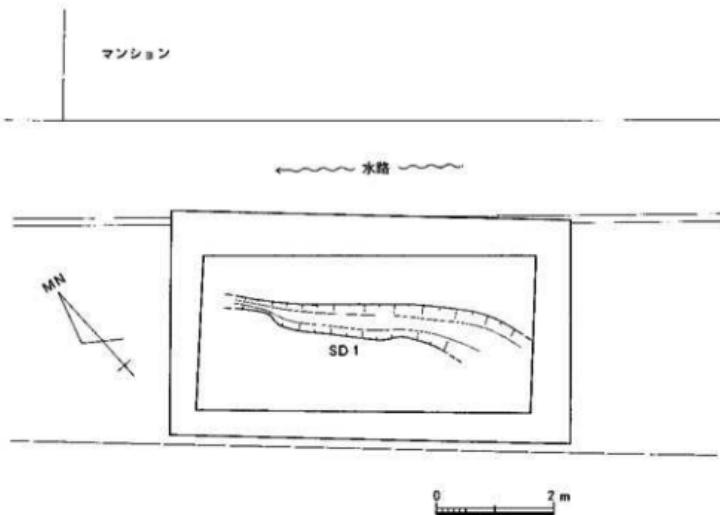
- 第①層 盛土
- 第②層 旧耕土
- 第③層 灰黃褐色粘質土
- 第④層 黄灰褐色細砂混じり粘土
- 第⑤層 噴灰色～暗灰青色粘質シルト

- 第⑥層 黒褐色粘質シルト混じり細砂～粗砂
- 第⑦層 灰色～灰褐色粘質シルト～粗砂
- 第⑧層 灰色～灰黃色細砂～粗砂
- 第⑨層 灰色粘質シルト

細分層序

- | | |
|------------------------|----------------------------------|
| ① 1. 盛土 | 15. 淡灰褐色細砂～粗砂 |
| ② 2. 旧耕土 | 16. 淡灰色細砂～微砂 |
| ③ 3. 灰黃褐色粘質土 | 17. 灰色粘質シルト～細砂の互層 |
| ④ 4. 灰褐色細砂混じり粘土 | ⑦ 18. 灰色微砂～褐灰色粘質シルトの互層 |
| 5. 黄灰褐色細砂混じり粘土 | 19. 灰色微砂（ラミナ） |
| - 6. 噴灰褐色粘質シルト | 20. 灰褐色粘質シルト～微砂の互層 |
| 7. 噴灰褐色粘質シルト混じりシルト | 21. 淡灰色細砂 |
| 8. 噴灰褐色粘質シルト混じりシルト～微砂 | 22. 灰褐色～灰黄色微砂～粘質シルトの互層（植物遺体少量含む） |
| 9. 噴灰青色微砂混じり粘質シルト | 23. 灰黃色細砂 |
| 10. 噴灰青色粘質シルト | 24. 22層下部の植物遺体堆積層 |
| ⑥ 11. 黑褐色粘質シルト混じり細砂～粗砂 | ⑧ 25. 灰色～灰黃色細砂～粗砂 |
| 12. 噴灰青色細砂混じりシルト～微砂 | 26. 灰黑色粘質シルト（植物遺体含む） |
| 13. 噴灰青色細砂混じり微砂 | ⑨ 27. 灰色粘質シルト（植物遺体少量含む） |
| 14. 噴灰青色細砂混じり粘質シルト～微砂 | |

第2図 調査区北壁 (S = 1/50)



第3図 平面図 ($S = 1/100$)

3) 検出遺構と出土遺物

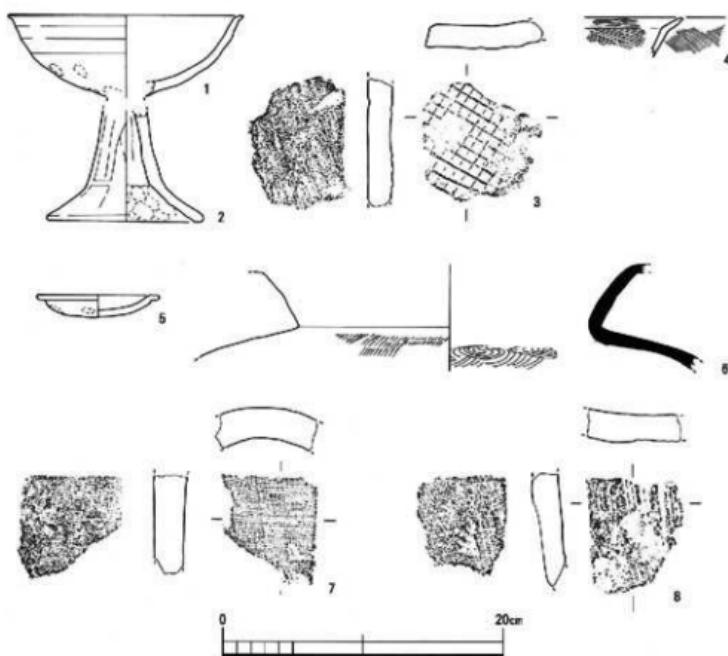
第3層上面（標高約8.3m）から切り込まれる溝1条（SD 1）を検出した。

SD 1

北西-南東方向の溝で、規模は幅40cm～80cm・深さ35cmを測る。断面逆台形を呈し、埋土は上層が暗灰褐色細砂混じり粘質土、下層が淡灰青色細砂混じり粘土である。

遺物は平安時代頃の土器や瓦が出土している（5～8）。土師器皿（5）は口径8.7cmを測るいわゆる「て」の字状口縁皿で、11世紀代に比定されるものである。須恵器甕（6）は体部外面平行タタキ・内面同心円タタキで、それぞれナデ消しているが不完全なため痕跡は明瞭に残っている。丸瓦（7）は凸面ナデ・凹面布目、平瓦（8）は凸面繩目タタキ・凹面布目である。7は凹面に煤が付着しており、二次焼成を受けている可能性がある。

当調査地の位置する道路は、条里とは異なる北西-南東方向のものである。当溝はこの道路に平行するもので、町並みの形成時期を知るうえで興味深い。なお北西約80mの第6次調査でも同一方向の溝が検出されている。



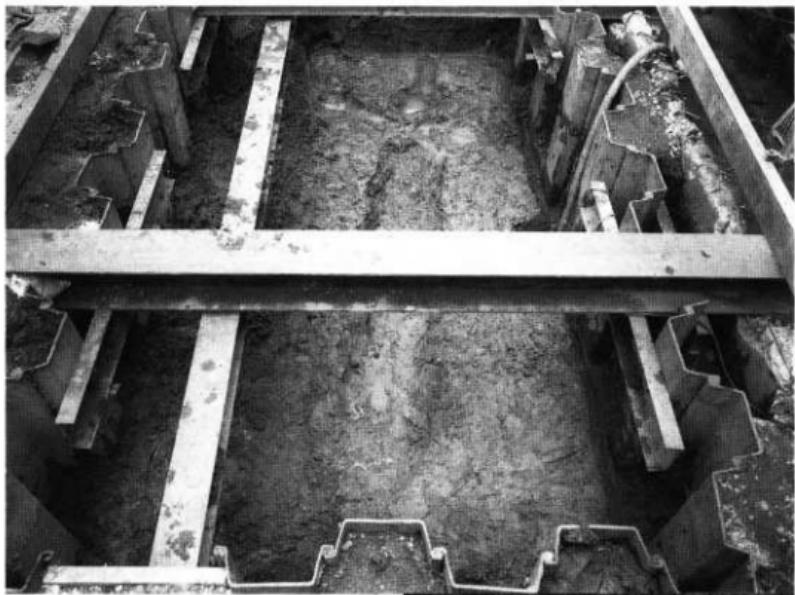
第4図 出土遺物 (S = 1/4)

3. まとめ

今回の調査では平安時代の造構・遺物、古墳時代中期から奈良時代頃の遺物包含層を検出した。またこれより下層では当地が河川域であったことが確認された。なお今回の調査での出土遺物量はコンテナ1箱を数える。

検出された河川跡は、出土遺物や北東部での調査成果から、弥生時代後期から古墳時代前期のものと考えられる。北約50mの第15次調査西区やその西部では、布留式期の集落域（土坑・包含層）が検出されているが、この集落は当地まで及んでいないか、あるいはこの河川に削平されているようである。

今回の調査地の北約150mには渋川天神社が所在し、その南側は白鳳時代創建とされる渋川廃寺の推定地となっている。今回、1点のみではあるが出土した格子叩きを施す平瓦（3）は、奈良時代頃に遡るものである可能性があり、渋川廃寺との関連が注目される。



SD 1 (南東から)



SD 1 西端土器 (5) 出土状況



II 跡部遺跡第20次調查（A T 95-20）

考 古 文 稿

例　　言

1. 本書は大阪府八尾市春日町4丁目地内で実施した公共下水道（平成7年度第6工区）工事に伴う発掘調査である。
1. 本書で報告する跡部遺跡第20次調査（AT95-20）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第埋305-3号 平成7年8月31日）に基づき財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成7年11月10日から11月15日にかけて、高萩千秋が担当者として実施した。調査面積は23m²を測る。なお、調査においては八田雅美・島野綱一が参加した。
1. 本書に関わる業務は、遺物実測・図面レイアウト・トレースー中村百合・西岡千恵子・市森千恵子が行った。
1. 本書の執筆・編集は高萩が行った。

本　文　目　次

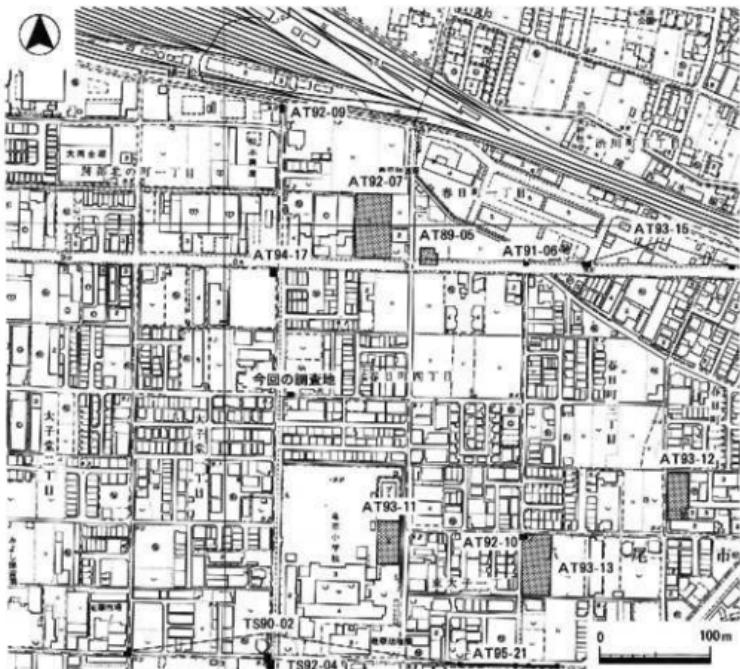
1.はじめに.....	7
2.調査概要.....	8
1) 調査の方法と経過.....	8
2) 基本層序.....	9
3) 検出遺構と出土遺物.....	10
4) 遺構に伴わない出土遺物.....	12
3.まとめ.....	14

II 跡部遺跡第20次調査 (AT95-20)

1. はじめに

跡部遺跡は八尾市西部に位置し、現在の行政区画では跡部本町1～4丁目、跡部南の町1・2丁目、跡部北の町1・2丁目、春日町1～4丁目、太子堂1・2丁目、東太子1丁目、安中町3丁目にあたる。地理的には旧大和川の主流である長瀬川左岸の沖積地上に立地しており、同一沖積地には東に植松遺跡、西に亀井遺跡、南に太子堂遺跡、北に久宝寺遺跡が接する。

当遺跡では、昭和53年に八尾市教育委員会が春日町1丁目内の旧国鉄職員寮建設工事の際に弥生時代前期の土器、鎌倉時代の瓦が出土したと記録されている。その後昭和56年以降、市教委・当調査研究会により数十次の発掘調査を行っている。平成元年度に当調査研究会が実施した第5次調査 (AT89-5) では土壤に埋納された銅鐸が検出され注目された。現在までの調査成果から、弥生時代前期～近世に至る複合遺跡であることが明らかとなっている。



第1図 調査地位置図及び周辺図

2. 調査の概要

1) 調査の方法と経過

今回の調査は公共下水道第7-6工区工事に伴う立坑部分の調査で、当調査研究会が跡部遺跡内で実施した第20次調査（AT95-20）にあたる。調査区は立坑1ヶ所（縦3.75m×横6.15m）で、面積約23m²を測る。調査期間は、平成7年11月10日～11月15日までであった（うち実働3日）。

調査は工事進行に沿って進めた。まず1段目の腹起しまでの1次掘削については、現地表（約T.P.+9.1m）下約2.0mまでを立ち会いのもとで機械掘削を実施した。続いて2段目の腹起しまでの2次掘削は現地表下2.0～3.5mである。周辺の調査では現地表下約2.0～2.5mに弥生時代後期～古墳時代前期に相当する包含層及び遺構面の存在が予想されていたため、機械と人力を併用して徐々に掘削を行った。その結果、古墳時代前期の包含層及びその下面で遺構面となる土層を検出した。その遺構面を精査した結果、土坑・杭根を検出した。また現地表下約2.8mの土層上面より切り込まれている古墳時代前期以前の溝状遺構を検出した。さらにその溝状遺構に切られたかたちで弥生時代前期～中期前半の遺物包含層を検出した。その遺物包含層の下面を精査し、遺構の検出に努めたが調査区内では認められなかった。3次掘削では最終工事掘削深度までである。現地表下3.5～4.4mまでの土層状況の観察を行うため機械及び人力を併用して掘削を行った。遺構・遺物は認められなかった。



第2図 調査区位置図

2) 基本層序

第1層 盛土 (層厚80cm)。道路下では、アスファルト・パラス・盛り土が堆積している。

また、公共（水道・排水管など）施設の埋設工事で擾乱・削平している。

第2層 旧耕土（層厚20cm前後）。上部は削平されてるが、近代の耕作土と思われる。

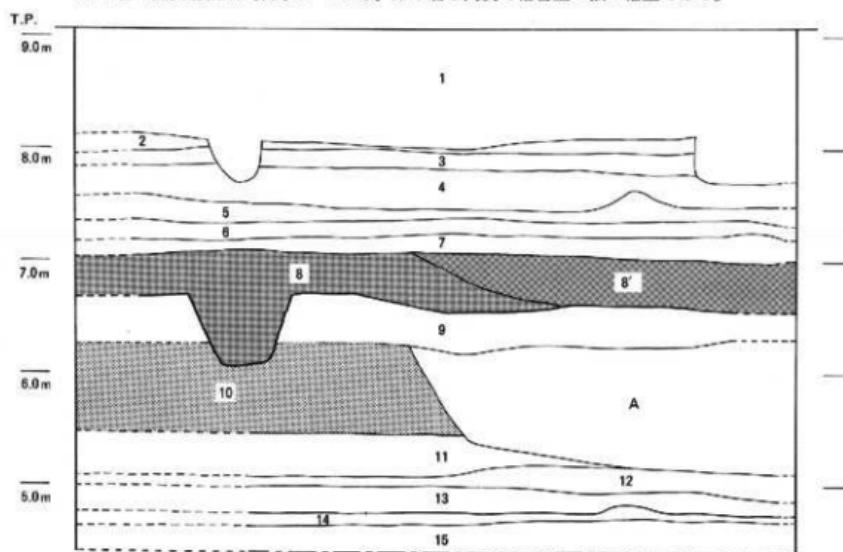
第3層 淡青灰色粘質土（層厚15cm前後）。耕作土の床土。

第4層 乳灰褐色粘土（層厚30cm前後）。褐色の斑点がみられる。

第5層 明茶灰色粘土（層厚10~25cm）。

第6層 灰褐色粘土（層厚15cm前後）。粘着土の強い粘土である。

第7層 淡灰色粘土（層厚10~20cm）。第6層と同質で粘着土の強い粘土である。



- | | |
|------------|------------------|
| 1. 盛土 | 9. 青灰色シルト I |
| 2. 旧耕土 | 10. 暗灰色粘土 II |
| 3. 淡青灰色粘質土 | 11. 青灰色シルト II |
| 4. 乳灰褐色粘土 | 12. 灰色粘土 |
| 5. 明茶灰色粘土 | 13. 淡青灰色微砂 |
| 6. 灰褐色粘土 | 14. 暗青灰色粘土 |
| 7. 淡灰色粘土 | 15. 淡灰色微砂～細砂 |
| 8. 暗灰色粘土 I | A. 淡灰色微砂と灰色粘土の互層 |
| 8'. 灰色粘土 | |

第3図 北壁断面図

- 第8層 暗灰色粘土Ⅰ（層厚40cm前後）。古墳時代前期の遺物が含まれる土層である。北東部で炭が多く含み黒くなっている部分がみられる（第8'層）。
- 第9層 青灰色シルトⅠ（層厚40cm前後）。この上面で古墳時代前期の遺構が切り込まれている。上面ではやや南東が高く北東が低い。高低差は約10cm前後を測る。標高は6.6～6.7mである。
- 第10層 暗灰色粘土Ⅱ（層厚80cm前後）。第8層と同質土層で弥生時代前期～中期前半の遺物を含んでいる。
- 第11層 青灰色シルトⅡ（層厚40cm前後）。第9層と同質土層である。弥生時代前期～中期前半の遺構面と思われるが遺構は認められなかった。
- 第12層 灰色粘土（層厚10～20cm）。粘着性のある粘土層である。
- 第13層 淡青灰色微砂（層厚15～20cm）。
- 第14層 暗青灰色粘土（層厚10cm前後）。粘着性のある粘土上で炭化物が含まれる。
- 第15層 淡灰色微砂～細砂（層厚30cm以上）。下位に行くに従い砂粒が粗くなる。
- 第A層 淡灰色微砂と灰色粘土の互層（層厚100～120cm）。北東側に落ち込んでいる溝状遺構の堆積土である。微砂層内を5～10cmの層厚の粘土が互層する。

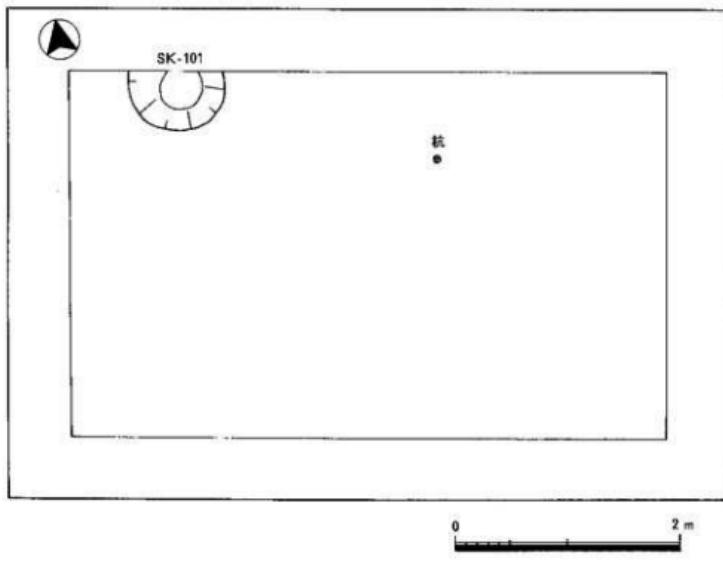
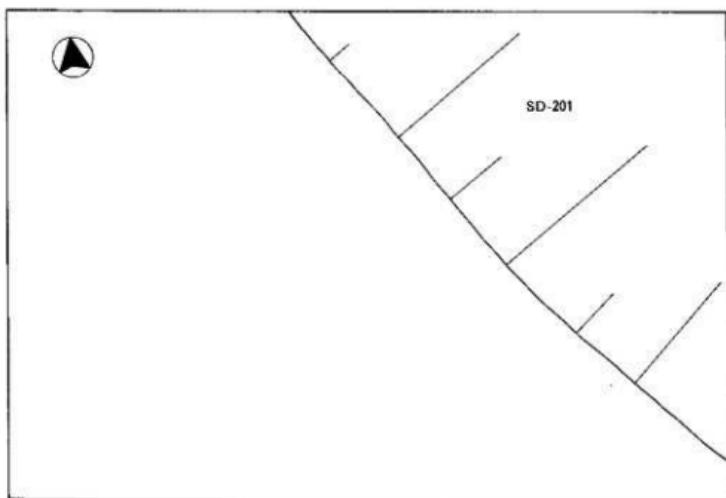
3) 検出遺構と出土遺物

調査の結果、現地表下約2.0～2.4m（標高6.7～7.1m）の第8層で古墳時代前期の包含層を検出した。その下の第9層上面で土坑1基（SK-101）・杭根1ヶ所（杭1）を検出した。さらに現地表下約2.8～3.6m（標高5.5～6.3m）の第10層で弥生時代前期～中期前半の遺物包含層を検出した。その下の第11層上面では遺構と認められなかつたが、弥生時代前期のベース面と考えられる。また第10層の上面では弥生時代前期～中期前半の包含層を切り込んだかたちで溝状遺構1条（SD-201）を検出した。遺物は遺構及び包含層内からコンテナにして約1箱分を出土した。以下、検出した遺構について記す。

溝状遺構（SD）

SD-201

調査区の北東部で検出した溝状遺構である。検出は第10層上面から切り込みで南西から北東方向に伸びる西側のみの溝である。深さは北東隅で約1.0mを測る。堆積土は淡灰色微砂と灰色粘土の互層である。遺物は出土しなかつた。この溝の時期については第8層の古墳時代前期の包含層の下層で第10層の弥生時代前期～中期前半の包含層からの切り込んでいることから弥生時代中期後半から古墳時代前期の時期の間に形成されたものと考えられる。



第4図 造構平面図

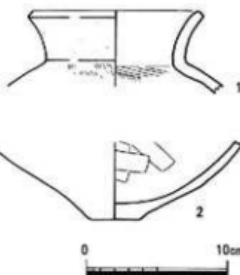
土坑（SK）

SK-101

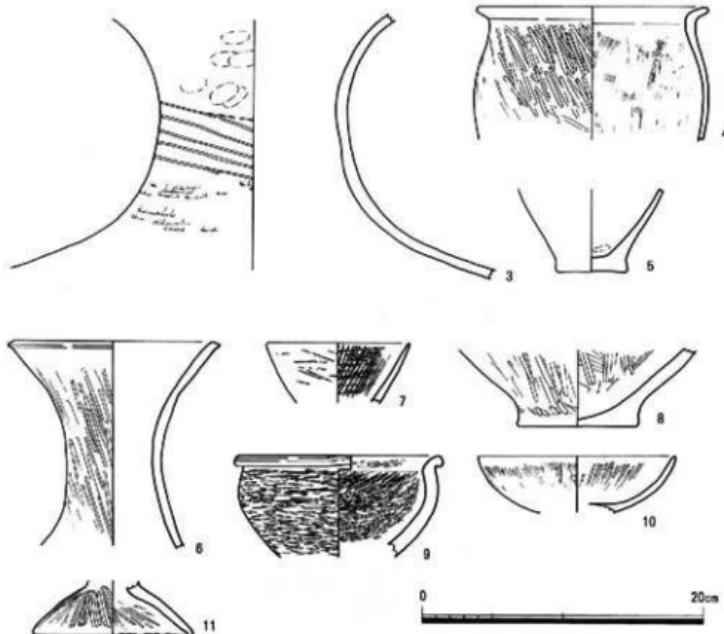
調査区北西部で検出した土坑である。平面形はほぼ円形を呈する。径0.8~0.9m、深さ0.6mを測る。断面は逆台形を呈し、第8層とほぼ同質の上層が堆積している。遺物は底部付近から弥生時代後期～古墳時代初頭に比定される土器片を少量出土した。図示できたものは畿内第V様式の口縁部片の壺（1）と突出ぎみ平底がみられる壺の底部（2）である。

杭1

調査区の北東部で検出した。径約5~10cm前後、長さ約20cmを測る角材状に加工した木材で、下部は尖っているのがみられたが腐敗しており、原形の形状は不明である。割り方がないこと



第5図 SK-101出土遺物実測図



第6図 遺構に伴わない出土遺物実測図

から打ち込んだものと考えられる。

4) 遺構に伴わない出土遺物

第8層と第9層内の上層からバスクエット（450×300×100mm）に各1杯分程度が出上している。第8層は古墳時代前期に比定される土器の碎片、第9層は弥生時代前期後半～中期前半に比定される弥生土器である。そのうち図化できたものは9点である。第6回の3～6は弥生土器で、3は頸部に沈線が廻る縦内第1様式の壺片である。4は縦内第IV様式に比定される口

出土遺物観察表

遺物番号 回収番号	着種	法益 (cm)	口径 (cm)	測量・検査	色 調	粒度	焼成	遺存状況	備考
1 三	壺 弥生土器 SK-101	口徑 11.6		口縫部外側ヨコナデ後ハ ケナナ内面ヨコナデ、大 部内外面ハケナダ	外：乳灰黃色 内：乳灰黃色	4 mm以下の砂粒を 多量に含む（長石、 赤褐色酸化物）	良好	口縫1/4	
2 三	同上	縦深 3.3		体縫部外側ヘラミガキと記 されるが剥離の為調整不 明。内面ハケナダ、底部 外側ナダ	外：淡灰黃色 内：灰黑色	5 mm以下の砂粒を 少量含む（長石、 雲母、赤褐色酸化 物）	良好	底部1/2	
3 三	同上 包含層		-	頸部上部外側ナダ、指關 压痕、内面ナダ、中腹 に5条の沈線を有す。下部 外側ハケナダ、内面ナダ	外：淡灰黃色 内：乳灰黃色	4 mm以下の砂粒を 少量含む（長石、 石英、雲母）	良好	口縫1/4	
4 三	壺 弥生土器 包含層	口径 16.0		口縫部外側ヨコナデと記 されるが剥離の為調整不 明。内面ヨコナデ、頸部 内面ハケナダナダ、体 部外側ヘラミガキ、内面 ハケナダ	外：暗灰黃褐色 内：淡灰黃色 ～淡灰青褐色	3 mm以下の砂粒を 少量含む（長石、 角閃石、雲母）	良好	口縫1/6	焼付有り
5 三	壺 弥生土器 包含層	底深 4.6		口縫部外側ヨコナデ後ハ ケナナ内面ヨコナデ、大 部内外面ハケナダ	外：淡灰黃茶色 内：灰黑色	4 mm以下の砂粒を 少量含む（長石、 雲母、チャート）	良好	口縫1/5	
6 三	壺 分別土器 包含層	口径 14.0		口縫部外側ヨコナデ、内 面削痕、腹部外側ヘラミ ガキ、内面削痕、下 部ナダ	孔灰茶色～乳 灰綠色	5 mm以下の砂粒を 少量含む（長石、 雲母、赤褐色酸化 物）	良好	口縫1/3	
7 三	壺 土加厚 包含層	口径 10.0		口縫部外側ヘラミガキ、 内面削痕、輪郭部削痕、下 部ナダ	外：淡灰茶色 内：淡灰灰色	1 mm以下の砂粒を 微量に含む（長石、 雲母、赤褐色酸化 物）	良好	口縫1/3	
8 三	同上 包含層	底深 8.4		体縫部外側ヘラミガキ、内 面ヘラミガキ～押さ え痕	外：淡灰茶色～ 明茶色 内：淡灰茶色	3 mm以下の砂粒を 少量含む（長石、 内閃石、雲母）	良好	底部1/2	
9 三	片口跡 土加厚 包含層	口径 14.0		口縫部外側ヨコナデ、内 面ヘラミガキ、体縫部外側 ナダヘラミガキ、外縫部全 体に朱墨残存	淡灰黃茶色	2 mm以下の砂粒 を微量に含む（長 石、石英、雲母）	良好	口縫1/3	墨斑有り
10 三	壺 土加厚 包含層	口径 13.8		口縫部外側ヨコナデ、内 面ヘラミガキ、体縫部外側 ナダヘラミガキ、内面ヘラ ミガキ	孔灰茶色	1 mm以下の砂粒を 少量含む（長石、 石英、雲母、赤褐色 酸化物）	良好	壺部のみ	墨斑有り
11 三	同上	口径 11.2		体縫部内外ヘラミガキ、 底縫部内外ヨコナデ、内 面に接合痕残存	乳灰色	3 mm以下の砂粒を 多量に含む（長石、 雲母）	良好	縫部のみ	

縁部片のみの壺、5は底部片のみの壺である。6は畿内第V様式に比定される器台と思われる。7～11は庄内式新相に比定される古式土師器で、7はII縁部片の壺、8は突出する平底の壺底部片、9は鉢、10は杯部のみの器台、11は高杯の脚部片である。

3.まとめ

今回の調査は公共下水道工事の立坑部分の小さな面積の調査であったが、調査の結果、弥生時代前期～古墳時代前期にかけての遺構・遺物を検出することができた。さらに深層部までの上層の堆積状況も確認できた。これらの成果について記す。

弥生時代前期～中期前半の遺物を含む第10層と同時期のものは、当調査区より北へ約130mのところで昭和56年度市教委調査①で土坑と思われる遺構及び遺物包含層を検出している。また北東へ約140mのAT92-07の調査②、同じく北東へ約170mのAT89-05の調査③でも遺物包含層を検出している。さらに東へ約200mのAT92-10の調査④・AT93-13の調査⑤では濃密な遺物包含層を検出しており、集落域の中心付近と思われる。しかし、当調査区の北西へ約110mのAT94-17の調査⑥・西へ約300mのAT94-16の調査⑦ではこの時期のものは検出していないことから、今回の調査地周辺は集落域の西端付近に位置することが想定できる。

弥生時代中期後半～後期の時期の範疇に入るものと考えられる溝状遺構が検出している。この溝は南東へ約130mのAT93-11の調査で検出している溝状遺構と非常によく似た堆積であり、溝の方向の位置関係から同一の溝ないしは関連する溝の可能性が強い。

古墳時代前期の時期のものは第9層上面で集落遺構と考えられる遺構が検出している。この時期のものは調査地周辺の調査でも検出しており、集落域の規模及び範囲を想定する一資料となるものである。

参考文献

- ① 高木 真光 1983.8 「第6章 跡部遺跡（春日町1丁目51番地）」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報 1980・1981年度』八尾市教育委員会
- ② 西村 公助 1983「11. 跡部遺跡」『昭和57年度における埋蔵文化財発掘調査－その成果と概要－』（財）八尾市文化財調査研究会
- ③ 米田 敏幸 1984「第6章 跡部遺跡発掘調査概要報告」「昭和58年度事業概要報告』（財）八尾市文化財調査研究会
- ④ 成海 佳子 1988「19. 跡部遺跡」『八尾市文化財調査研究会年報 昭和62年度』（財）八尾市文化財調査研究会
- ⑤ 西村 公助 1989「19. 跡部遺跡（第4次調査）」『八尾市文化財調査研究会年報 昭和63年度』（財）八尾市文化財調査研究会
- ⑥ 成海 佳子 1991「跡部遺跡発掘調査報告－大阪府八尾市春日町1丁目出土編録－」（財）八尾市文

化財調査研究会

- ⑦ 米田・西村 1991 「跡部遺跡発掘調査報告」『八尾市文化財紀要5』八尾市教育委員会
- ⑧ 高萩 千秋 1992 「III 跡部遺跡第6次調査(AT91-06)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』(財)八尾市文化財調査研究会
- ⑨ 原田 昌則 1993 「I 跡部遺跡(AT92-7)第7次調査」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』(財)八尾市文化財調査研究会
- ⑩ 原田 昌則 1993 「III 跡部遺跡(AT92-9)第9次調査」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』(財)八尾市文化財調査研究会
- ⑪ 成海 伸子 1994 「I.跡部遺跡第11次調査(AT93-11)」『平成5年度 (財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
- ⑫ 坪田 真一 1994 「2.跡部遺跡第12次調査(AT93-12)」『平成5年度 (財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
- ⑬ 坪田 真一 1994 「3.跡部遺跡第13次調査(AT93-13)」『平成5年度 (財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
- ⑭ 高萩 千秋 1994 「I.跡部遺跡第14次調査(AT93-14)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告42』(財)八尾市文化財調査研究会
- ⑮ 岡田 清一 1994 「5.跡部遺跡第15次調査(AT93-15)」『平成5年度 (財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
- ⑯ 成海 伸子 1995 「I.跡部遺跡第16次調査(AT94-16)」『平成5年度 (財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
- ⑰ 原田 昌則 1995 「2.跡部遺跡第17次調査(AT94-17)」『平成6年度 (財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
- ⑱ 原田 昌則 1995 「3.跡部遺跡第18次調査(AT94-18)」『平成6年度 (財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会



調査区全景（南から）

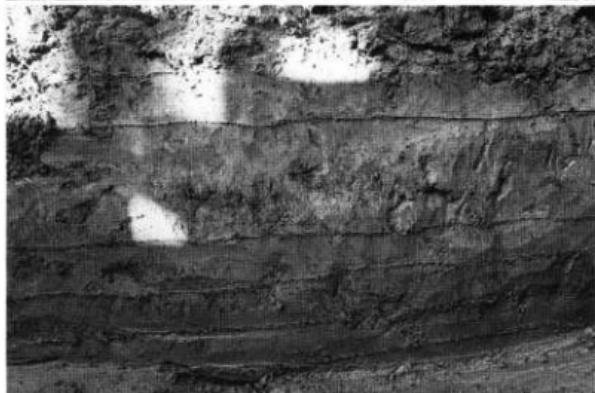


調査区全景（東から）

図版二



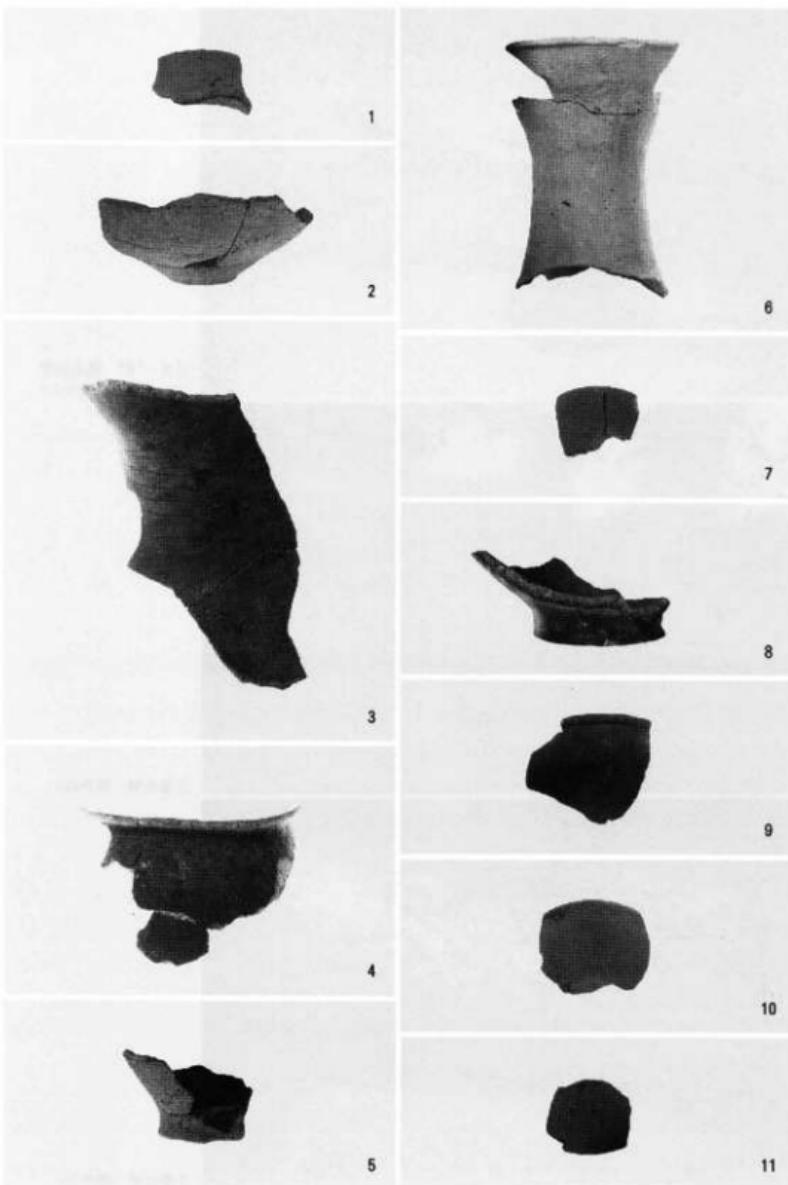
SK-101 検出状況
(南から)



上層北壁 (南から)



下層北壁 (南から)



III 跡部遺跡第21次調查（A T95-21）

第三章

例　　言

1. 本書は大阪府八尾市東太子1・2丁目地内で実施した公共下水道（平成7年度第16工区）工事に伴う発掘調査である。
1. 本書で報告する跡部遺跡第21次調査（AT95-21）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第埋357号 平成7年4月27日）に基づき財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成7年12月4日から平成8年1月31日にかけて、高萩千秋が担当者として実施した。調査面積は147m²を測る。なお、調査においては八田雅美・赤澤茂美・中村百合・西岡千恵子・市森千恵子が参加した。
1. 本書に関わる業務は、遺物実測・図面レイアウトー中村・西岡、トレースー市森が行った。
1. 本書の執筆・編集は高萩が行った。

本　文　目　次

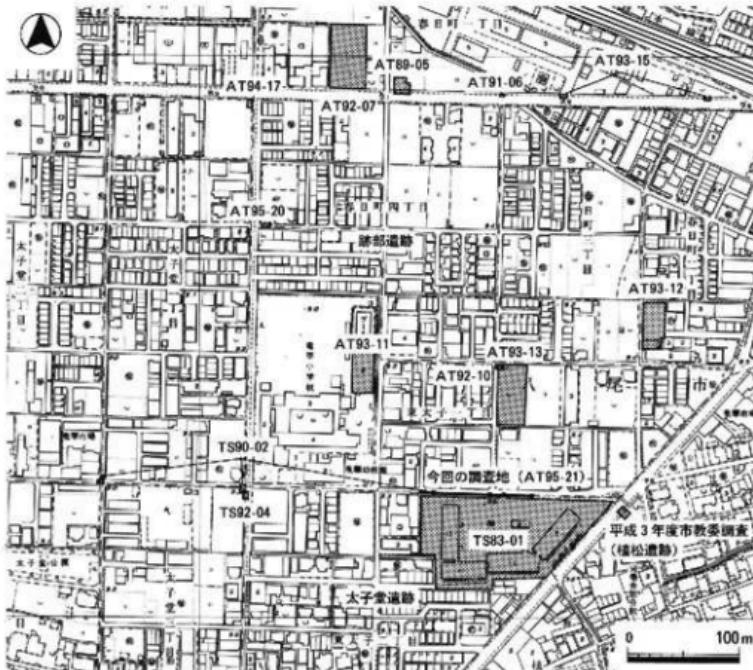
1. はじめに.....	19
2. 調査概要.....	20
1) 調査の方法と経過.....	20
2) 基本層序.....	20
3) 検出遺構と出土遺物.....	22
4) 遺構に伴わない出土遺物.....	23
3.まとめ.....	23

III 跡部遺跡第21次調査 (A T95-21)

1. はじめに

跡部遺跡は八尾市西部に位置し、現在の行政区画では跡部本町1～4丁目、跡部南の町1・2丁目、跡部北の町1・2丁目、春日町1～4丁目、太子堂1・2丁目、東太子1丁目、安中町3丁目にあたる。地理的には旧大和川の主流である長瀬川左岸の沖積地上に立地しており、同一沖積地には東に植松遺跡、西に亀井遺跡、南に太子堂遺跡、北に久宝寺遺跡が接している。

当遺跡では、昭和53年に春日町1丁目内の旧国鉄職員寮建設工事の際に、弥生時代前期の土器、鎌倉時代の瓦が出土したと記録されている。その後昭和56年以降、八尾市教育委員会・当調査研究会により二十数次の発掘調査が行われている。平成元年度に当調査研究会が実施した第5次調査 (A T89-5) では土壤に埋納した銅鋸が検出され注目された。現在までの調査成果から、当遺跡では弥生時代前期から中近世にわたる複合遺跡であることが明らかとなっている。



第1図 調査地位位置図及び周辺図

る。今回の調査地は行政区画で設定している跡部遺跡範囲の境界にあたり、調査地の南側には太子堂遺跡である。また調査地周辺の発掘調査においては太子堂遺跡内で当調査研究会が実施した第1次調査（TS83-1）、第2次調査（TS92-2）が最も接している調査地である。これらの調査成果では古墳時代～奈良時代に比定される遺構・遺物を検出しており、特に奈良時代に作られた精巧な井戸側のある井戸3基を検出している。

2. 調査の概要

1) 調査の方法と経過

今回の調査は公共下水道第7-16工区工事に伴う開削部分の調査で、当調査研究会が跡部遺跡内で実施した第21次調査（AT95-21）にあたる。調査区は開削及び人孔で、面積約147m²を測る。調査期間は、平成7年12月4日～8年1月31日までであった（うち実働21日）。

調査は工事進行に沿って進めた。まず人孔（マンホール）のグリット調査（一辺約2.2m、深さ3.2m）、人孔と人孔の間の開削（幅1.4m、深さ2.6～2.8mで、長さ一日3～6mのペースの掘削）である。調査は22回となり、No.1～No.22と称した。調査では現地表（T.P.+9.6～9.8m）下1.6～1.7mまでを立ち会いのものと機械掘削を実施し、遺構・遺物の検出及び堆積状況等の記録保存を作成した。次いでT.事掘削深度（現地表下2.6～3.2m）まではT.事安全面等の諸条件により簡易矢板を打ち、現地表下1.6～1.7mより下部の掘削について再度立会し、土層の堆積状況を観察した。当地周辺の調査では現地表下約1.2～1.6mに奈良時代に相当する包含層及び遺構面の存在が予想されていた為、想定される土層については機械で徐々に掘削を行った。また下層の掘削についても遺構及び遺物の確認に努めた。

2) 基本層序

調査は最終的に東西方向の長いトレンチを開けたかたちとなった。トレンチ南側では平行して水道管が埋設されており、南壁はほとんどが攪乱されていた。土層状況は北壁の観察のみである。層序はトレンチ全体でみられる10層を抽出して基本層序とした。以下、基本層序について記す。

第1層 盛土（層厚50～120cm）。道路下は、アスファルト・パラス・盛り土が堆積している。

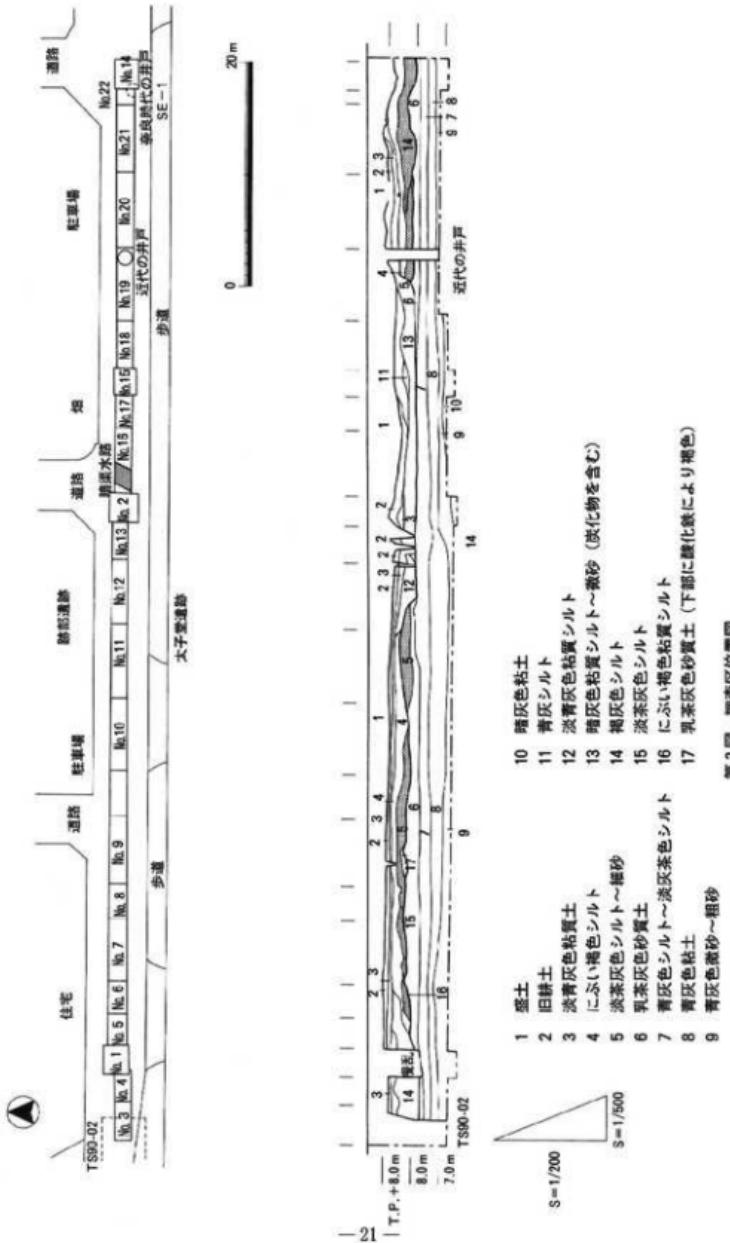
また、公共（水道・ガス・排水管等）施設の埋設工事で攪乱なしは削平を受けている。

第2層 IH耕土（層厚20cm前後）。調査区中央では削平されており、みられない。

第3層 淡青灰色粘質土（層厚5～15cm）。耕作土の床土。

第4層 にぶい褐色シルト（層厚20～40cm）。褐色の斑点、部分的に層下部で酸化鉄により帶状の明褐色がみられる。

四 跡部遺跡第21次調査 (AT95-21)



- 第5層 淡茶灰色シルト～細砂（層厚10～30cm）。奈良時代の土師器・須恵器の小片がごく少量含まれている。
- 第6層 乳茶灰色砂質土（層厚20～50cm）。奈良時代の遺構面と考えられる。上面はやや起伏がみられる。
- 第7層 青灰色シルト～淡灰茶色シルト（層厚20～30cm）。ほぼ水平に堆積する。
- 第8層 青灰色粘土（層厚20～30cm）。ほぼ水平に堆積する。
- 第9層 青灰色微砂～粗砂（層厚40cm前後）。上位が細かく、下部に行くに従い砂粒が粗くなる。洪水層と考えられる。
- 第10層 暗灰色粘土（層厚20～30cm）。炭化物が斑点状に含まれている。

以上、基本層序である（第2図の断面図を参照）。トレンチの断面状況から言えることは中央付近に旧耕土より落込む層がある。これは農耕用水路と考えられる。第5層は奈良時代の包含層で、東側がやや濃厚である。第6層は奈良時代の遺構面と思われるが若干の起伏がみられ、平坦ではないようである。下層（第7～10層）ではほぼ水平な堆積を呈し、奈良時代以前の遺構面及び遺物包含層とみられる土層は認められなかった。

3) 検出遺構と出土遺物

調査の結果、現地表下約1.2～1.6m（標高8.5～9.0m）の第5層で奈良時代前半の包含層を検出した。その下の第6層上面で井戸1基（SE-1）を検出した。以下、工事掘削深度までの土層では遺構・遺物は認められなかった。遺物は奈良時代の包含層内から約十数点出土した程度である。以下、検出した遺構について記す。

井戸（SE）

SE-1

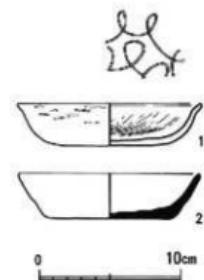
調査区東部のNo.15とNo.22の調査で検出した。井戸は北半部のみの検出で上部は水道管理設工事による掘削で削平されており、井戸掘方の辺位は不确定である。また下部は工事掘削深度（現地表下2.6m）までしか掘削できず、井戸の底部は確認することができなかった。わかったことは板材を縦に立て丸く並べて組んだ井戸である。板材には、太子堂遺跡第1次調査（TS83-1）のSE-1のくり抜き材を使用した井戸と同じ様な板材が使用されているようで、井戸の作りもよく似たものと思われる。遺物は（井戸内部の掘削ができなかつたため）出土していない。井戸の時期については諸条件を考慮にいれて考えられると奈良時代に比定される可能性がある。

4) 遺構に伴わない出土遺物

第5層内よりごく少量の土師器・須恵器の小片が出土した。図示できたものは2点である。

平城京Ⅲ期に比定される土師器の杯（1）と陶邑（中村）編年のV型式I～II段階に比定される須恵器の杯身（2）である。1は口径13.0cm、器高3.0cmを測り、色調は外面－明茶褐色・内面－淡灰茶色である。胎土は精良で、長石・赤褐色酸化粒など砂粒を少量含んでいる。調整は内面底面に二重の螺旋暗文、螺旋暗文から口縁部の端部付近まで放射状暗文を施している。（2）は口径12.8cm、器高3.2cmを測り、色調は淡青灰色である。胎土は堅緻である。調整は口縁部内外面ともに回転ナデ、底面外面は回転ヘラケズリを施す。これらの遺物は井戸（SE-1）の検出した付近で出土したものである。

また、調査区南部で太子堂遺跡第1次調査（TS87-1）で出土している奈良時代の遺物とはほぼ同時期である。



第3図 遺構に伴わない出土遺物実測図



3.まとめ

今回の調査は公共下水道工事に伴う東西道路下部分の開削調査であった。道路南端から南側は太子堂遺跡が広がっており、当調査区に隣接する太子堂遺跡第1次調査（TS83-1）、また調査区西端に接した第2次調査（TS90-2）第2区の調査成果を参考に調査を進めた。調査区は東西方向に長いトレーナーを断続的にあけた調査となった。調査の結果、調査区東部で太子堂遺跡第1次調査で検出された奈良時代の遺構及び遺物を検出することができた。調査区層序の第6層上面から集落遺構に関連する井戸を検出しておらず、奈良時代の集落域が太子堂遺跡から跡部遺跡の南部に広がっていることが明らかとなった。奈良時代の集落域の規模及び範囲を推定する一資料となるものである。

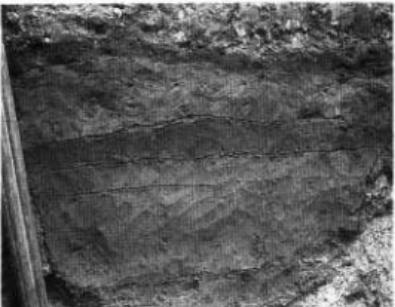
参考文献

- ① 駒沢 敦 1993『I 第1次調査(TS83-1)発掘調査概要報告』『太子堂遺跡<第1次調査・第2次調査報告>』八尾市文化財調査研究会報告36
- ② 成海 佳子 1991『跡部遺跡発掘調査報告－大阪府八尾市春日町1丁目出土銅鐸－』(財)八尾市文化財調査研究会

- ⑩ 米田・西村 1991「跡部道路発掘調査報告」『八尾市文化財紀要5』八尾市教育委員会
- ⑪ 高萩 千秋 1992「XⅢ 跡部遺跡第6次調査(AT91-06)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』(財)八尾市文化財調査研究会
- ⑫ 成海 佳子 1994「1.跡部道路第11次調査(AT93-11)」「平成5年度 (財)八尾市文化財調査研究会事業報告」(財)八尾市文化財調査研究会
- ⑬ 坪田 真一 1994「2.跡部遺跡第12次調査(AT93-12)」「平成5年度 (財)八尾市文化財調査研究会事業報告」(財)八尾市文化財調査研究会
- ⑭ 坪田 真一 1994「3.跡部遺跡第13次調査(AT93-13)」「平成5年度 (財)八尾市文化財調査研究会事業報告」(財)八尾市文化財調査研究会
- ⑮ 高萩 千秋 1994「X 太子堂遺跡第5次調査(TS93-05)」『財團法人八尾市文化財調査研究会報告42』(財)八尾市文化財調査研究会



No. 1 (南西から)



No. 1 北壁 (南から)



No. 1 (南から)



No. 2 (北西から)



No. 2 (西から)



No. 3 (西から)



No. 4 (西から)



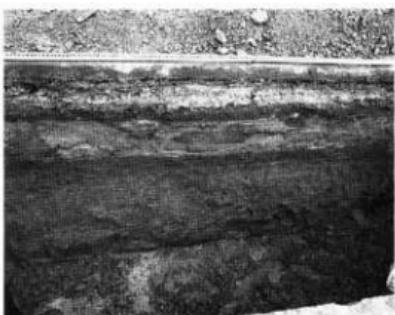
No. 4 北壁 (南から)



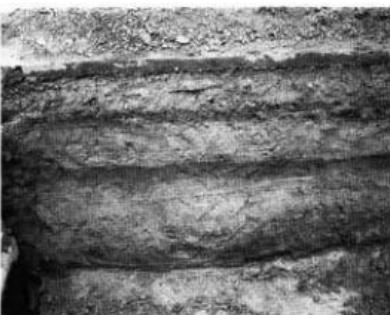
No. 5 北壁 (南から)



No. 5 (南から)



No. 5 北壁 (南から)



No. 6 北壁 (南から)



No. 6 (西から)



No. 7 (西から)



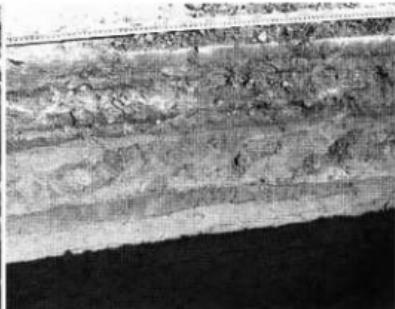
No. 7 北壁 (南から)



No. 9 北壁 (南から)



No. 8 北壁 (南から)



No. 8 北壁 (南から)



No.9 (西から)



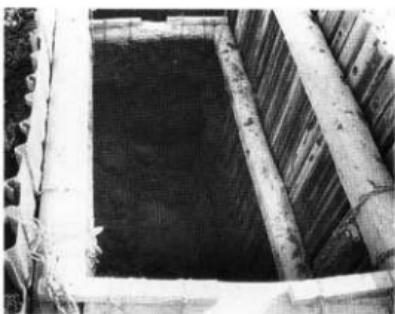
No.10 北壁 (南から)



No.10 (西から)



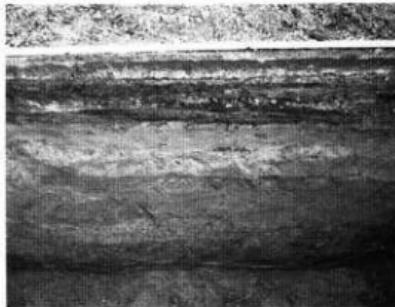
No.11 北壁 (南から)



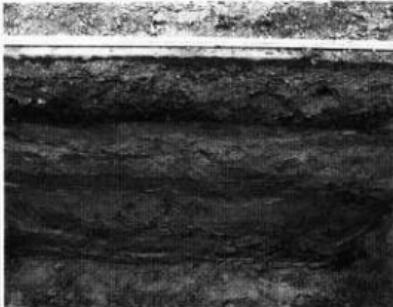
No.11 (西から)



No.11 (西から)



No.11北壁（南から）



No.12北壁（南から）



No.12（西から）



No.13（西から）



No.13北壁（南から）



No.14（東から）



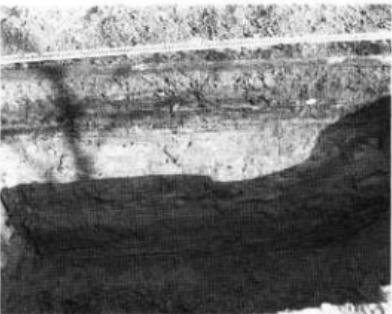
No.15 (西から)



No.15北壁 (南から)



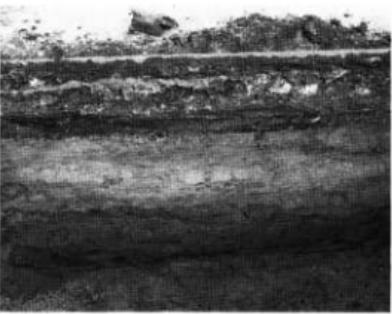
No.16 (西から)



No.17北壁 (南から)



No.17北壁 (南から)



No.18北壁 (南から)



No.18 (東から)



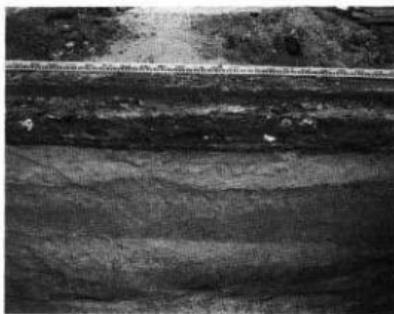
No.18北壁 (南から)



No.18北壁 (南から)



No.19 (西から)



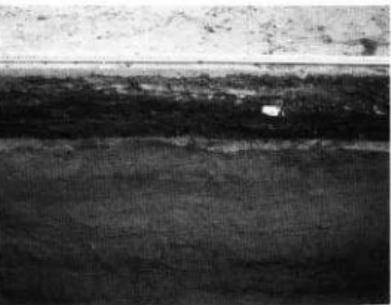
No.20 (南から)



No.20 (西から)



No.20北壁（南から）



No.21北壁（南から）



No.21（西から）



No.21北壁（南から）



No.22（西から）



No.22北壁（南から）

IV 太田遺跡第2次調査(OOT95-2)

調査文書

例　　言

1. 本書は大阪府八尾市太田2・3・5丁目地内で実施した公共下水道工事（平成6年度第7工区）に伴う発掘調査である。
1. 本書で報告する太田遺跡第2次調査(OOT95-2)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第埋318-3号 平成6年9月22日）に基づき財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成7年6月12日から平成7年8月28日にかけて、中野篤史・西村公助を担当者として実施した。調査面積は77.81m²を測る。なお、調査においては中西明美、西村和子が参加した。
1. 本書に関わる業務は、遺物実測－図面薰、図面レイアウト－トレース－西村（和）、西村（公）が行った。
1. 本書の執筆、編集は西村公助が行った。

本　文　目　次

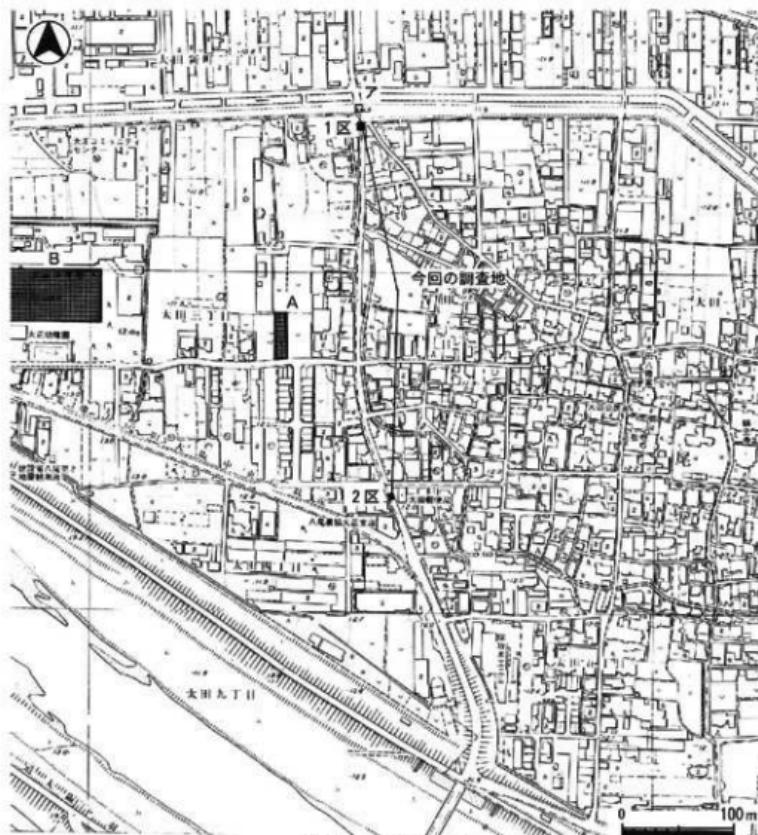
1.はじめに.....	33
2. 調査概要.....	34
1区.....	35
1) 基本層序.....	35
2) 検出遺構と出土遺物.....	36
2区.....	37
1) 基本層序.....	37
2) 検出遺構と出土遺物.....	39
3.まとめ.....	40

IV 太田遺跡第2次調査 (OOT95-2)

1. はじめに

八尾市の南部に位置する太田遺跡は、南から北に伸びる羽曳野丘陵の縁辺部に位置する。遺跡の推定範囲は、八尾市の太田を中心に、東西約0.5km・南北約1.3kmの地域を占め、現在の行政区画では、太田3・4・9丁目、太田新町1・3丁目にかけて存在している。

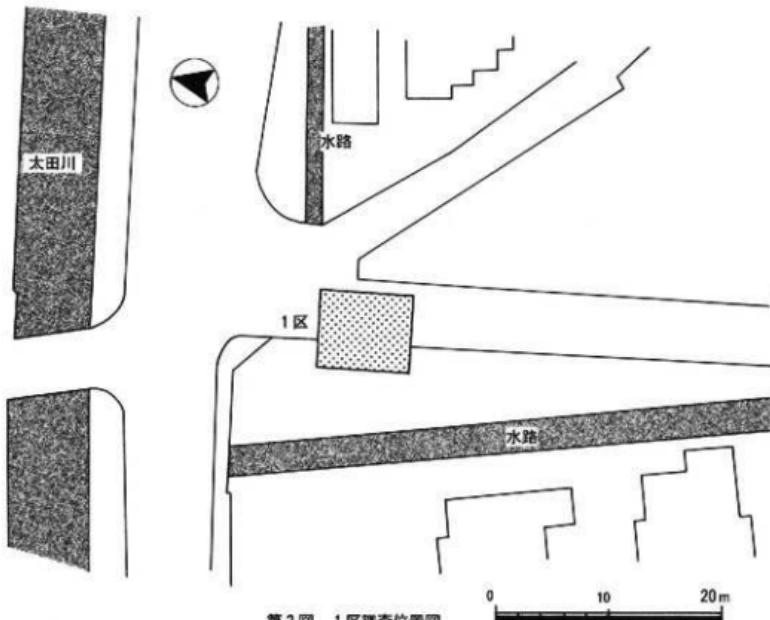
当遺跡の周辺には、南に大正橋遺跡、津堂遺跡、西に八尾南遺跡、北に木の本遺跡がある。東には、現在の地名を「沼」と呼び、その名が示すように湿地帯であったものと推定される。



第1図 調査地周辺図

地図番号	略号	調査期間	調査原因	調査地	調査機関	備考
①	OOT95-02	H070612～0628	公共下水道	八尾市太田2・3・5丁目地内	(財)八尾市文化財調査研究会	今回の調査
A	93-81	H060524～0525	共同住宅建設	八尾市太田3丁目139	八尾市教育委員会	
B	94-149	H060728～0729	公共下水道	八尾市太田3丁目183	八尾市教育委員会	
ア		H021003～1008	公共下水道	八尾市3丁目	大阪府教育委員会	

第1表 太田遺跡発掘調査一覧表(調査地周辺)



第2図 1区調査位置図

同遺跡内では、近年数件の発掘調査を実施している。なかでも、今回の調査地の北約10m地点では公共下水道に伴う発掘調査を大阪府教育委員会が行っており、河川を検出している。^{註1}

2. 調査概要

今回の調査は、公共下水道工事に伴って破壊が予測される立坑2箇所(面積77.81m²)を対象に実施した。調査は北側の調査区を1区(55.50m²)、南側の調査区を2区(22.31m²)と呼称した。

現地表面から1.5mまでを機械により掘削し、以下0.5mは人力掘削による調査を実施した。また調査終了後、工事掘削最終深度の現地表下約6.7mまでの土層堆積状況の観察を行った。

1区

1) 基本層序

第1層は、盛土で層厚0.5~0.6mを測る。第2層は近現代の耕作土で層厚0.2mを測る。第3層~第6層は中世から近世の耕作土と思われる。第9、10層は自然河川1の砂の堆積層であり、中世頃にその機能を失っている。第13層は、遺物包含層で層中より弥生土器、古式土師器破片が出土していることから、弥生時代末~古墳時代に比定される包含層である。第15、16、17、18、19層は落ち込み状の堆積で、これらの層からは遺物は出土していない。第22層(河川2)、第24~25層(河川3)は河川跡の砂の堆積である。これらの砂層からは遺物は出土していない。

第1層 盛土。層厚0.5~0.6m。上面の現地表面の標高は、T.P.+11.7mである。

第2層 耕土。層厚0.2m。近現代の耕作土。

第3層 黄褐色土。層厚0.25m。中世から近世の耕作土。

第4層 黄褐色土。層厚0.1~0.15m。中世から近世の耕作土。

第5層 褐色混灰色土。層厚0.1m。中世から近世の耕作土。

第6層 黄橙色混灰色粘土。層厚0.15m。中世から近世の耕作土。

第7層 青灰色粘土。層厚0.2m。中世のベース面。

第8層 灰色粘土。層厚0.4m。

第9層 黄橙色砂。層厚1.1m。レンズ状の堆積、河川跡1。

第10層 青灰色粘土と砂のブロック土。層厚0.25m。河川1の一時的な底。

第11層 灰色砂。

第12層 灰褐色粘土。層厚0.2m。

第13層 黒褐色粘土。層厚0.15~0.2m。古墳時

代前期の壺の口縁(1)、弥生時代に比

定される壺の底部(2)・壺の口縁(3)・

甕の底部(4)が出土した。

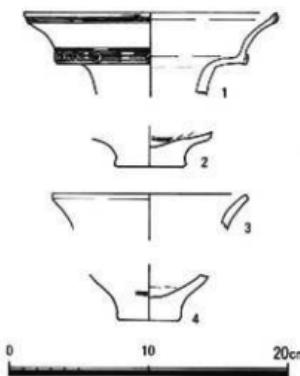
第14層 黒褐色混青灰色シルト。層厚0.1~0.15m。

第15層 濁青灰色粘土。層厚0.2~0.25m。落ち込みの堆積土。

第16層 砂混青灰色粘土。層厚0.1~0.25m。

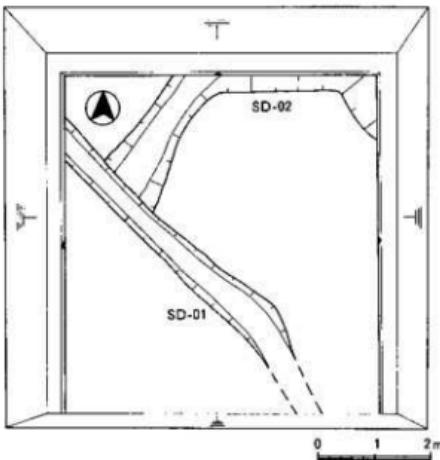
落ち込みの堆積土。

第17層 黑褐色粘土混青灰色粘土。層厚0.55m。



第3図 第13層内出土遺物実測図

- 落ち込みの堆積土。
- 第18層 黒灰色粘土。層厚0.4m。
落ち込みの堆積土。
- 第19層 黒褐色粘土。層厚0.05~0.1m。落ち込みの堆積土。
- 第20層 淡青灰色シルト。層厚0.7m。
- 第21層 黒褐色粘土上のブロック。
- 第22層 淡黄色砂。層厚0.5m。第9、10層より古い河川2。
- 第23層 黒褐色粘土。(ブラックバンド)。層厚0.3~0.5m。
- 第24層 灰色砂。層厚0.9m。河川3。
- 第25層 淡黄色砂。層厚0.3m。河川3。
- 第26層 青灰色粘土。層厚0.1m。
- 第27層 第25層 淡黄色砂。層厚0.3m。河川3。
- 第26層 青灰色粘土。層厚0.1m。
- 第27層 黒褐色粘土(ブラックバンド)。層厚0.35m。
- 第28層 青灰色粘土。層厚0.05m。
- 第29層 黑褐色粘土(ブラックバンド)。層厚0.15m。
- 第30層 青灰色粘土。層厚0.1m。
- 第31層 黑褐色粘土(ブラックバンド)。層厚0.2m。
- 第32層 灰色砂。層厚0.3~0.5m。
- 第33層 青灰色粘土。層厚0.2~0.25m。
- 第34層 灰色砂。層厚0.15~0.2m。
- 第35層 黑褐色粘土(ブラックバンド)。層厚0.2m。
- 第36層 黑褐色混青灰色シルト。層厚0.15m。
- 第37層 青灰色粘土。層厚0.1~0.15m。
- 第38層 青灰色砂。



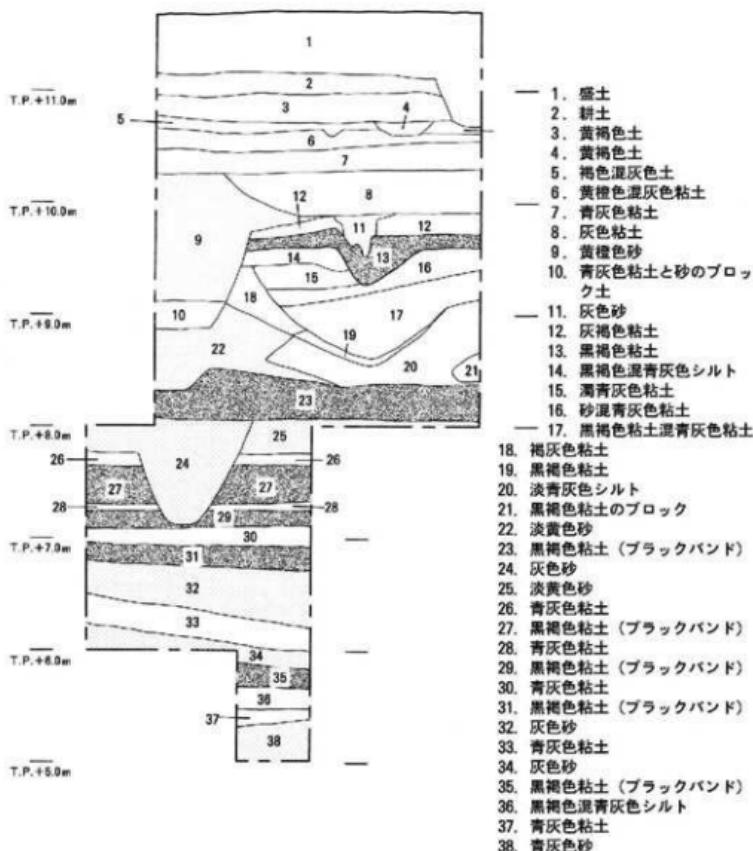
第4図 1区第14・16層上面検出遺構平面図

2) 検出遺構と出土遺物

1区では、第13層を除去した第14、16層上面の標高T.P.+9.6mで溝2条を検出した。

SD-01

調査区内を南東から北西方向に伸びる溝である。検出した溝の長さは、約6mで幅は約0.5



第5図 1区西壁面実測図

~0.7mを測る。深さは約0.3mである。溝の堆積土は、第13層と同じ黒褐色粘土である。溝内からの遺物は出土していない。時期は弥生時代末～古墳時代に比定される。

SD-02

調査区内の北部で、「コ」の字状に屈曲した溝であると思われる南肩部分を検出した。この溝は、SD-01に切られて終わる。検出した溝の長さは約5m、幅は部分的に約0.6~1.0mを測るが大半は調査区外に及び不明である。深さは検出した部分で0.15mを測る。溝の堆積土は第13層と同じ黒褐色粘土である。溝内からの遺物は出土していない。時期は弥生時代末～古墳時代に比定される。

2区

1) 基本層序

第1層は、盛土で層厚1.0mを測る。第2層は近現代の耕作土で層厚0.2mを測る。第3層は、周辺の調査結果（市教育委員会平成5年度調査）から古墳時代後期以降の堆積土と推定され、^{註2}第6層は古墳時代以前の堆積土と推定される。第7層～第13層までは粘土がほぼ水平に堆積している。第14層は砂で時期は不明であるが、河川の堆積土と推定される。

第1層 盛土。層厚1.0m。

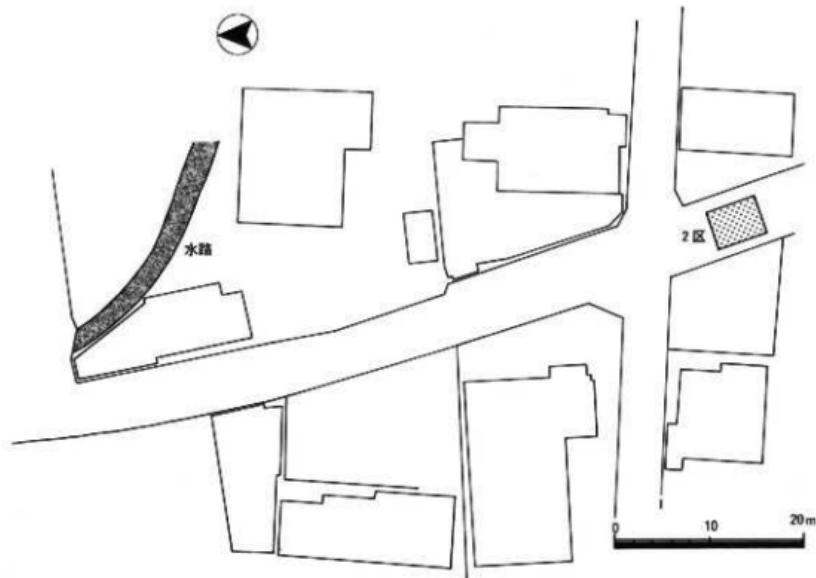
第2層 黒色(5Y2/1)シルト混粘土。層厚0.2m。近現代の耕作土。

第3層 黄褐色(10YR5/8)シルト混粘土。層厚0.2m。古墳時代後期以降の堆積土。

第4層 褐色(10YR4/6)シルト。層厚0.1m。

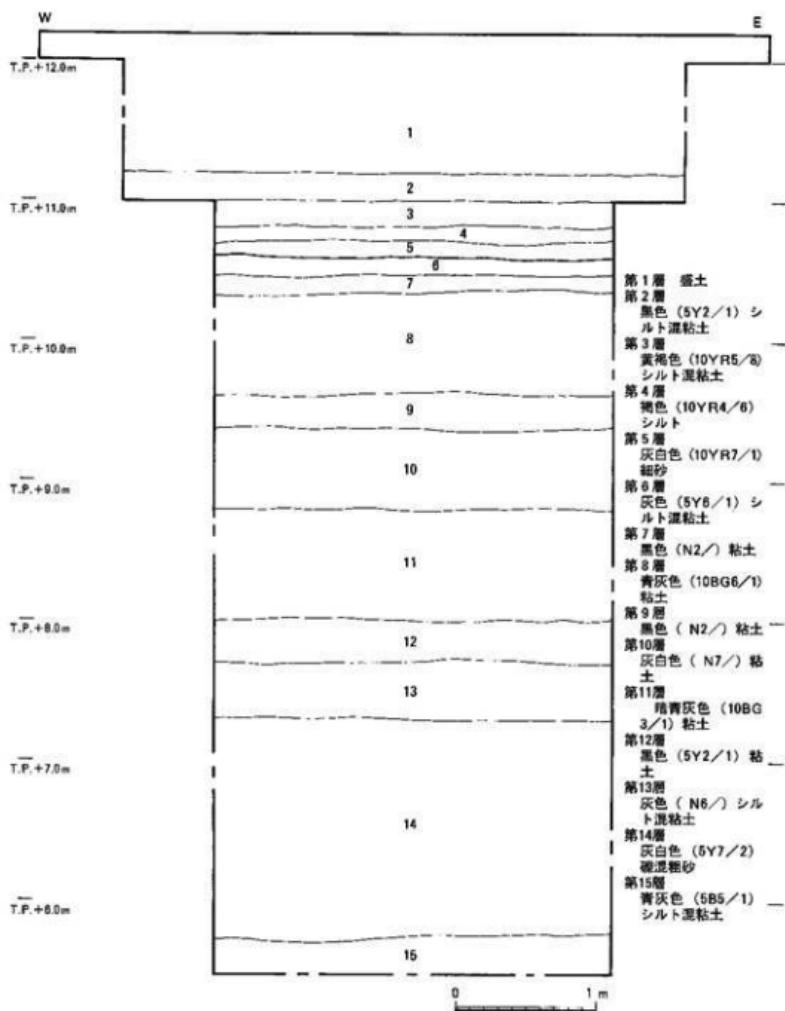
第5層 灰白色(10YR7/1)細砂。層厚0.1m。

第6層 灰色(5Y6/1)シルト混粘土。層厚0.1m。古墳時代以前の堆積土。



第6図 2区調査位置図

- 第7層 黒色 (N2/) 粘土。層厚0.1m。
- 第8層 青灰色 (10BG6/1) 粘土。層厚0.7m。
- 第9層 黒色 (N2/) 粘土。層厚0.3m。



第7図 2区北壁面実測図

- 第10層 灰白色（N7/）粘土。層厚0.6m。
- 第11層 暗青灰色（10BG3/1）粘土。層厚0.8m。
- 第12層 黒色（5Y2/1）粘土。層厚0.3m。
- 第13層 灰色（N6/）シルト混粘土。層厚0.4m。
- 第14層 灰白色（5Y7/2）疊混粗砂。層厚1.6m。
- 第15層 青灰色（5B5/1）シルト混粘土。層厚0.3m以上。

2) 検出遺構と出土遺物

1区では、第5層を除去した第6層上面の標高T.P.+10.6mで調査を行ったが、遺構の検出および遺物の出土はなかった。

3.まとめ

1区の第22層、第24・25層は砂の堆積で、これらの砂層は、平成2年度に大阪府教育委員会註1が発掘調査を行った場所でも確認していることから、同じ河川内の堆土と推定される。

1区では、上記河川が埋没した後の第14と16層上面で、弥生時代末～古墳時代に比定される遺構を検出した。

2区では、遺構の検出および遺物の出土はなかったが、確認した土層堆積のうち第6層は古墳時代以前に対応すると推定されることから、当調査地付近にこの時期の集落が存在していた可能性があると推測される。

註

註1 龜島重則 1990.10『太田遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会

註2 吉田野乃他 1994.3『1. 太田遺跡(93-81)の調査』『八尾市内遺跡平成5年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告29 八尾市教育委員会

参考文献

- ① 米田敏幸他 1995.3『1. 太田遺跡(94-149)の調査』『八尾市内遺跡平成6年度発掘調査報告書Ⅱ』八尾市文化財調査報告32 平成6年度公共事業 八尾市教育委員会
- ② 福田英人 1989.3『八尾南遺跡-旧石器出土第3地点-大阪府文化財調査報告書第36輯』大阪府教育委員会
- ③ 米田敏幸他 1988.3『大正橋遺跡(86-516)の調査』『八尾市内遺跡昭和62年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市教育委員会
- ④ 原田昌則他 1984.3『木の本遺跡 八尾空港整備事業に伴う発掘調査-』(財)八尾市文化財調査研究会報告4 財團法人八尾市文化財調査研究会
- ⑤ 西村公助 1992.4『太田遺跡第1次調査(OOT'91-1)』『平成3年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』財團法人八尾市文化財調査研究会



1区第14・16層上面全景（南から）



1区西壁面（東から）



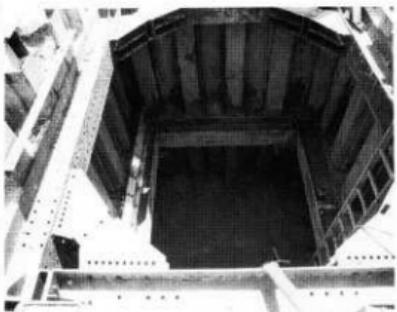
2区調査状況（南から）



2区第6層上面全景（南から）



2区北壁面（南から）



2区下層剥削状況（北から）



V 萱振遺跡第18次調查（K F 95-18）

文 章

例　　言

1. 本書は、八尾市萱振町7丁目地内で実施した公共下水道（平成7年度第10工区）に伴なう発掘調査の報告である。
1. 本書で報告する萱振遺跡第18次調査（K F 95-18）の発掘調査業務は、財団法人八尾市文化財調査研究会が、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第埋153号 平成7年6月30日付）に基づき、八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成7年8月3日～11月9日（実働15日間）にかけて岡田清一を担当者として実施した。調査面積は、約58m²を測る。調査においては辻野優子・吉田由美恵が参加した。
1. 本書に関わる業務は、遺物実測－沢村妙子、図面レイアウト－岡田、図面トレース－北原清子、遺物写真撮影－岡田が行なった。
1. 本書の執筆・編集は岡田が行なった。

本　文　目　次

1.はじめに.....	43
2.調査概要.....	45
1) 調査の方法と経過.....	45
2) 基本順序.....	45
3) 検出遺構と出土遺物.....	47
3.まとめ.....	49

V 萱振遺跡第18次調査 (KF95-18)

1 はじめに

萱振遺跡は、南東から北西方向に流れる旧大和川の主流であった長瀬川の右岸にあたる沖積地上に位置する。遺跡の推定範囲は、楠根川右岸の萱振町を中心に東西約1km・南北約2kmを測る南北方向に長い地域である。現在の行政区画上では、緑ヶ丘1~4丁目、萱振1~7丁目、泉町1~3丁目、桂町1~3丁目、幸町1・3・4・6丁目に所在する。当遺跡の周辺には、北西に山賀遺跡、南に東郷遺跡が隣接し、北の東大阪市域に至っては、新家遺跡・若江遺跡・瓜生堂遺跡が広がっている。また、当遺跡北部の泉町2丁目に位置する西郡天神社は、飛鳥時代後半から奈良時代頃を中心とした地域に勢力をもった編織連一族の氏寺とされる西郡廃寺の推定地が所在する。

当遺跡は現在までに、大阪府教育委員会・八尾市教育委員会においても数次にわたる調



写真1 西郡天神社（南東から）

査が実施されており、弥生時代前期から近世に至る複合遺跡であることが判明している。当遺跡内南部では、昭和57年度に大阪府教育委員会によって実施された八尾市緑ヶ丘2丁目所在の府営住宅建設工事に伴なう調査において、古墳時代前期初頭に比定される土器棺墓を中心とした墓域が確認された。一方、本調査地も含まれる北部では、昭和58年度に同教育委員会によって実施された萱振町7丁目所在の府立八尾北高校建設工事に伴なう調査において、弥生時代前期から中世に至る遺構が数多く検出された。なかでも古墳時代前期に比定される一辺約27mの方墳（萱振1号墳）から発見された日本最大の楕円埴輪をはじめ盾形・草摺形・家形の形象埴輪類は、そのセット関係から古墳の大きさは別として大王陵クラスに匹敵するものとされている。今回の調査地はその南西部に隣接している。さらに本調査地の近隣では北西側、つまり府立八尾北高校の西側に位置する地点で、平成3年度に当調査研究会が実施した調査 (KF91-11^{註3}) があり、ここでは弥生時代後期末から古墳時代初頭の集落域が検出されている。また、平成6年度には、近接したところで今回同様に公共下水道工事に伴なう調査 (KF94-17)^{註4} が実施されており、弥生時代後期から平安時代末期の概ね3時期にわたる埋没河川および埋没水田の堆積層が確認されている。



第1図 調査地周辺図

地図番号	略号	調査期間	調査面積	調査原因	調査地	調査機関	備考
①	KF91-11	H1030827～0924	500	事務所及び 倉庫建設	八尾市梅根町4丁目 1-4-1-7-2.8-2	(財)八尾市文化財 調査研究会	
②	KF94-17	H070313～0331	20	公共下水道	八尾市萱振7丁目	(財)八尾市文化財 調査研究会	
③	KF95-18	H1070803～1109	58	公共下水道	八尾市萱振7丁目地 内	(財)八尾市文化財 調査研究会	今回の調査 本書V
④	KF95-19	H070928～ H080223	38.4	公共下水道	八尾市萱振7丁目地 内	(財)八尾市文化財 調査研究会	今回の調査 本書VI
ア		S58006～S5911	14000	府立八尾北 高等学校建設	八尾市萱振7丁目	大阪府教育委員会	

第1表 薙振道路発掘調査一覧表

2 調査概要

1) 調査の方法と経過

今回の発掘調査は公共下水道工事（7-10工区）に伴なう発掘調査で、当調査研究会が宣振遺跡内で実施する第18次調査にあたる。調査対象となった立坑は1~3区の計3ヶ所で、総面積は約58m²を測る。各立坑の面積及び掘削深度は、1区が面積約7m²・深度約6m、2区が面積約23m²・深度約6m、3区が面積約28m²・深度約5mを測る（※深度については各地区の現地盤からである）。調査の方法は各地区とも現地盤から0.8~1.5mの盛土・擾乱層・旧耕土の堆積層部分を機械により排除した後、以下の工事掘削深度まで層理に従い、機械と人力を併用して掘削・精査に努めた。

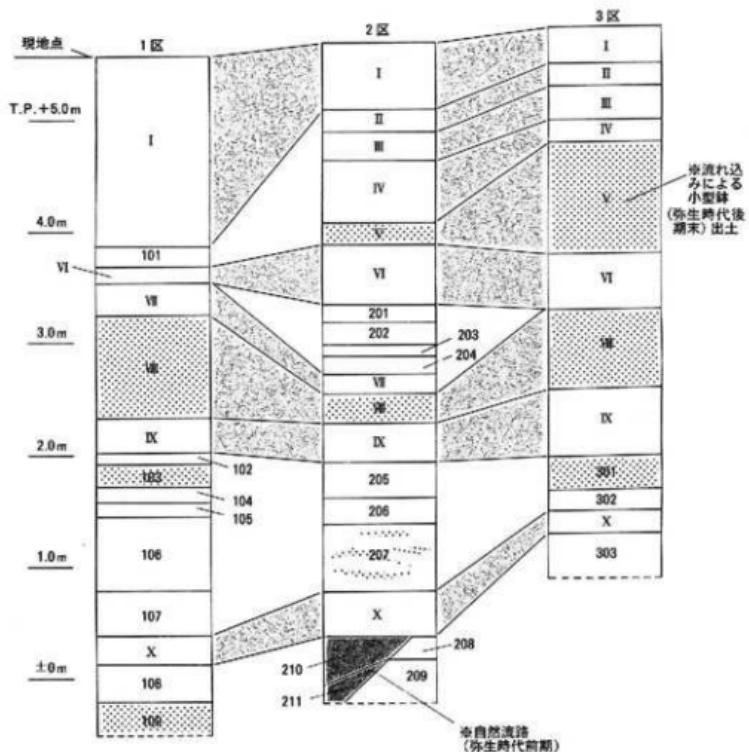
2) 基本層序

各地区的基本層序は第3図に示した通りであるが、ローマ数字のI~Xの10層について、現地での土層断面観察の結果から、各地区を通して普遍的に堆積するとみなされる層理を抽出した。それらに該当しない堆積層については、各地区名の数字をヘッドナンバーとして用い、1区では101層~109層、2区では201層~211層、3区では301層~303層で表わした。以下、各地区を通して対応するI~Xの10層について概説し、各地区別の堆積層については別項で記述する。（※標高はT.P.値を用いた。）

I層：盛土及び擾乱層。道路築造の際にもとの堆積層を削平した後、人為的に外部から運ばれてきた客土によって埋め戻された部分である。層厚は、1区-170cm、2区-60cm、3区-30cmを測る。なお、1区については本調査以前に公共下水道の配管工事により、他の地区に比べて幾分



第2図 各調査区位置図



（層序）

- I - 硬土及び擾乱層。
- II - 旧耕土。
- III - 灰褐色～暗青灰色砂質シルト。
- IV - 黄灰色～黑灰色シルト。
- V - 灰白色～褐色・粗粒砂～粗粒砂。
- VI - 灰色シルト質粘土。
- VII - 灰色シルト。
- VIII - 灰白色細粒砂～極細粒砂。
- IX - 灰色～青灰色粗粒シルト。
- X - 灰色粘土。

- 101 - 暗灰色シルト質粘土
- 102 - 灰色シルト質粘土
- 103 - 灰色細粒砂
- 104 - 淡灰色シルト質粘土
- 105 - 灰黑色粘土
- 106 - 青灰色粘土質シルト
- 107 - 灰色粘土
- 108 - 灰色粘土
- 109 - 灰色粗粒砂

- 201 - 淡灰色粗粒砂混じり粘土質シルト
- 202 - 淡灰色粗粒砂混じりシルト質粘土
- 203 - 灰黑色シルト質粘土
- 204 - 黑灰色砂質シルト
- 205 - 灰色砂質シルト
- 206 - 青灰色砂質シルト
- 207 - 淡灰色シルトと粗粒砂の互層
- 208 - 灰黑色粘土
- 209 - 暗青灰色粘土
- 210 - 灰色シルトと粗粒砂
- 211 - 暗青灰色シルト質粘土

- 301 - 灰白色極細粒砂～シルト
- 302 - 灰黑色粘土質シルト

第3図 各調査区基本層序模式図

か深く擾乱されているが、この部分については八尾市教育委員会によって立ち合い調査が実施されている。その結果、1区の標高4~5m間は2区のII~IV層に対応することが判明している。

II層：旧耕土。周辺の現代の農耕地のレベルと差異がなく、道路築造の際に埋められた現代の耕作土に対応するものであるが、1区については先述の以前の工事によってII層~IV層は削平されている。層厚は、2区・3区とも20cmを測る。

III層：灰褐色~暗青灰色砂質シルト。酸化鉄分が斑点状に付着する。近世の国产陶磁器片が僅かに含まれる。層厚は、2区・25cm・3区・20cmを測る。

IV層：黄灰色~黒灰色シルト。1区には存在しない。層厚は、2区・55cm・3区・20cmを測る。

V層：灰白色~褐色・細粒砂~粗粒砂。1区には存在しない。既往の周辺の調査結果から平安時代末ごろに比定される埋没河川または洪水に起因する堆積層と思われる。層厚は、2区・20cm・3区・100cmを測る。

VI層：灰色シルト質粘土。全地区ともにほぼ同一レベルで堆積する。本層は第17次調査 (KF94-17) 結果から、先述のV層にみられる自然河川または洪水層によって埋没した水田耕土と推測される。本層の上層には酸化鉄分の付着が確認できる。層厚は、1区・15cm・2区・55cm・3区・50cmを測る。

VII層：灰色シルト。3区にはみられない。層厚は、1区・30cm・2区・15cmを測る。

VIII層：灰白色細粒砂~極細粒砂。全地区にみられる。大阪府教育委員会の府立八尾北高校建設工事に伴なう調査結果から層位的に推測すると、弥生時代後期の遺構面で検出された大規模な自然河川と有機的に関連する堆積層ではないかと思われる。層厚は、1区・90cm・2区・25cm・3区・70cmを測る。

IX層：灰色~青灰色細粒シルト。全地区ともにほぼ同一レベルで堆積する。層厚は、1区・30cm・2区・35cm・3区・60cmを測る。

X層：暗灰色粘土。全地区にみられるが、1区から3区へいくほど上面の標高は高くなり、その標高差は約1m前後を測る。腐植質分を多量に包含する。層厚は、1区・25cm・2区・40cm・3区・20cmを測る。

3) 検出遺構と出土遺物

「1区」

1区は第17次調査 (KF94-17) の3区と近接する位置にあり、層序的にはほぼ同等の様相を呈する。遺構については、層位的にVI層が平安時代末頃に埋没したであろう水田耕土の可能

性はあるが、明確に時期決定できる遺物は出土していない。これは2区・3区についても同じである。他に遺構は確認できなかった。遺物については、V層：灰白色細粒砂～極細粒砂から古式土師器の破片が僅かに出土したが、明確な時期は不明である。現地盤の標高は、5.560mを測る。

- 101層：暗灰色シルト質粘土（層厚20cm）。
- 102層：灰色シルト質粘土（層厚10cm）。
- 103層：灰色極細粒砂（層厚20cm）。植物遺体が混入する。
- 104層：淡灰色シルト質粘土（層厚15cm）。
- 105層：灰黑色粘土層（層厚15cm）。腐殖質の泥炭質粘土層である。
- 106層：暗青灰色粘土層（層厚65cm）。
- 107層：暗灰色粘土（層厚40cm）。
- 108層：灰色粘土（層厚40cm）。
- 109層：灰色細粒砂（層厚30cm以上）からの湧水は著しい。

[2]

遺物はIV層から近世の国産陶磁器の破片、V層から須恵器杯身の破片が出土した。遺構としては標高0.4m地点で208層：灰黑色粘土（堆積食質からなる暗色帶、層厚20cm）上面から切り込む自然流路の一方の岸（南岸）を確認した。河川の上面から検出できた最深部までは0.6mを測る。河川の埋土は、上層が210層：灰色シルトと細粒砂（層厚40cm）・下層が211層：暗青灰色シルト質粘土（層厚20cm以上）の2層に分層できる。岸内から遺物は出土しなかったが、既往の周辺の調査結果から層位的に弥生時代前期頃に比定されよう。現地盤の標高は、5.570mを測る。

- 201層：淡灰色細粒砂混じり粘土質シルト（層厚15cm）。
- 202層：淡灰色細粒砂混じりシルト質粘土（層厚20cm）。
- 203層：灰黑色シルト質粘土（層厚10cm）。植物遺体が包含される。
- 204層：黒灰色砂質シルト（層厚15cm）。泥炭質である。
- 205層：灰色砂質シルト（層厚30cm）。
- 206層：青灰色砂質シルト（層厚25cm）。
- 207層：淡灰色シルトと細粒砂の互層（層厚60cm）。
- 209層：暗青灰色粘土（層厚40cm以上）。

[3]

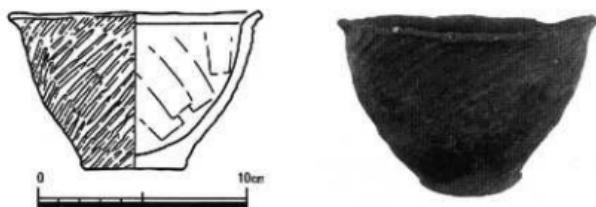
既述したように、本地區では標高3.8～4.8m間で平安時代末頃に比定される砂層（V層）の堆積土層を確認したが、断面にはレンズ状に数条のラミナが観察されるなど、その状況から埋

没河川の可能性もあり、今後周辺の調査に感心がもたれる。また、下層からは流れ込みによるとみられる古式土器片とともに弥生時代後期末（畿内第V様式）に比定される完形品の小型鉢が1点出土した。小型鉢の法量は、口径12.2cm・器高7.4cm・底径5.0cmを測る。調整は内面ヘラナデ・外面タタキ（3本/cm）を施す。色調は茶褐色を呈する。現地盤の標高は、5.580mを測る。

301層：灰白色極細粒砂～シルト（層厚30cm）。植物遺体を包含する。

302層：灰茶色粘土質シルト（層厚20cm）。

303層：オリーブ灰色砂質シルト（層厚40cm以上）。



第4図および写真2-3区 V層内出土遺物

3 まとめ

本調査は当初、既述の大坂府教育委員会の調査地（府立八尾北高校建設に伴なう）に近接していることから、弥生時代から中世に至る各時代の遺構及び遺物が点的ではあるが一部解明されると予想された。しかしながら予想に反し、本調査において顕著な遺構及び遺物が検出されず、弥生時代から中世における居住域あるいは墓域の広がりを解明するまでには至らなかった。そこで本調査の総括として、周辺における既往の調査結果と層位的に検証しながら各時代を概観したい。

2区では標高0.4m地点の208層上面において、層位的に弥生時代前期に比定できよう自然流路を確認することができた。しかしながら出土遺物が伴なわないので時期決定については危惧されるところもあり、今後周辺の調査も含めて未だ検討を要する。次いで弥生時代後期から平安時代末期頃に相当するのが、各地区とも標高2～4m間に堆積するV～W層の砂層と細粒シルト層である。当該期について地形的条件を周辺の調査から概観すると、大阪府教育委員会の調査地（府立八尾北高校建設に伴なう）においては居住域、北西部の当調査研究会が実施した第11次調査 (KF91-11) においても居住域を示唆する遺構が検出され、比較的安定した地盤である北部に対して、仮に府立八尾北高校の南側の市道を目安とすれば、そこを境に本調査区

が所在する南部は水田にみられるような生産域として利用されていたかあるいは沼澤地にみられる空閑地であった可能性が高い。それは出土遺物のほとんど皆無とも言える状況と平断面の観察から造構を示唆する箇所がみられない。さらに加えて、先にも記述したように本部層が含水量の多い砂層及び水成の細粒シルト層を主体とする上層の堆積状況から窺うことができる。また、今回も含めて周辺における既往の調査では、当該期はいずれも河川の検出がみられる。こういった大なり小なりの河川は洪水・氾濫といった人々の生活を脅かす半面、水田をはじめとする生産域には欠くことのできない貴重な水資源をもたらしてきたと言える。やがて比較的安定した土地柄となった中世以降近世まで生産域として踏襲され、現代に至るものと考えたい。今回のような調査は、制約された狭小な調査区域で平面的に造構を捉えることが非常に困難ではあるが視点を変えると、土層層理から人為的營力が加わったものか自然発生的な土地条件であるのかを判断し、遺跡の性格を解明していくことも可能であろう。

註

- 註1 大野薫 1983・3 『豈振遺跡発掘調査概要・I 一八尾市緑ヶ丘2丁目所在』 大阪府教育委員会
註2 広瀬雅信 1985・3 『八尾市文化財紀要Ⅰ - 豈振遺跡発掘調査速報 -』 八尾市教育委員会
註3 高萩千秋 1992・9 『豈振遺跡(第11次調査)』『八尾市文化財調査研究会報告34 八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』(財)八尾市文化財調査研究会
註4 成海佳子 1996 『豈振遺跡(第17次調査)』『豈振遺跡(財)八尾市文化財調査研究会報告52』(財)八尾市文化財調査研究会



写真3 調査地付近遠景(南西から)



1区周辺（南から）



1区完成状況（南東から）



2区周辺（南西から）



2区北壁面 標高3.0~4.0m付近（北から）



3区周辺（西から）



3区北壁面 標高2.0~3.0m付近（南から）



人力鋤削状況（2区北から）



壹振1号墳跡標石（府立八尾北高校 南西側 西から）

VI 萱振遺跡第19次調查（K F 95-19）

大 二 十 一 葵 一 今

例　　言

1. 本書は大阪府八尾市萱振町7丁目地内で実施した公共下水道工事（平成6年度第17工区）に伴う発掘調査である。
1. 本書で報告する萱振遺跡第19次調査（K F 95-19）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第埋200-3号 平成7年7月18日）に基づき財團法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成7年9月28日から平成8年2月23日（実働7日間）にかけて、西村公助を担当者として実施した。調査面積は38.4m²を測る。なお、調査においては中西明美、西村和子が参加した。
1. 本書に関わる業務は、遺物実測—縦口薰、図面レイアウト・トレースー西村（和）、西村（公）が行った。
1. 本書の執筆、編集は西村公助が行った。

本　文　目　次

1.はじめに.....	53
2.調査概要.....	54
1) 調査の方法と経過.....	54
2) 基本順序.....	54
3) 検出遺構と出土遺物.....	54
3.まとめ.....	56

VI 萱振遺跡第19次調査 (K F 95-19)

1. はじめに

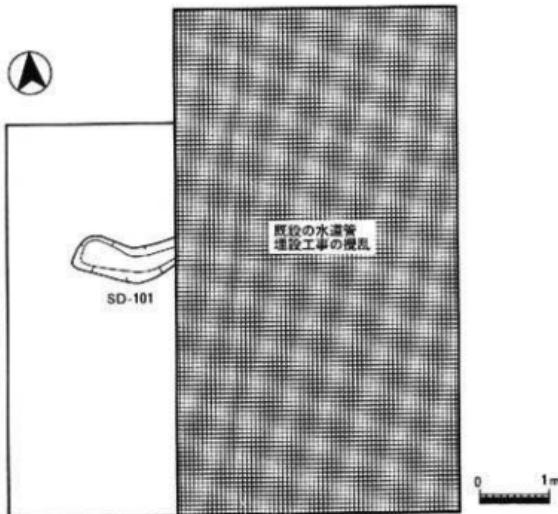
八尾市の北部に位置する萱振遺跡は、南東から北西方向に流れる旧人和川の主流であった長瀬川の右岸の沖積地上に位置する。遺跡の推定範囲は、八尾市の萱振町を中心とし、東西約1km・南北約2kmの南北に長い地域を占め、現在の行政区画では、緑ヶ丘1~4丁目、萱振1~7丁目、泉町1~3丁目、桂町1~3丁目、幸町1・3・4・6丁目にかけて存在している。



第1図 調査位置図

同遺跡内では、近年20数件の発掘調査を実施している。そのなかでも、今回の調査地の西約100m地点では大阪府立八尾北高等学校建設に伴う発掘調査を大阪府教育委員会が行っており、古墳時代前期の古墳を検出している他、弥生時代前期から近世に至るまでの遺構の検出や遺物の出土があったと報告されている。^{註1)}

当遺跡の周囲には、東に弥生時代前期以降近世に至るまでの水田遺構を検出している福万寺遺跡、西に弥生時代前期の集落遺構を検出している美國遺跡、北西に弥生時代前期の集落遺構を検出している山賀遺跡が隣接している。

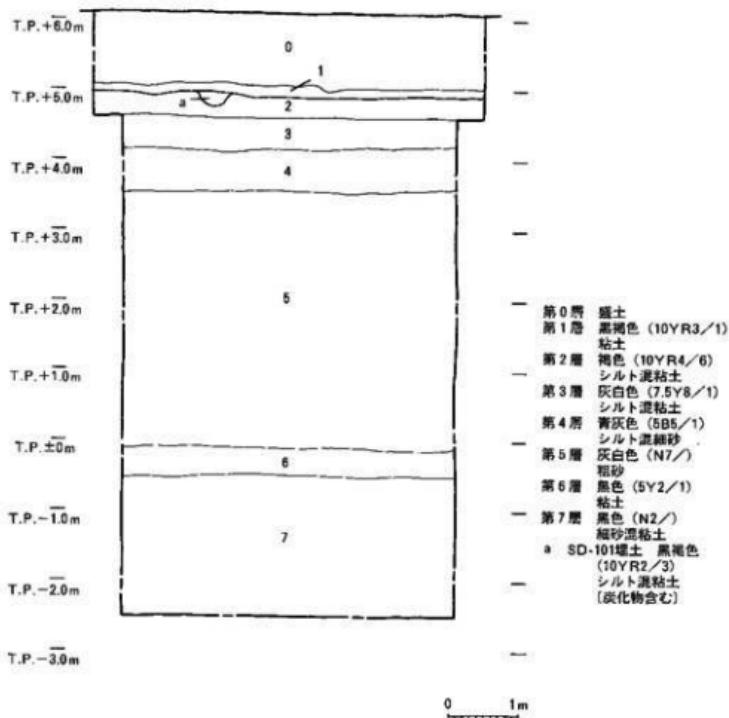


第2図 第2層上面検出遺構平面図

2. 調査概要

1) 調査の方法と経過

今回の調査は、公共下水道工事に伴って破壊が予測される立坑1個所（面積38.4m²）を対象に実施した。現地表面から1mまでを機械により掘削し、以下0.3mは人力掘削による調査を実施した。また調査終了後、工事掘削最終深度の現地表下約8.6mまでの土層堆積状況の観察を行った。



第3図 東壁面実測図

2) 基本層序

第0層 盛土。層厚1.0m。現地表面の標高は、T.P. +6.1mである。

第1層 黒褐色 (10YR3/1) 粘土上。層厚0.15m。

近世の築堤層と推定される。

第2層 褐色 (10YR4/6) シルト混粘土上。層厚0.3m

m. 上面で平安時代末期の遺構を検出した。

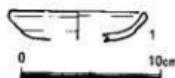
上面の標高は、T.P.+4.9mである。

第3層 灰白色 (7.5Y8/1) シルト混粘土。層厚0.4m。

第4層 青灰色 (5B5/1) シルト混細砂。層厚0.6m。上面の標高は、T.P.+4.2mである。

第5層 灰白色 (N7/)
粗砂。層厚3.6m。

第4層と第5層は古墳時代初頭以前の河川の堆積と推定される。



第4図 SD-101内出土遺物

第6層 黒色（5Y2/1）粘土。幅約0.4m。

第7層 黒色（N2/）細砂混粘土層厚2.0m以上。粘土の中に砂がブロック状に入り交じっている

3) 検出遺構と出土遺物

第1層を除去した第2層上面の標高T.P.+4.9mで溝1条（SD-101）を検出した。

SD-101

調査区内を東西方向に伸びる溝で、東は水道管埋設工事により削平されている。西端は北側へ曲がり途切れている。幅約0.5m、深さ約0.2mを測る。溝の埋土は、黒褐色（10YR2/3）シルト混粘土〔炭化物含む〕である。溝内からは、12世紀後半頃の土師器の皿（1）が出土した。

第4層上面で河川の堆積を検出した。

河川

第4層と第5層が河川の堆積層である。河川の堆積土のうち第5層は粗い砂で、厚み3.6mと深く、流れが激しかった時の堆積状況を示すものであった。第4層は細かい砂であり、流れが緩やかになった時の堆積を示している。河川の深さは約4.3mであることがわかった。第4層と第5層内からは遺物の出土はなく、また、上層の第3層や第2層内からも遺物が出土していないことから、河川の埋没した時期等の詳細は不明である。

しかし、今回の調査地の北西約100m地点での大阪府教育委員会調査地では、古墳時代初頭以前に埋没したと推定される河川を確認している。^{註1}この河川は北西方向に流れるものと北方向に流れるもので、幅約30m、深さ5m以上、上層細砂～シルト・中層から下層中砂～細礫の堆積土である。今回確認した河川の堆積状況は、上記大阪府教育委員会調査地で検出した河川に似ており、また、大阪府教育委員会調査地の南西に今回の調査地が位置しており、流れの方向はほぼ同じと考えられる。このことから、今回検出した河川の埋没時期は古墳時代初頭以前である可能性が高いと推定される。

3.まとめ

今回の調査では、古墳時代初頭以前に埋没したと推定される河川の堆積層（第4層・第5層）と平安時代末期の溝を検出した。

平安時代末期のものは、溝1条（SD-101）である。今回の調査地の東約20mには式内社の加津良神社があり、今回は溝1条のみの検出であったが、近接した地域には同神社に伴う遺構が存在している可能性が高いと考えられる。

註

註1 広瀬正信他 1985・3 「音振遺跡発掘調査速報」『八尾市文化財紀要1』八尾市教育委員会

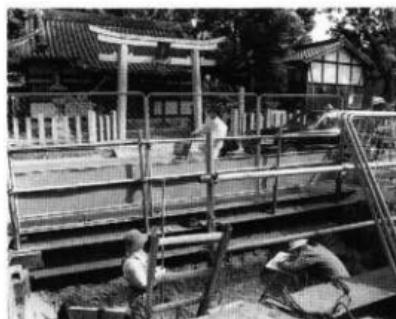
図版一



第2層上面検出遺構全景（北から）



東壁面（西から）



調査地周辺（西から）



下層掘削状況（西から）



VII 萱振遺跡第20次調查（K F 95-20）

二〇〇〇年六月

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市幸町5・6丁目地内で実施した公共下水道工事（平成7年度第21工区）に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する萱振遺跡第20次調査（K F 95-20）の発掘調査の業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第理418-3号 平成7年10月31日）に基づき、財團法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成8年1月16日から1月26日（実働4日間）にかけて、高萩千秋・原田昌則を担当者として実施した。調査面積は43.2m²を測る。調査においては市森千恵子・岸田靖子・中西明美・中村百合・西岡千恵子・西村和子が参加した。
1. 内業整理は、現地調査終了後、隨時実施し平成8年9月30日に完了した。
1. 本書作成に関わる業務は、図面トレースー北原清子。
1. 本書の執筆・編集は原田が行った。

本 文 目 次

1.はじめに.....	59
2.調査概要.....	60
1) 調査の方法と経過.....	60
2) 基本層序.....	60
3.まとめ.....	62

VII 萱振遺跡第20次調査 (KF95-20)

1. はじめに

萱振遺跡は、大阪府八尾市の中央部から北部に位置する旭ヶ丘5丁目、緑ヶ丘1～3丁目、萱振町1～7丁目、北本町3・4丁目、泉町1～3丁目、桂町1・2丁目、幸町1・3・4・6丁目に所在する弥生時代中期から鎌倉時代に至る複合遺跡である。

地理的には、河内平野内を北西方向に流下する長瀬川と玉串川に挟まれた低位沖積地上に位置している。この低位沖積地は、八尾市二俣地区付近から北西方向に約10kmにわたって扇状に広がるもので、そのほぼ中央部の最も低いところを北西方向に楠根川が流下している。萱振遺跡は、この楠根川流域に沿った東西0.5～0.9km、南北2kmの広い範囲に展開している。

遺跡範囲北部の泉町2丁目、幸町1・3丁目、桂町2丁目一帯では、昭和55年度以降に八尾市教育委員会、当調査研究会により継続的に発掘調査が実施されており、弥生時代後期から近世に至る遺構・遺物が検出されている。また、泉町2丁目に鎮座する天神社付近が飛鳥時代後



第1図 調査地周辺図

半の創建とされる西郡廃寺の寺域に推定されており、これら一連の調査で西郡廃寺に関連した屋瓦の山上が認められている。

今回の発掘調査は、幸町5・6丁目地内で計画された八尾市公共下水道工事（平成7年度第21工区）に伴うもので、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づき、八尾市・八尾市教育委員会・（財）八尾市文化財調査研究会との間で取りかわした協定書締結後、現地調査を実施した。

2. 調査概要

1) 調査の方法と経過

今回の発掘調査は公共下水道工事（7-21工区）の立坑設置に伴うもので、鋼矢板で囲繞された東西幅6.0m、南北幅7.2m、面積約43.2m²を調査対象とした。調査では、現地表下0.7m以下を、工事の進捗状況に合わせて機械掘削と人力掘削を併用して層理毎に遺物の包含状況と生活面の有無の確認に努め、最終的には現地表土下5.95m（T.P.-1.1m）迄を調査対象とした。調査の結果、上層から調査最終面に至るまで、粘土および粘質シルト層と極細粒砂～細粒砂を主とする土層が交互に堆積する層相を呈しており、出土遺物も皆無であった。以上の調査結果から、調査地点付近では近世時期に至るまで、自然河川が存在したことが窺われる。

2) 基本層序

現地表下0.7~0.9m迄が調査前に削平を受けており、旧耕土等の存在は確認できなかった。

第0層 客土。層厚1m前後。

第1層 淡茶灰色細粒砂。層厚0.25m前後。

第2層 淡灰茶色粘質シルト。層厚0.1m前後。

第3層 灰色粘質土。層厚0.08~0.25m。

第4層 灰色極細粒砂。層厚0.15m。褐色の斑点が見られる。

第5層 明茶灰色細粒砂。層厚0.15m前後。

第6層 青灰色粘土。層厚0.1m。

第7層 青灰色粘質シルト。層厚0.1~0.3m。

第8層 明茶灰色細粒砂。層厚0.1~0.35m。下部に酸化による斑点。

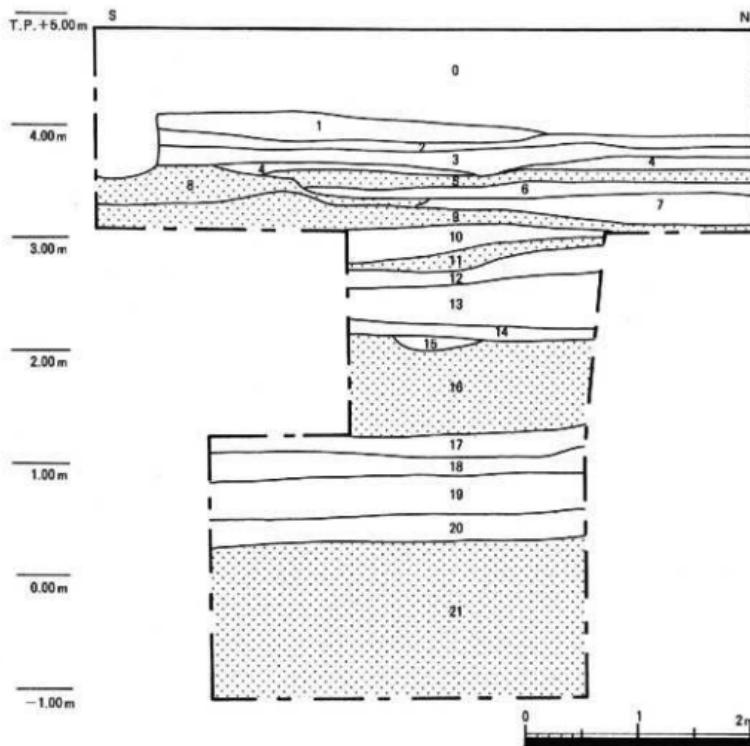
第9層 淡灰青色極細粒砂。層厚0.08~0.3m。

第10層 青灰色シルト。層厚0.08~0.3m。

第11層 灰色細粒砂。層厚0.08~0.2m。

第12層 灰緑色粘土。層厚0.15~0.25m。

- 第13層 緑灰色粘土。層厚0.3~0.5m。
- 第14層 暗灰色粘土。層厚0.1m。
- 第15層 灰色シルト混細粒砂。層厚0.1m。
- 第16層 乳灰色細粒砂。層厚0.8m。
- 第17層 褐色粘質シルトと灰白色細粒砂の互層。層厚0.2m。植物遺体を含む。
- 第18層 褐色粘質シルト。層厚0.15m。
- 第19層 灰色粘土。層厚0.35m。炭酸カルシウムのノジュールを含む。
- 第20層 褐色粘土。層厚0.2m前後。
- 第21層 灰白色細粒砂。層厚1.5m以上。



第2図 西壁断面図 (1/50)

3. まとめ

今回の調査では、上部においては面的な広がりを持つ生活面が検出されなかった為、下部においては、土層の堆積状況に重点を置き、そこから推察される地形の形成過程や環境変化の変遷を追求する目的とした。調査の結果、下部においても生活痕跡を示す上層が確認されず、深層に至るまで河川の氾濫に起因した堆積土層が連続することが確認された。なお、土地条件図においては、現楠根川の右岸に沿って南北方向に点在する自然堤防の痕跡が認められており、これらの自然堤防を形成した自然河川に、今回検出した埋没自然河川が符合するものと推定される。

参考文献

○国土地理院 1983 「土地条件図 大阪東南部」



下部調査状況（南から）

VIII 小阪合遺跡第31次調査（K S 95-31）

方 目 文 手

例　　言

1. 本書は、八尾市青山町5丁目214番地で実施した防火水槽設置工事に伴なう発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する小阪合遺跡第31次調査（KS95-31）の発掘調査業務は、財団法人八尾市文化財調査研究会が、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第理159-3号 平成7年12月12日付）に基づき、八尾市消防本部から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成8年1月29日～2月2日（実働5日間）にかけて岡田清一を調査担当者として実施した。調査面積は、約36m²を測る。なお、調査においては辻野優子・吉田由美恵が参加した。
1. 本書に関わる業務は、遺物実測・図面トレースー辻野、遺物写真撮影ー岡田が行なった。
1. 本書の執筆・編集は岡田が行なった。

本　文　目　次

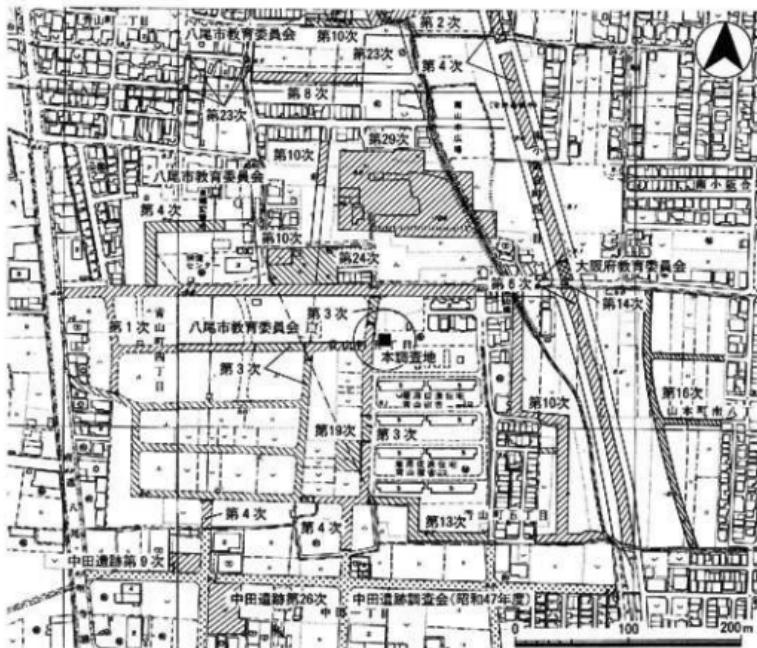
1. はじめに.....	63
2. 調査概要.....	64
1) 調査の方法と経過.....	64
2) 基本層序.....	65
3) 検出遺構と出土遺物.....	66
4) 出土遺物観察表.....	68
3.まとめ.....	69

VIII 小阪合遺跡第31次調査 (KS95-31)

1はじめに

小阪合遺跡は、旧大和川の主流であった長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上に位置する弥生時代中期から近世に至る複合遺跡である。現在の行政区画では小阪合町1・2丁目、南小阪合町1・2・4丁目、青山町1~5丁目、若草町、山本町南7~8丁目がその範囲にあたる。当遺跡の周辺には、北西に東郷遺跡、西に成法寺遺跡、南西に矢作遺跡、南に中田遺跡の4遺跡が隣接している。

当遺跡は、昭和57年度から昭和63年度に実施された八尾都市計画事業南小阪合土地区画整理事業の幹線道路・区画街路・公共施設等の建設工事に伴なう発掘調査によって、弥生時代中期から近世までの多岐にわたる遺構・遺物の存在が明らかにされた。特に古墳時代前期に比定される墓域や集落域をはじめとする各遺構内から出土した遺物には古備、山陰、北陸、東海の他



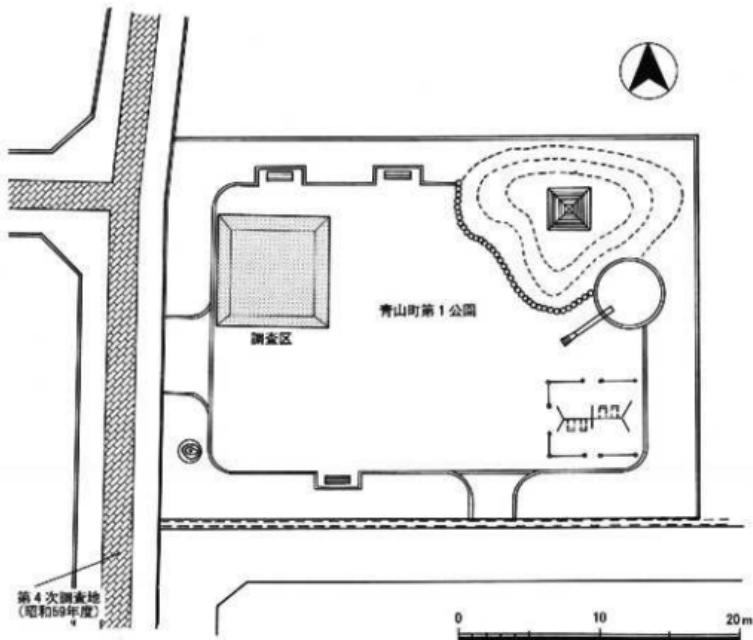
第1図 調査地周辺図

地域から搬入された古式土師器が多数含まれており、当該期の地域交流を究明するうえで興味深いものがある。また、最近では本調査地から北へ約100m地点の青山町3丁目において平成6年度に実施された総合体育馆建築工事に伴なう調査（第29次）^{註3}では、平安時代末から近世まで連綿と営まれ続けてきたことを窺わす重層的な水田面、また現代の楠根川下層からは中世頃に埋没した幅12m前後の流路が検出されている。

2 調査概要

1) 調査の方法と経過

今回の発掘調査は市民公園（青山町第1公園）内における防火水槽設置工事に伴なうもので、当調査研究会が当遺跡内で実施した第31次調査である。調査区の位置については、当初計画されていた地点が公園の西側出入口付近で、資材の搬入および工事用車両の出入り等についても工事に支障をきたす所為から、公園北西隅の地点に変更することとなった。本体工事の規模については上面が6m四方を測るものであるが、調査上における危険防止の為、まず8m四方を



第2図 調査区位置図

重機によって現地表から1.0m前後掘削した後、下面で6m四方の実調査面を設定した。なお、掘削については本調査地内側において昭和59年度に実施された第4次調査の成果を参考に、盛土および耕土を重機により排除した後、現地表下1.0~1.6mの0.6m間の土層を人力により掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。さらに調査終了後、調査区中央において上面2m四方のグリッドを設定し、最終調査面（標高7.3m前後）から1.0m前後の深度まで下層確認を実施した。^{註3}

調査の結果、現地表下1.4m前後（標高8.1m前後）に存在する第7層青灰色（5B4/1）粘土層上面において平安時代末頃に比定される大壯畔1条を検出した。

2) 基本層序

層位については第4次調査結果と大差ない様相を呈する。しかし、第4次調査で検出されている古墳時代前期の遺物包含層（標高7.8~8.0m前後）については、本調査地にも対応する堆積層は確認できるが遺物は僅少である。また、古墳時代前期以前は下層確認の上層堆積状況から生活面を示唆する遺構・遺物は確認されず、各層ともフラットな自然堆積層を示す。以下、調査区内で普遍的に堆積する17層について列記する。

第1層：盛上。層厚1.0m前後。既述の上地区画整理事業に伴なう市民公園建設の際に造成された客土層である。

第2層：暗灰色（N3/）シルト。層厚0.1m前後。公園建設以前までの耕土、いわゆる現代の作上層にあたる。

第3層：緑黒色（5G2/）シルト。層厚0.1m前後。II耕作土にあたる。

第4層：にぼい橙色（5YR6/4）シルト。層厚0.3~0.4m。調査区の北部で第5層を削する。層内に僅かに含まれる染め付けの磁器片から、近世にあたる堆積層と考えられる。

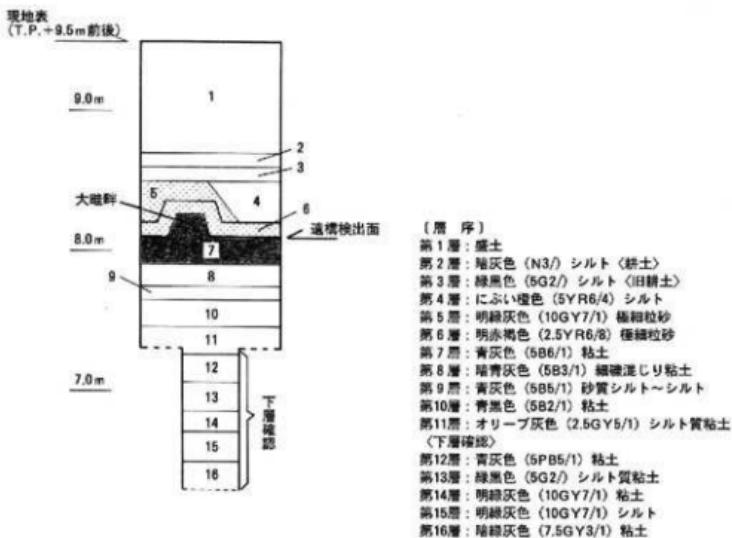
第5層：明緑灰色（10GY7/1）極細粒砂。層厚0.3~0.4m。河川の氾濫に起因する洪水層である。層内に遺物は含まれない。

第6層：明赤褐色（2.5YR6/8）極細粒砂。層厚0.1m前後。全般的に酸化鉄分が浸透している。層内に摩滅氣味の瓦器模や土師器小皿の破片が僅かに含まれる。上器片の形態から平安時代末頃に比定される洪水層と考えられる。

第7層：青灰色（5B6/1）粘土。層厚0.3~0.4m。本調査で検出した水田耕土にあたる堆積層である。本層上面には人および飼蹄類の足跡がみられる。上部には第6層同様、平安時代末頃に比定される遺物が僅かに散在する。本層上面は標高8.1m前後を測る。

第8層：暗青灰色（5B3/1）細繊混じり粘土。層厚0.15m前後。古墳時代前期頃の古式土師器片が僅かに含まれる。

第9層：青灰色（5B5/1）砂質シルト～シルト。層厚0.1m前後。古墳時代前期以前の河川



第3図 基本層序模式図

の氾濫に起因する堆積層と考えられる。本層以下～第17層まで遺物は包含されない淘汰された堆積層である。

第10層：青黒色（5B2/1）粘土。層厚0.2m前後。本層上面には部分的に上層の第9層青灰色（5B5/1）砂質シルト～シルトが侵入する。

第11層：オリーブ灰色（2.5GY5/1）シルト質粘土。層厚0.2～0.3m。

〔以下、下層確認〕

第12層：青灰色（5PB5/1）粘土。層厚0.2m前後。

第13層：緑黒色（5G2/）シルト質粘土。層厚0.2m前後。

第14層：明緑灰色（10GY7/1）粘土。層厚0.1m前後。

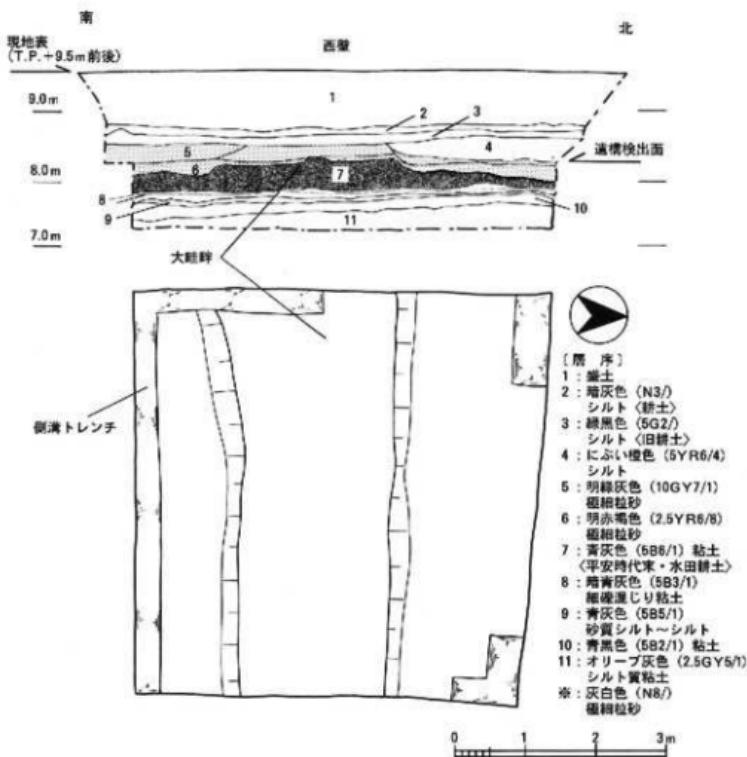
第15層：明緑灰色（10GY7/1）シルト。層厚0.2m前後。

第16層：暗緑灰色（7.5GY3/1）粘土。層厚0.2m以上。

3) 検出遺構と出土遺物

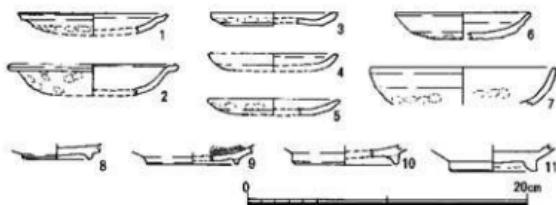
大畦畔

調査区のほぼ中央で、東西に伸びる大畦畔を1条検出した。規模は、幅が東端で2.1m・西端で2.5m、高さ0.15～0.2mを測る。周囲にみられる人および偶蹄類と思われる足跡の状況から、遺構の性格として水田面であったことが看取される。本水田を覆う第6層明赤褐色（2.5



第4図 遺構平・断面(西壁面)図

YR 6/8) 極細粒砂および水田耕土上層に僅少ながらも含まれる土師器小皿や瓦器椀の小破片から、平安時代末頃に河川の氾濫によって埋没したものと考えられる。出土遺物のなかで辛苦じて図化できたものは、土師器皿7点(1~7)・瓦器椀3点(8~10)・白磁碗1点(11)の計11点である。土師器皿(1・2)は、いわゆる「て」字状口縁をもつもので水平あるいは短く外反する口縁端部をかるくつまみ上げる(1)と丸くおさめる(2)がある。(3~5)は浅い体部から内脣気味に伸びる口縁部をもち、端部は丸くおさめる。(6)はやや肥厚して丸くおさめる口縁端部をもつ。(7)は大型で、やや深みのある体部から上外方に伸びる口縁部をもち、端部は尖り気味におさめる。瓦器椀(8~10)はローリングを受けており、かなり



第5図 第6層出土遺物実測図

磨滅しているが、尾上編年でいうII・3
法³期～III-1期の範囲に納まるものと思われる。中国製磁器とみられる白磁碗(11)は、釉調や胎土から横田・森田分類のIV
法⁴類に比定されよう。

4) 出土遺物観察表

※胎土 数字=最大粒子径(mm)/鉢物=長(長石)・蓋(蓋母)・石(石英)・角(角閃石)・チ(チャート)・赤(赤鉄酸化物)

遺物番号 回収番号	器種	法量 口径 高さ (mm)	調査・技法	色調/外面 内面	胎 土	焼成	進存度	備考
1 二	皿 (土師器)	10.4	内外面:ヨコナダ、ヌグ オサエ、ナデ	淡乳火色	精良	良好	口縁部 1/6	
2 二	同上	11.5 —	同上	茶褐色	0.5/長、角・石	良好	口縁部 1/6	
3 二	同上	8.7	同上	乳褐色	2/長、蓋、赤	良好	口縁部 1/6	
4 二	同上	8.8 —	同上	明褐色	1/石、赤	良好	口縁部 1/6	
5 二	同上	9.1	同上	茶褐色	1/赤	良好	口縁部 1/6	
6 二	同上	9.4 —	同上	灰白色	2/チ、赤	良好	口縁部 1/6	
7 二	同上	13.0 —	同上	暗茶灰色	0.5/露	良好	口縁部 1/6	
8 二	前 (瓦器)	— 高台径 4.4 高台高 0.4	外面:ヨコナダ、ナデ 内面:磨滅の為細節不明	淡褐色	1/長、石、赤	良好	高台部のみ	
9 二	同上	— 高台径 6.5 高台高 0.5	外面:ヨコナダ、ナデ 内面:平行線状のヘリ ガキ	灰黑色	精良	良好	高台部 1/2	
10 二	同上	— 高台径 7.2 高台高 0.9	外面:ヨコナダ、ナデ 内面:ヘリ・ガキ	淡灰色	精良	良好	高台部 1/6	
11 二	前 (磁器)	— 高台径 6.0 高台高 0.8	外側:回転ヘラケズリ。 高台の一帯を除いて胎釉 はみられない 内面:薄く成り緑色した 釉を帯びる。	胎上-灰白色 胎-淡褐色	精良	良好	高台部のみ 中国製白磁	

3 まとめ

今回の調査地は、既述したように当調査研究会が昭和59年度に南小阪合土地区画整理事業に伴なって実施した第4次調査の東側に近接した地点にあり、調査の結果、層位的には第4次調査と大差ないものであった。しかし、第4次調査で検出された古墳時代前期（坪内式古相～布留式古相）の遺物包含層に関して言えば、本調査地においても対応する堆積層は存在するものの当該期の遺物は本調査地では皆無に等しく、生活面を示唆する様相はない。その要因として、現在までの調査で判明している旧楠根川をはじめとする大小河川の度重なる氾濫の影響、あるいは今回検出した大畦畔にみられる平安時代以降の耕地開拓による削平が憶測されるが、今回のような狭小な調査区にあっては裏付けられる根拠が乏しく推察の域を出ない。今後の周辺における面的な調査に期待がかかる。一方、既述の大畦畔については時期的に平安時代末頃に埋没した水田遺構の存在を看取するものであるが、今回検出した畦畔はその規模からある種農道または里道、あるいは条里地割で言うならば坪境である可能性もありうる。棚橋利光氏が論考・執筆された『八尾の条里制』^{註1}のなかで、氏が現存する坪名や旧村地図・地番などから復元された条里図をみると、当地は若江郡の南部にあたり、坪の位置から条里の区画線をもとに「条」を数えると当地「小阪合」は五条となる。今回検出した大畦畔は復元された条里図でみるとかぎり、条里の区画線つまり「坪境畔」に該当するものではないが、当地が旧大和川の支流であった玉串川と長瀬川に挟まれた低湿地で、さらにその中央を流れる楠根川付近一帯はとくに低地で洪水にのみわれる平面、水田地帯としては上質および水量の豊富さから好条件であったことは最近の総合体育館建設に伴なう調査（第29次）^{註2}をみても明らかである。今回検出できた大畦畔は当該期の河内平野における田畠の一端を想起させるものであり、今後さらなる発掘調査の積み重ねによって条里制という土地制度の実態が徐々に解き明かされていくだろう。

注

- 註1 高萩千秋 1990「小阪合遺跡－八尾市計画事業南小阪合土地区画整理事業に伴なう発掘調査－<昭和61年度第8次 昭和62年度第10・13次 昭和63年度第16次調査報告>」(財)八尾市文化財調査研究会報告26
- 註2 高萩千秋・中野鶴史 1995「13.小阪合遺跡第29次調査(KS94-29)」『平成6年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』財團法人 八尾市文化財調査研究会
- 註3 尾上 実 1983「南河内の瓦器碗」『古文化論集(藤澤・大先生・古稀記念論集)』
- 註4 横田賢次郎・森田勉 1978「太宰府出土の輸入中國陶磁について—型式分類と編年を中心として—」『九州歴史資料館研究論集4』九州歴史資料館
- 註5 高萩千秋 1988「小阪合遺跡－八尾市計画事業南小阪合土地区画整理事業に伴なう発掘調査－<昭和59年度 第4次調査報告書>」(財)八尾市文化財調査研究会報告15

註6 橋柄利光 1982「八尾の条里制橋柄利光」『八尾市紀要 第六号』八尾市教育委員会 八尾市史編
さん室



写真1 調査地周辺航空写真（平成7年3月撮影）



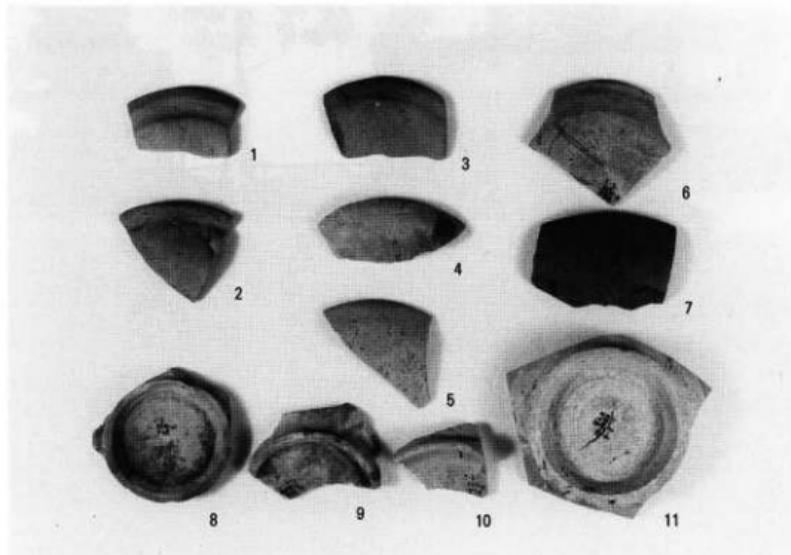
遺構面 全景（北西から）



調査区 西壁面〈標高7.5~9.5m付近〉（東から）



調査風景（北東から）



第6層内出土遺物

IX 成法寺遺跡第16次調査（S H95-16）

大 目 文 本

例　　言

1. 本書は八尾市高美町1丁目地内で実施した公共下水道工事に伴う発掘調査である。
1. 本書で報告する成法寺遺跡第16次調査(SH95-16)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書(八教社文第埋146-3号 平成7年6月27日)に基づき財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成7年7月17日から7月26日にかけて、西村公助を担当者として実施した。調査面積は15m²を測る。なお、調査においては中西明美、西村和子が参加した。
1. 本書に関わる業務は、図面レイアウト トレースー中西、西村(和)、西村(公)が行った。
1. 本書の執筆、編集は西村公助が行った。

本　文　目　次

1.はじめに.....	73
2.調査概要.....	74
1) 調査の方法と経過.....	74
2) 基本層序.....	76
3) 検出遺構と出土遺物.....	76
3.まとめ.....	76

IX 成法寺遺跡第16次調査 (S H95-16)

1. はじめに

成法寺遺跡は八尾市の中央部に位置し、現在の行政区画では、八尾市の光南町・清水町・南本町・高美町・松山町・明美町・陽光園にあたる。

当遺跡は、河内平野の中を北または北西方向に流れている長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上に位置している。今回調査を行った場所は、八尾市南本町3丁目31-2他である。

当遺跡内では、当調査研究会が15件の調査を行っている。また、大阪府教育委員会文化財保護課・八尾市教育委員会文化財課により調査が実施されており、弥生時代～近世に至る遺跡であることが確認されている。



第1図 調査地周辺図

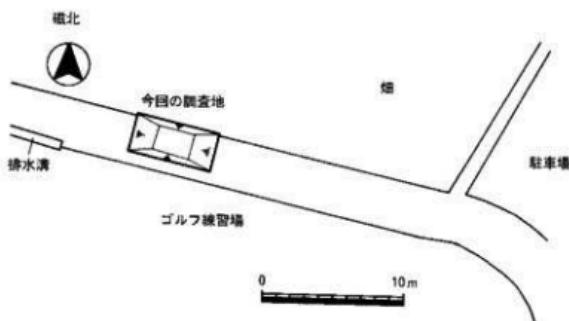
2. 調査概要

1) 調査の方法と経過

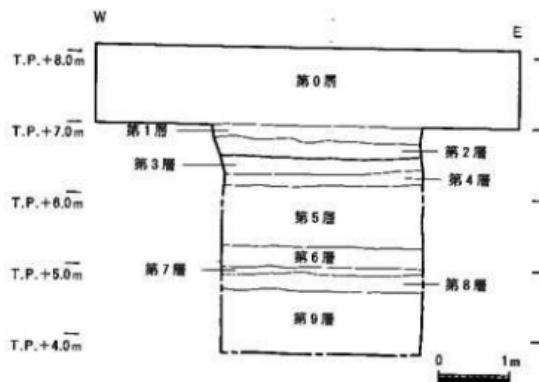
下水道工事予定地の1箇所を調査した。調査にあたっては、現地表下1.2mまでの土層を機械掘削で排除し、以下1.0mまでは人力掘削を実施した。また、人力掘削終了後、工事掘削最終深度まで土層の堆積状況の確認を行なった。

調査位置	遺跡	番号	調査地	年度	調査概要	調査面積	調査範囲	調査機関	参考
	成法寺	SI182-1	清水町2丁目2	857	中学校舎改築	297	8570621～0718	(財)八尾市文化財調査研究会	
	成法寺	SI485-2	清水町2丁目2	858	中学校舎改築	320	8580708～0730	(財)八尾市文化財調査研究会	
	成法寺	SI181-3	清水町2丁目2-5	862	中学校舎改築	812	8620701～0715	(財)八尾市文化財調査研究会	
①	成法寺	SH88-1	南木町1丁目10-1	563	事務所建設	540	8631107～1205	(財)八尾市文化財調査研究会	
	成法寺	SH88-5	光明町1丁目46-47-1	1101	凡川庄七塚設	400	11011105～1116	(財)八尾市文化財調査研究会	
③	成法寺	SH89-6	南木町4丁目24	H01	共同住宅建設	200	H0220～0303	(財)八尾市文化財調査研究会	
	成法寺	SH91-7	清水町2丁目2-5	1103	アール建設	690	H30801～0907	(財)八尾市文化財調査研究会	
	成法寺	SI191-8	南木町2丁目97-1	1003	共同住宅建設	350	H30917～1008	(財)八尾市文化財調査研究会	
	成法寺	SH291-9	光明町1丁目2-3	1103	ガソリンスタンド造成	75	H031029～1101	(財)八尾市文化財調査研究会	
⑤	成法寺	SI192-10	高美町1丁目地内	H05	下水道第4工区	50	H061109～1128	(財)八尾市文化財調査研究会	
⑥	成法寺	SI192-11	高美町1丁目地内	H05	下水道第6工区	30	11051115～1128	(財)八尾市文化財調査研究会	
⑦	成法寺	SI193-12	高美町1丁目73,74	H06	共同住宅建設	180	11060301～0316	(財)八尾市文化財調査研究会	
⑧	成法寺	SH94-13	南木町3丁目31-2他	H06	社会福祉施設建設	210	H060409～0418	(財)八尾市文化財調査研究会	
⑨	成法寺	SH94-14	西美町2丁目地内	H06	公共下水道6-13上区	124	H061111～1107012	(財)八尾市文化財調査研究会	
⑩	成法寺	SH95-15	南木町3丁目31-3他	H07	社会福祉施設建設	425	H070405～0425	(財)八尾市文化財調査研究会	
⑪	成法寺	SH95-16	西美町1丁目地内	H07	公共下水道6-19上区	15	11070117～	(財)八尾市文化財調査研究会	今回の調査地
⑫	東 郡	TG87-26	在内町1丁目28～31	563	日本電信電話会社	49	863011～0129	(財)八尾市文化財調査研究会	
⑬	東 郡	TC95-50	在内町1丁目36～1,35基壠	1107	凡川庄七塚設	190	H080110～0124	(財)八尾市文化財調査研究会	
I	成法寺		南木町1丁目	860	都市計画道路半野・中高安新築造工		8601111～1218	大阪府教育委員会	
II	成法寺		南木町1丁目	901	都市計画道路半野・中高安新築造工		8610712～1031	大阪府教育委員会	
III	成法寺		高美町1丁目	961	都市計画道路半野・中高安新築造工			大阪府教育委員会	
IV	成法寺		高美町1丁目	563	都市計画道路半野・中高安新築造工		86310～12	大阪府教育委員会	
V	成法寺		高美町1丁目	H01	都市計画道路半野・中高安新築造工		H0108～10	大阪府教育委員会	
VI	成法寺		南木町1丁目	H03	都市計画道路半野・中高安新築造工		110305～09	大阪府教育委員会	
VII	成法寺		高美町1丁目	1104	都市計画道路半野・中高安新築造工		110507～H0601	大阪府教育委員会	
VIII	成法寺		高美町1丁目	H05	都市計画道路半野・中高安新築造工		H0612～0616	大阪府教育委員会	
IX	東 郡		東木町5丁目	1105	都市計画道路半野・中高安新築造工		H0507～H0601	大阪府教育委員会	

第1表 成法寺遺跡・東郷遺跡発掘調査表



第2図 調査位置図



- 第0層 盛土
 第1層 黄褐色(10YR5/6)細砂混粘土。
 第2層 棕褐色(10YR4/6)シルト混粘土。
 第3層 棕褐色(10YR4/1)細砂混粘土。
 第4層 暗灰色(N3-/)シルト混粘土。
 第5層 暗青灰色(10BG4/1)粘土。
 第6層 暗青灰色(10BG3/1)細砂混粘土。
 第7層 青灰色(10BG5/1)細砂。
 第8層 暗青灰色(10BG3/1)粘土。
 第9層 灰色(5Y4/1)細砂。

第3図 北壁面実測図

2) 基本層序

- 第0層 盛土。層厚1.1m。
- 第1層 黄褐色(10YR5/6)細砂混粘土。層厚0.2m。
- 第2層 褐色(10YR4/6)シルト混粘土。層厚0.3m。
- 第3層 褐灰色(10YR4/1)細砂混粘土。層厚0.2m。
- 第4層 暗灰色(N3/)シルト混粘土。層厚0.15m。
- 第5層 暗青灰色(10BG4/1)粘土。層厚1.2m。
- 第6層 暗青灰色(10BG3/1)細砂混粘土。層厚0.3m。
- 第7層 青灰色(10BG5/1)細砂。層厚0.1m。
- 第8層 暗青灰色(10BG3/1)粘土。層厚0.2m。
- 第9層 灰色(5Y4/1)細砂。層厚0.9m以上。

3) 検出遺構と出土遺物

現地表下1.5m（標高T.P.+6.6m）前後に存在する第3層上面で調査を実施したが、遺構の検出はなかった。

3.まとめ

今回の調査地では遺物の出土がなく、また遺構の検出もなかったため、面的な調査を実施した第3層の時期を決定できなかった。しかし、第3層は、大阪府教育委員会が行った成法寺遺跡第5次調査の第V層に類似しており、場所的にも近接していることから、古墳時代前期～中期にかけての土層の可能性が考えられる。^{註1}

また、第9層（細砂）は厚さ0.7m以上、幅6m以上にわたり検出しており、弥生時代以前の河川の堆積土と推定される。しかし流れの方向や河川の幅、深さ等の詳細は不明であった。

註

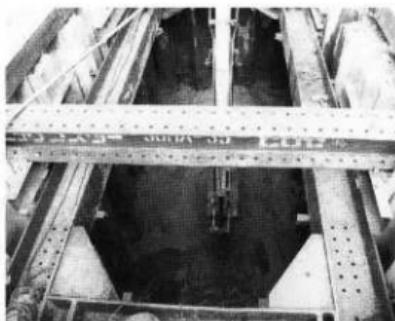
註1　亀島重則 1990.3『成法寺遺跡発掘調査概要・V』大阪府教育委員会



調査地周辺（西から）



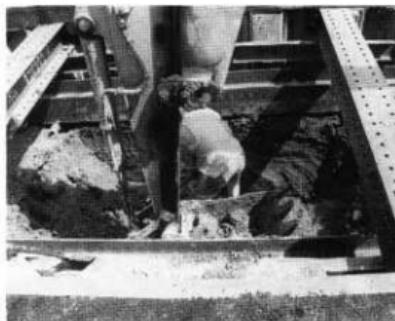
掘削状況（北から）



下層掘削状況（西から）



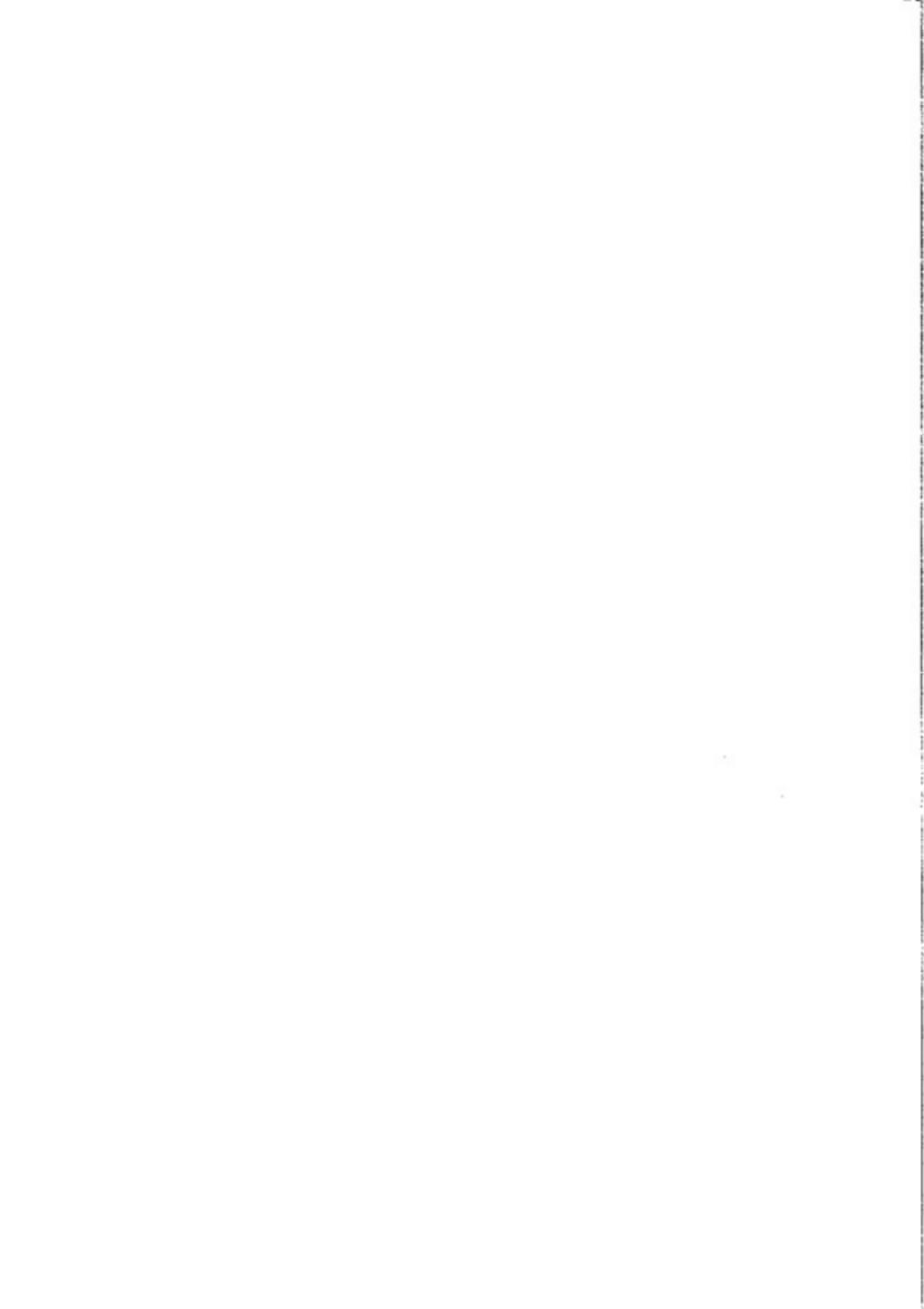
第3層上面全景（西から）



調査状況（南から）



調査状況（西から）



附 彙

X 竹湧遺跡第6次調査(TK95-6)

文 献

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市竹渕1丁目・4丁目で実施した公共下水道工事（平成7年度第111工区）に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する竹渕遺跡第6次調査（TK95-6）の発掘調査の業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第理367-3号 平成7年9月21日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成7年10月12日から11月28日（実働6日間）にかけて、原田昌則・岡田清一を担当者として実施した。調査面積は69m²を測る。
1. 内業整理は、現地調査終了後、随時実施し平成8年9月30日に完了した。
1. 本書作成に関わる業務は、遺物実測－沢村妙子 図面トレース－北原清子。
1. 本書の執筆は主に原田が行ったが、2. 調査概要の3) 検出遺構・出土遺物、4) 観察表の一部については森本めぐみが補佐した。
1. 全体の編集は原田が行った。

本文目次

1.はじめに.....	79
2.調査概要.....	80
1) 調査の方法と経過.....	80
2) 基本順序.....	81
3) 検出遺構と出土遺物.....	83
4) 出土遺物観察表.....	86
3.まとめ.....	88

X 竹渕遺跡第6次調査 (TK95-6)

1. はじめに

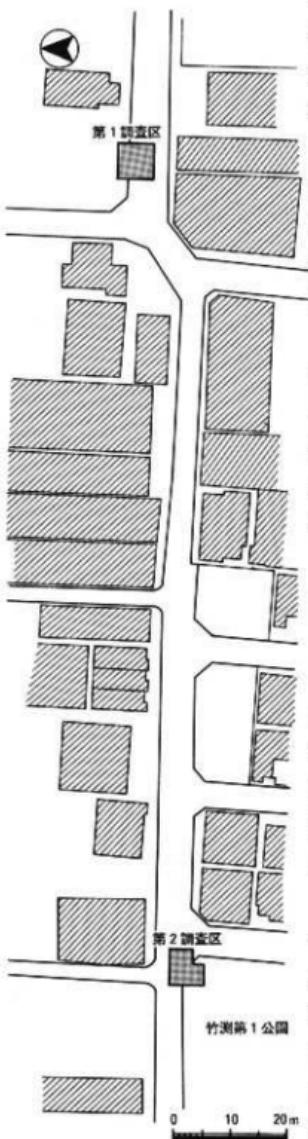
竹渕遺跡は八尾市西部の竹渕、竹渕1～5丁目、竹渕東1～4丁目付近を中心東西約0.6km、南北約0.8kmに展開する弥生時代前期～平安時代に至る複合遺跡である。地理的には平野川の左岸一帯のに広がる沖積地上の標高9m付近に位置している。

当遺跡周辺では、東に龜井遺跡、北東に久宝寺遺跡、南東に城山遺跡（大阪市）、北に加美北遺跡・加美遺跡（大阪市）が存在している。

当遺跡は、昭和57年度に八尾市教育委員会により実施された、市立竹渕小学校の校舎建て替え工事に伴う遺構確認調査で発見された遺跡である。この調査結果を受けて当調査研究会が実施した第1次調査（TK82-1）では、古墳時代後期の居住域に関連した遺構・遺物が検出され、当該時期の集落の存在が明らかとなった。その後、平成元年度には竹渕東2丁目で公共下水道工事に伴う第2次調査（TK89-2）が実施され、弥生時代前期～中期の遺構・遺物が検



第1図 調査地周辺図



第2図 調査区設定図

出されたほか、平成4年度に竹測東3丁目80-3で行われた工場建設に伴う第3次調査（TK92-3）では、弥生時代前期の土坑・古墳時代後期の方墳・平安時代中期の土坑などが検出されている。

更に平成7年度には、竹測1丁目223-1で第4次調査（TK95-4）、竹測4丁目33-1で第5次調査（TK95-5）が実施されており、前者では古墳時代前期（布留式古棺）の溝状造構、後者では古墳時代中期末の居住域が検出されている。

今回の発掘調査は、竹測1丁目・4丁目で計画された公共下水道工事（平成7年度第III工区）に伴うもので、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づき、八尾市・八尾市教育委員会・（財）八尾市文化財調査研究会との三者間で取りかわした協定書締結後、現地調査を実施した。

2. 調査概要

1) 調査の方法と経過

今回の発掘調査は公共下水道工事に先だって実施したもので、調査対象は公道上に設置された2ヶ所の立坑で両者間の間隔は約140mを測る。東側立坑を第1調査区、西側立坑を第2調査区と呼称した。調査地点が公道上に位置する関係から、調査は夜間実施した。第1調査区から調査を実施した。

第1調査区は6.15×6.15mの規模を測る方形の調査区で、調査面積は約38m²を測る。工事の進捗状況に沿って現地表下3.9m（標高4.6m）まで、機械掘削と人力掘削を併用して上層の堆積状況と造構・遺物の検出に努めた。その結果、現地表下2.75～3.0m（標高5.7～5.4m）付近に存在する第106層で古墳時代前期初頭（庄内式古棺）の遺物包含層を確認したほか、現地表下3.0m（標高5.4m）付近に存在する第107層上面で古墳時代前期初頭

(庄内式古相)に比定される落ち込み状遺構1基(SO-1)を検出した。

第2調査区はL字状を呈する調査区で、調査面積は約31m²を測る。現地表下3.5m(標高4.8m)まで、工事の進捗状況に沿って機械掘削と人力掘削を併用して土層の堆積状況と遺構・遺物の検出に努めた。その結果、現地表下0.8~1.15m(標高7.2~6.85m)に存在する第202層と現地表下2.4~3.35m(標高5.85~5.0m)に存在する第209層で遺物の包含を確認した。第202層からは平安時代中期~後期、第209層からは古墳時代前期の所産と推定される十器の小片が極少量出土している。

遺物の総量はコンテナ2箱程度で、その大半が第1調査区の落ち込み状遺構(SO-1)から出土している。

2) 基本層序

両調査区とともに比較的安定した水平層理が認められた。なお、層名については第1調査区では100層~107層、第2調査区では200層~210層で表わした。

・第1調査区

第100層 既存の埋設物による攪乱および客土層。層厚1.3m。上面の標高はT.P.+8.5mを測る。

第101層 10B G7/1青灰色粘土。層厚0.1m前後。

第102層 N7/ 灰色シルト質粘土。層厚0.45m。

第103層 10B G7/1明青灰色細粒砂。河川氾濫に起因した堆積土層。層厚は0.15m。

第104層 N6/ 灰色粘土質シルト。層厚0.3m。

第105層 N5/ 灰色粘土。層厚0.5m。

第106層 10Y R4/1褐色灰色粘土質シルト。層厚0.2m。植物遺体を含む。古墳時代前期の遺物を含む。

第107層 N8/ 灰白色中粒砂~粗粒砂。自然河川内堆積土層。層厚0.8m以上。古墳時代前期初頭(庄内式古相)の遺構検出面。

・第2調査区

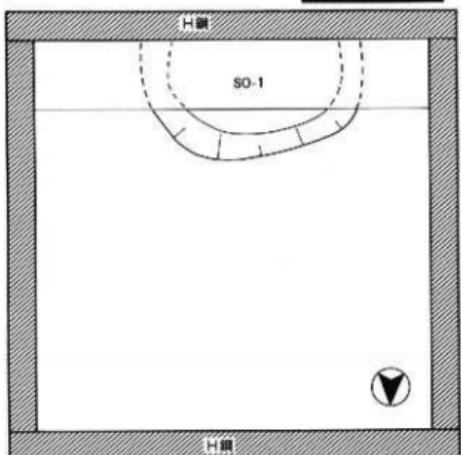
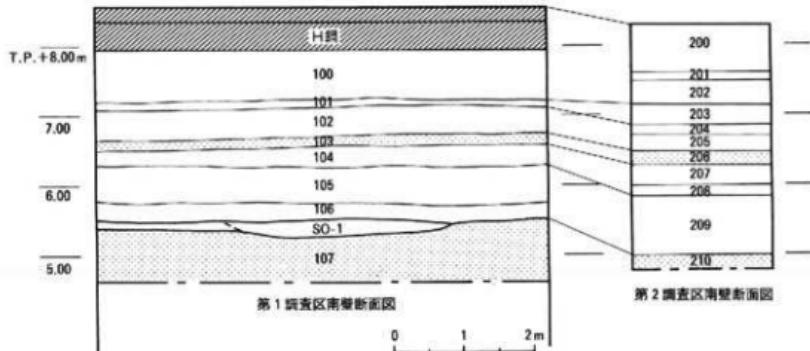
第200層 既存の埋設物による攪乱および客土層。層厚0.65m。上面の標高はT.P.+8.3mを測る。

第201層 2.5Y8/4淡黄色粘土質シルト。層厚0.1m。

第202層 2.5Y7/4浅黄色粘土。層厚0.3m。平安時代中期から後期の遺物を極少量含む。

第203層 10B G7/1青灰色粘土。層厚0.3m。第101層に対応する。

第204層 10G Y8/1明緑灰色粘土質シルト。層厚0.15m。



- ・第1調査区
- 第100層 客土
- 第101層 10B G7/1青灰色粘土
- 第102層 N7/ 灰色シルト質粘土
- 第103層 10B G7/1明青灰色極細粒砂
- 第104層 N6/ 灰色粘土質シルト
- 第105層 N5/ 灰色粘土
- 第106層 10Y R4/1暗灰色粘土質シルト
- 第107層 N8/ 灰白色中粒砂～粗粒砂

- ・第2調査区
- 第200層 客土
- 第201層 2.5Y 8/4淡黄色粘土質シルト
- 第202層 2.5Y 7/4浅黄色粘土
- 第203層 10B G7/1青灰色粘土
- 第204層 10G Y8/1明綠灰色粘土質シルト
- 第205層 10B G6/1青灰色シルト質粘土
- 第206層 10B G7/1明青灰色極細粒砂
- 第207層 N8/ 灰白色細粒砂～中粒砂
- 第208層 N7/ 灰白色細粒砂
- 第209層 N6/ 灰色粘土
- 第210層 N8/ 灰白色極細粒砂

第1調査区検出遺構平面図

第3図 第1調査区平断面図および第2調査区断面図

- 第205層 10B G6/1青灰色シルト質粘土。層厚0.2m前後。
- 第206層 10B G7/1明青灰色極細粒砂。層厚0.2m前後。河川堆積層。第103層に対応。
- 第207層 N8/ 灰白色細粒砂～中粒砂。層厚0.3m前後。河川堆積層。
- 第208層 N7/ 灰白色細粒砂。層厚0.15m前後。
- 第209層 N6/ 灰色粘土。中粒砂が一部で混在する。層厚0.9m前後。植物遺体を含む。古墳時代前期の遺物を極少量含む。第105層に対応する。
- 第210層 N8/ 灰白色極細粒砂。層厚0.2m以上。河川堆積層。第107層に対応する。

3) 検出遺構・出土遺物

第1調査×

落ち込み状遺構（S O）

S O - 1

調査区の南東部で検出した。第107廻を構築面としている。夜間調査のため不明な点が多いが、おおむね調査区の南東部からさらに調査区外の南部に広がるものと推定される。検出部分では、東西幅2.7m、南北幅1.5m、深さ0.2mを測る。埋土は灰白色砂質シルトの単一層である。遺物は古墳時代前期初頭（庄内II期）に比定されるV様式系壺・庄内式壺・蓋・高杯・器台・鉢等の上器類のほか焼土塊1点を含めてコンテナ2箱分程度が出土している。

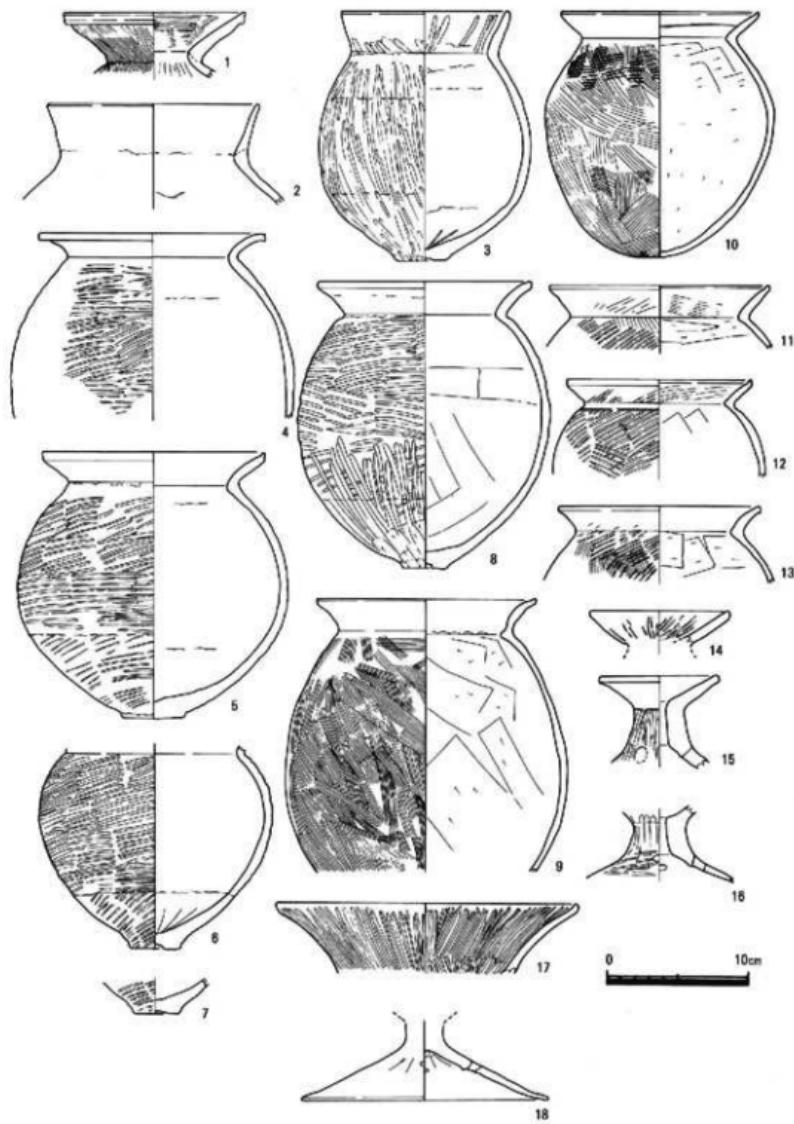
そのうち図化し得たものは22点（1～22）である。その内訳は、壺3点（1～3）、壺10点（4～13）、器台3点（14～16）、高杯2点（17・18）、鉢3点（19～21）、焼土塊1点（22）である。

壺-〔広口壺A（1）・短頸直口壺A（2）・短頸壺B（3）〕

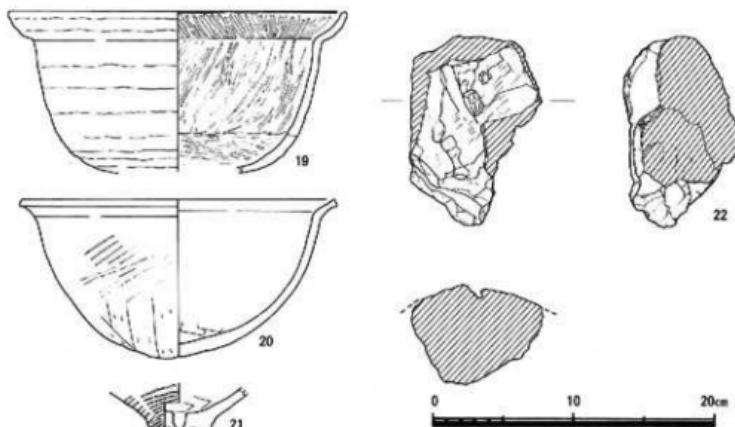
（1）は広口壺Aの頸部から口縁部にかけての小片である。頸部は強く屈曲し、口縁端部に凹線を持つ。内外面とも丁寧なハケナデ調整を施す。（2）は短頸直口壺Aに分類されるもので、体部の形態は不明であるが、口縁部はやや短めで直線的に立ち上がり、口縁端部は丸い。（3）はほぼ完形の短頸壺Bである。短くやや内湾気味に立ち上がる口縁部を持つ。体部下半に最大径を持ち、外面はやや太めのヘラミガキで三段階に分けて成形されている。底部は小さく突出するもので、底部外面の中央部が窪んでいる。

壺-〔壺A（4～8）・壺I（9）・壺B（10～13）〕

（4～8）はV様式系壺で、すべて非生駒西麓産である。（4・7）以外は比較的残存が良く、すべて壺Aに分類される。三分割成形を基本としており、器面調整は外面にタタキ、内面にナデが施されている。（5）は体部が球形で、体部中位に最大径を持つ。（8）の体部外面には下半のヘラケズリを除けばタタキ調整が行われているが、中位以下にはタタキ調整の上に縦位のヘラミガキが行われている。底部は小さく突出したやや不定形なドーナツ底で、側面はヘラケズリにより成形されている。（9）は壺Iに分類されるもので、口縁部が「く」の字に屈曲し、体部が長胴形で外面にハケナデ、内面にケズリを施すもので、当該期に吉備地方を中心で分布する壺の影響で成立したものと推定される。類例としては中田遺跡刑部土坑からの出土例^{註2}がある。（10～13）はいずれも生駒西麓産の胎土を有する河内型の庄内式壺である。体部外面は右上がりのタタキと縦位のハケナデ調整、内面はヘラケズリ調整が行われている。（10）は残存率が約1/2でほぼ全容を知り得るものである。丸底に近いやや尖り気味の底部を持つもので、体部最大径は体部中位より少し上位に持つ。（11～13）は体部上半～口縁部が残存するも



第4図 SO-1出土遺物実測図-1



第5図 S0-1出土遺物実測図-2

ので、全体の形態は不明であるが口縁部は叩き出し技法によるものである。今回の出土例に代表される河内型庄内式壺の古い段階の体部形態は、最古の形態とされる壺B₁が体部の三分割成形に沿って太めのタキ調整を行うものであり、体部最大径が体部上位にある。一方、次形態である壺B₂は体部が連續ラセンタキ技法の採用により体部の球形化が計られており、体部最大径が中位にある特長を示している。したがって、体部の上位のみが残存する(11~13)の庄内式壺については壺B₁か壺B₂の駁別は困難であるが、全容を知り得た(10)については、壺B₂に分類されるため、(11~13)についても壺B₂の可能性が高い。

器台—〔器台(14)・器台A1(15)、器台A(16)〕

(14)はやや浅い受部で、内面に細かいヘラミガキが施されている。(15・16)ともに、受部と脚部が貫通する形態の器台A類にあたる。(15)は柱状部が伸びるもので、器台A₁に分類される。器台A類は弥生後期末の大型器台の系譜を引くものであるが、中河内では柱状部が短いものが大半を占めており、(15)のような形態を示す類例は希である。(15)は脚部に3方向、(16)は4方向の透かし孔を持つ。

高杯—〔高杯A₁(17)・高杯C₁(18)〕

(17)は大きく外反する高杯の口縁部である。内外面とも強いヨコナデの後、単位の細かいヘラミガキを放射状に施す。(18)は内外面とも磨滅しているため調整は不明瞭であるが、脚部が大きくひらくところから、椀型の杯部を持つ高杯C₁に対比される。

鉢—〔鉢J₁(19・20)・有孔鉢A(21)〕

(19・20)とも大型鉢J₁に分類される。(19)は底部は平底で、体部が斜上方に直線的に伸

びる。口縁部は内湾しており、端部は丸い。内面は比較的丁寧なヘラミガキを施しているが、外面上には粘土紐の接合痕を明瞭に残し、日立った調整は行われていない。(20) は尖り気味の底部を有する。口縁部は短く外反し、口縁端部に面を持つ。外面上半には継なヘラケズリを施し、上半部には単位が大きい叩きの痕跡がわずかに見られる。(22) は突出する底部を持つ有孔鉢Aである。外面はタタキ調整である。

焼土塊 (22)

大半が破損しており、凹状を示す部分は少ない。一部黒灰色に変色した部分が見られることから鋳型の一部であった可能性もあるが詳細等は不明である。

SO-1の出土土器群は、夜間調査であった為、詳細においては不明な点も多く不確定な要素が含まれているものの、一括性の高い資料と考えられる。河内型庄内式壺の壺B₂の存在から時期的には庄内Ⅱ期に対比されるが、V様式壺の占める比率が高いことや、小型器台に古い形態を残す他、庄内式土器の特徴である精製化への進歩が指摘でき、河内型庄内壺を供給した牛駒西麓部に存在する集落と本遺跡のように河内平野中央部に位置する遺跡間で、一部上器組成の違いがあったことを示唆している。

4) 出土遺物観察表

通 物 番 号	國 坂 番 号	器種	法量(cm) 外側 内側 底径 ○復元度	調査・手法 外側 内側	色調 外側 内側 質 石 英 母	胎 土 石 墨 青 閃 白 サ イ ト チ ト 他	機 械 成 形 存 在 中	裁 切 育 中	備 考 地 区	
1	二	土器 庄口ゆA	(12.8) — —	外側：口縁部ヨコナダ。底部傾 方向のハケナダ。 内側：口縁部ハケナダ。	淡褐色 —	△ 好 △ L △ S	○ L	良好	口縫 部 1/6	SO-1
			(14.7) — —	外側：口縁部ヨコナダ。体部ナ ダ。 内側：口縁部ヨコナダ。体部ナ ダ。	淡黄褐色 —	△ 好 △ L ○ L ▲ S	△ S L	良好	口縫 部 1/6	SO-1
3	二	土器 庄口ゆB	11.8 17.8 3.45 年数記入14.8	外側：(1)縦部ヨコナダ。体部ハ ラミガキ。 (2)横部ヨコナダ後へラ ミガキ。体部はナダ。 内側：口縁部ヨコナダ。	黃褐色 淡褐色	○ 好 ○ L ○ L △ S L	△ M	良好	ほぼ 完形	体部外山下 半堀付着 SO-1
			(16.0) — —	外側：口縁部ヨコナダ。体部ナ ダ。 内側：口縁部ヨコナダ。体部ナ ダ。	淡褐色 黃褐色	△ 好 △ L ○ M L	△ M 赤 ▲ S	良好	1/16	SO-1
5	二	土器 要A ₂	(15.7) 18.9 4.4	外側：タタキ。二分割成形。 内側：ナダ。(1)部は内外面と もヨコナダ。	黃褐色 淡赤褐色	△ 好 △ L ○ S L	○ L	良好	ほぼ 完形	体部外山下 半堀付着 SO-1
			— 3.8	外側：体部タタキ。 内側：(1)部は内外面と もヨコナダ。	黃褐色	△ 好 △ L ○ S L	△ M	良好	1/2	体部外山下 半堀付着 SO-1
7	二	土器 要A ₂	— — 3.3	外側：体部タタキ。 内側：体部ナダ。	灰褐色 赤褐色	△ 好 △ L ○ S L	△ L	良好	底部 完存	SO-1

・凡例 括弧-L 1m以上 M0.5~1m未溝 S0.5m未溝										
遺物番号	版種	法面(c)	調整・手法			色調	胎	土	チヤードの	施成
			外表面	内表面	内表面					
8 二	土師器 甕A:	(15.2) 20.4 3.1 輪郭線18.0	外表面: 体部タキト後部下に ヘラケズリ。そこの上にラミガ キを施す。底部はユビオサエ。 内表面: 体部ヘラケズリ。	黄褐色 灰褐色	良好 良好	◎S-L ◎S-L	○L △L	△L ○S	△L ○S	良好 良好
9 二	土師器 甕I	(15.6)	外表面: 口縁部ヨコナデ。体部ハ タキト。 内表面: 口縁部ヨコナデ。体部ヘ ラケズリ。	暗褐色	良好	○S-L ○S-L	△L △L	○S ○S	△L ○S	良好 良好
10 二	土師器 甕B:	(13.9) 17.55	外表面: 口縁部ヨコナデ。体部は タキトをハケで水滴す。 内表面: 口縁部は内面と互いに ヨコナデ。体部はヘラケズリ。	褐色	良好	△M-L △M-L	△M △M	○S-L ○S-L	△L ○S	良好 良好
11 三	土師器 甕B:	(15.4)	外表面: 口縁部ヨコナデ。体部タ キト無理なハタケ。 内表面: 体部ヘラケズリ。	暗褐色 灰褐色	良好	○S ○S	△L △L	△S △S	○S ○S	良好 良好
12 三	土師器 甕B:	(13.2)	外表面: 口縁部ヨコナデ。体部タ キト。 内表面: 体部はヨカハケ、体部は ヘラナデ。	暗褐色 褐色	暗褐色 褐色	○S ○S	○S ○S	○S ○S	○S ○S	良好 良好
13 三	土師器 甕B:	(14.3)	外表面: 口縁部ヨコナデ。体部タ キトの後、部分的にタキハケ。 内表面: 口縁部ヨコナデ。体部ヘ ラケズリ。	暗褐色	良好	▲S ▲S	○S ○S	○S-L ○S-L	△S-L △S-L	良好 良好
14	土師器 器台	(8.8)	外表面: 受部ヨコナデの後、部分 的にヘラミガキ。 内表面: 受部ヨコナデ後、放射状 にヘラミガキ。	暗褐色	良好	○S-L ○S-L	○L ○L	△S-L △S-L	△S-L △S-L	受部 受部 SO-I
15 三	土師器 器台A	(8.2)	外表面: 住状部ヘラミガキ。受部はハ タキと見られる山形不規則。 内表面: 壁部ナデ。透かし孔は三 方に開く。	暗褐色	良好	○S-L ○S-L	△L △L	△M △M	△L △L	良好 良好
16 三	土師器 器台A		外表面: 住状部や太めの方方向への タキとガキ。裏出張月弓のタキとガキ。 内表面: 壁部ヨコナデ。透かし孔は三 方に開く。	灰白色 暗褐色	良好	○S-L ○S-L	○L ○L	▲S ▲S	M M	良好 良好
17 三	土師器 高杯A:	(21.2)	外表面: 口縁部後ヨコナデ後、 放射状にヘラミガキ。 内表面: 口縁部後ヨコナデ後、 放射状にヘラミガキ。	暗褐色	良好	○S-L ○S-L	○S-L ○S-L	△M △M	△L △L	良好 良好
18 三	土師器 高杯C:	(21.5)	外表面: 腐食しているため測定不 可能。 内表面: 壁部ナデ。	暗褐色	良好	○S-L ○S-L	○M-L ○M-L	○S-L ○S-L	○M-L ○M-L	腐部 腐部 SO-I
19 三	土師器 鉢J:	(33.8)	外表面: 口縁部ナデ。粘土縁の痕 跡が明瞭に残る。体部ナデ。 内表面: 底部は幅方向、体部へII 輪郭は幅方向のハタキ。	暗褐色～ 青褐色 暗褐色	良好	○S-L ○S-L	○M-L ○M-L	○M-L ○M-L	○L ○L	良好 良好
20 三	土師器 鉢J:	(30.3)	外表面: 底部は高いヘラケズリ。 体部中央にはタキの痕跡が残 るがナデ消されている。 内表面: ヘラナデ。	暗褐色	良好	○M-L ○M-L	○L ○L	△S-L △S-L	○M-L ○M-L	良好 良好
21	土師器 有孔鉢A	(4.0)	外表面: タキ。泥斑あり。 内表面: T具痕が残る。	暗褐色	良好	○M-L ○M-L	○L ○L	○M-L ○M-L	○L ○L	底部 底部 SO-I
22 三	埴土塊 (縄張)		外表面: 残存部分はケズリ、もし くは強いナデと思われる剥離の 跡跡が見られるが他の面は 板状面である。	暗褐色～ 黒灰色	良好	○S-L ○S-L	○L ○L	○L ○L	○L ○L	良好 良好

3.まとめ

今回の調査は面積的にも狭小でしかも夜間調査と言うこともあって、必然的に遺物の包含状況や上層の堆積状況に重点をおいた調査に終始せざるを得なかつたが、第1調査区では幸いにも古墳時代前期初頭（庄内式古相）に比定される落ち込み状遺構（S O-1）を面的に捉えることが出来た。これまでに調査地周辺では、第4次調査（TK95-4）と第5次調査（TK95-^{註3}-5）の2回の調査が行なわれている。第1調査区の東約70m地点で行なわれた第4次調査（TK95-4）では、古墳時代前期（布留式古相）の溝遺構ならび平安時代中期から後期の遺物包含層が検出されている。同じく北西約50m地点で行なわれた第5次調査（TK95-5）では、古墳時代中期末～後期と平安時代中期から後期の焼土坑が検出されている。今回の調査で検出された古墳時代前期初頭（庄内Ⅱ期）の集落の存在は、竹測遺跡内で始めて確認されたものであり、今後、周辺での調査例の増加を待って当該期の集落の広がりを追求する必要があろう。



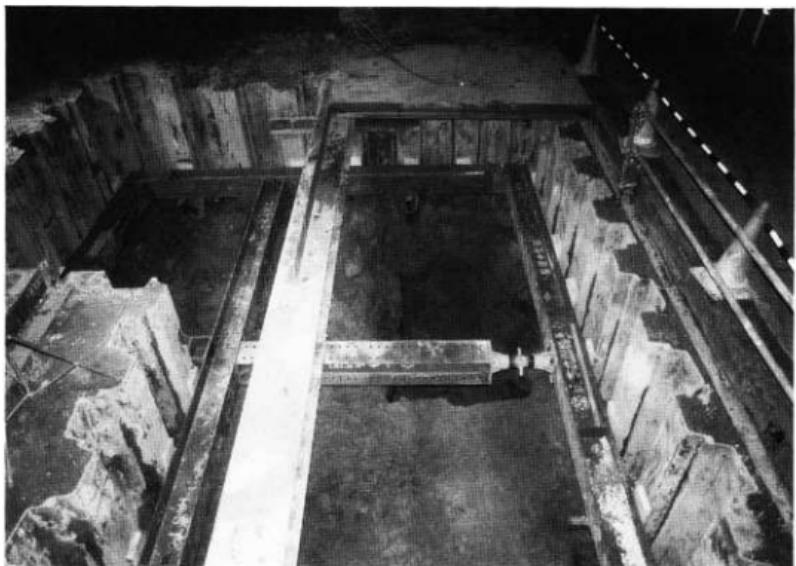
写真1 第2調査区調査風景

註記

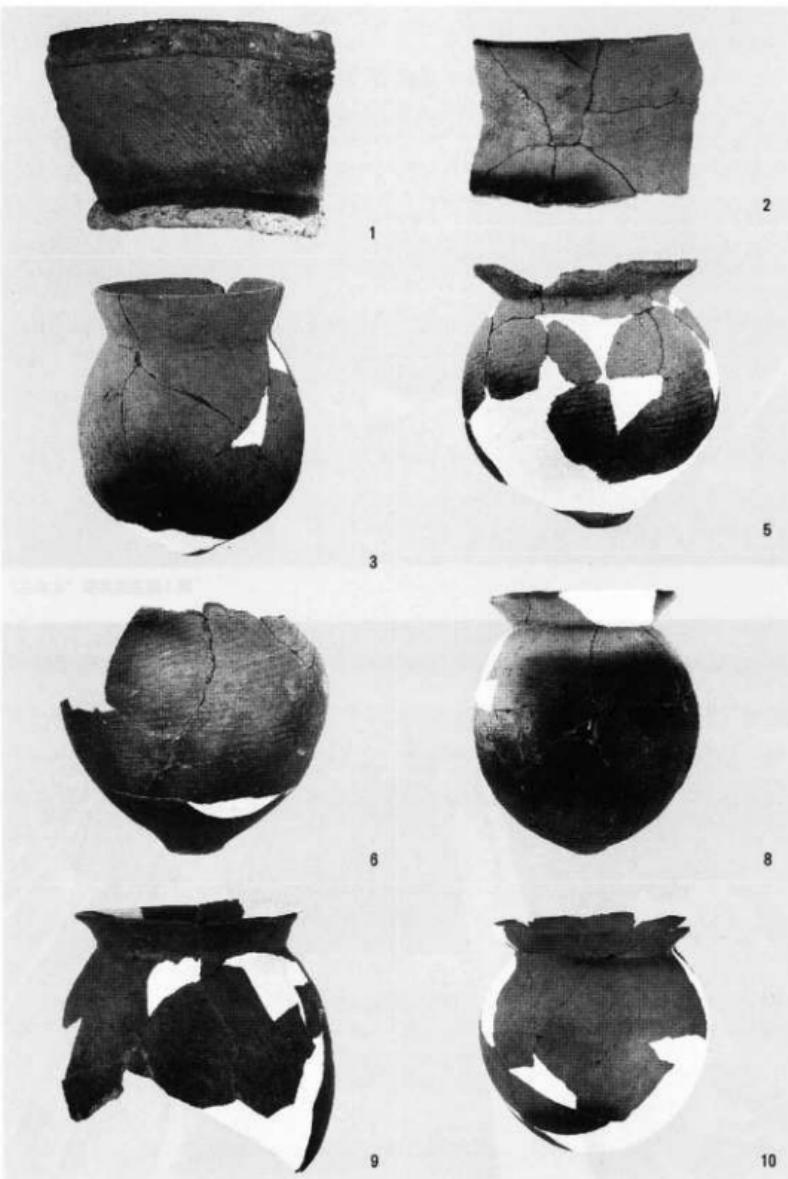
- 註1 原田昌則 1993「八尾市埋蔵文化財発掘調査報告 Ⅱ久宝寺遺跡（第1次調査）」『（財）八尾市文化財調査研究会報告37』（財）八尾市文化財調査研究会
- 註2 高木真光 1981「昭和53・54年度埋蔵文化財発掘調査年報」八尾市教育委員会
- 註3 高萩千秋 1996「16. 竹測遺跡第4次調査（TK95-4）」「平成6年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告」（財）八尾市文化財調査研究会
- 註4 原田昌則 1996「17. 竹測遺跡第5次調査（TK95-5）」「平成6年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告」（財）八尾市文化財調査研究会



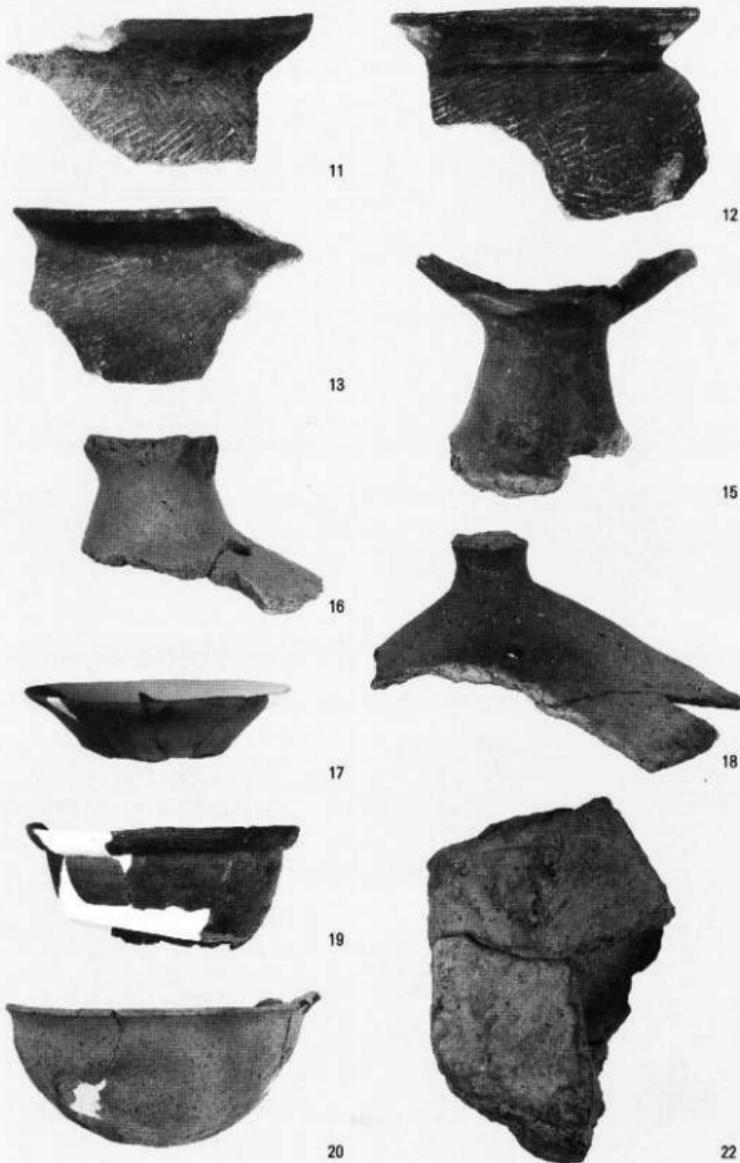
第1調査区南壁（北から）



第2調査区（東から）



SO-1 出土遺物





XI 中田遺跡第29次調査（N T 95-29）

大　目　次

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市中田3丁目50番地先で実施した公共下水道工事（平成7年度第51工区）に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する中田遺跡第29次調査（NT95-29）の発掘調査の業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文理第197-6号 平成7年8月29日）に基づき、財團法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成7年8月17日から8月31日（実働11日間）にかけて、原田昌則を担当者として実施した。調査面積は44m²を測る。調査においては垣内洋平・岸田靖子・西田真紀が参加した。
1. 内業整理は、現地調査終了後、隨時実施し平成8年9月30日に完了した。
1. 本書作成に関わる業務は、遺物実測－岸田・西田 図面トレース－北原清子。
1. 本書の執筆・編集は原田が行った。

本 文 目 次

1.はじめに.....	93
2.調査概要.....	94
1) 調査の方法と経過.....	94
2) 基本層序.....	94
3) 検出遺構と出土遺物.....	96
4) 出土遺物観察表	100
3.まとめ	111

XI 中田遺跡第29次調査 (N T 95-29)

1. はじめに

中田遺跡は八尾市のほぼ中央部に位置する遺跡で、現在の行政区画では中田1～6丁目、刑部1～4丁目、八尾木1～6丁目付近の東西1.1km・南北0.8kmがその範囲とされている。

地理的には、長瀬川と玉串川に挟まれた低位沖積地上の標高10～11m付近を中心と展開している。当遺跡周辺にはこれらの地理的条件を背景として、南に東弓削遺跡、西に矢作遺跡、北西および北に成法寺遺跡・小阪合遺跡が近接する位置に存在しており、遺跡分布が比較的密な地域であることが指摘できる。当遺跡内では、昭和46年以降、大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・当調査研究会により断続的に発掘調査が実施されており、弥生時代前期から近世に至る複合遺跡であることが確認されている。

今回の発掘調査は、中田遺跡推定範囲の北西部にあたる八尾市中田3丁目50番で計画された公共下水道工事（7-51工区）に先だって実施したものである。調査地の周辺では、昭和48～



第1図 調査地周辺図

49年に中田遺跡調査センターが実施した電鉄地下線埋設工事に伴う発掘調査の第IV地区と今回の調査地点の第4グリッド～第8グリッドが隣接する関係にある他、調査地西部では平成3年度に市教育委員会が公共下水道工事に伴って実施した遺構確認調査(91-293)のNO3人孔、NO4人孔の調査地点と近接する関係にある。なお、平成3年度に市教育委員会が実施した遺構確認調査(91-293)では、弥生時代後期末の土器類が多量に出土したSX01や、古墳時代前中期～中期初頭時期の占墳の存在を示唆する埴輪類のほか、鎌倉時代の集落に関連した遺構等が検出されている。

2. 調査概要

1) 調査の方法と経過

今回の発掘調査は、公共下水道工事(平成7年度 第51工区)に伴うもので、人孔設置工事で破壊される部分を対象に調査を実施した。人孔設置部分に2×2m規模のグリッドを全体で11箇所設定し、第1グリッド～第11グリッドと呼称した。

調査に際しては、表上下1.3m前後まで機械掘削した後、以下0.4m前後については人力掘削と機械掘削を併用し遺構・遺物の検出に努めた。その結果、第6層上面で弥生時代後期末、第5層上面で古墳時代前期初頭(庄内式期)ならびに鎌倉時代に比定される遺構を検出した。

第6層上面検出遺構としては、第1グリッドのSK-1(弥生時代後期末)がある。第5層上面検出遺構としては、第9グリッドのSK-2(古墳時代前期～庄内式期)、第1グリッドのSD-1(鎌倉時代)・第10グリッドのSD-2(鎌倉時代)がある。

2) 基本層序

調査地点は公道上の11箇所で、広範囲に分散していたが、各グリッドの第1層から第5層については比較的安定した層相がみられた。また、第5グリッド・第6グリッドにおいては、第7層以下で自然河川の氾濫に起因する粗粒砂の堆積が認められた。ここでは、普遍的に存在した8層を抽出して基本層序とした。

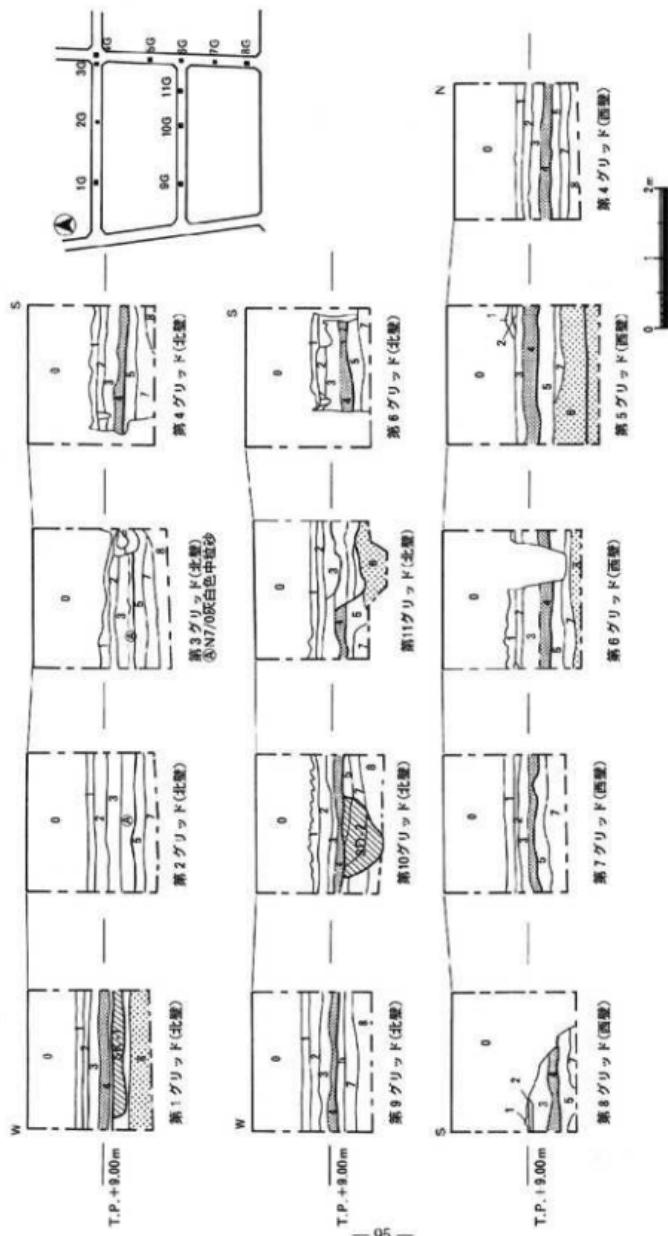
第0層 客土。層厚0.7～1.0m。上面の標高はT.P+10.2～10.1mである。

第1層 10BG4／1暗青灰色粘質シルト。旧耕上。層厚0.15m前後。

第2層 2.5Y8／1灰白色砂質シルト。床土。層厚0.1～0.2m。

第3層 2.5Y7／1灰白色砂質シルト。層厚0.1～0.3m。

第4層 10YR4／1褐色砂質シルト。層厚0.1m前後。中世遺物を含む包含層。第2グリッド・第3グリッドにおいては、河川氾濫に伴うN7／灰白色中粒砂の堆積が認められた。



第2図 各グリッド断面図 (1/80)

- 第5層 2.5Y7/2灰黄色シルト。層厚0.05~0.25m。古墳時代前期(土内式期)ならび鎌倉時代の遺構構築面。
- 第6層 2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルト。層厚0.1m前後。第1グリッドのみで検出。不均質な土質で、客土の可能性が高い。SK-1の構築面。
- 第7層 2.5GY5/1オリーブ灰色粘土~2.5YR5/6明褐色砂質シルト。層厚0.1~0.3m。
- 第8層 N7/ 灰白色粘質シルト。層厚0.2m。

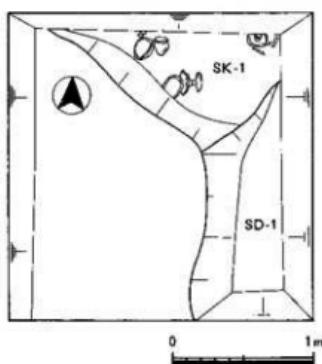
3) 検出遺構・出土遺物

・第6層上面検出遺構

上坑(SK)

SK-1

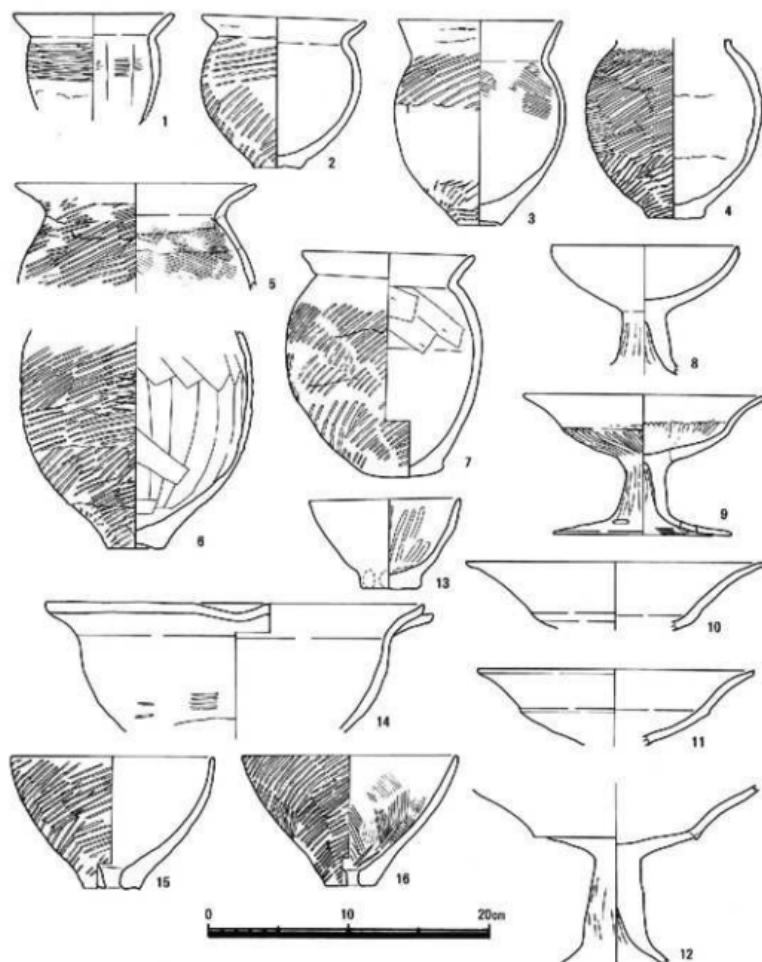
第1グリッドの北部で検出した。東部がSD-1に切られているほか、北部が調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で東西幅1.65m、南北幅0.85m、深さ0.1m前後を測る。埋土は10YR4/2灰黄褐色砂質シルトの單一層である。遺物は検出した面積や深度が浅いにも拘わらず、量的にはコンテナ箱に約半分程度が出土している。時期的には弥生時代後期末に比定されるもので、器種別では、壺・高杯・鉢・有孔鉢土器類等がある。そのうち図化した上器は16点(1~16)である。内訳は壺7点(1~7)、高杯5点(8~12)、鉢2点(13~14)、有孔鉢2点(15~16)である。壺は7点(1~7)図化した。器高の違いから10cm前後の小型品(1~2)、15cm前後の中型品(3~4~7)、20cm前後の大型品(5~6)に区別される。(1~2)はともに二分割成形によるもので、体部外面のタタキ方向は(1)の上段が水平、(2)の上段が水平、下段が右上りである。



第3図 第1グリッド平面図

(3)は上げ底の底部を有するもので、全体の1/5程度が残存している。体部は三分割成形によるもので、上段・下段はタタキ、中段はナデが施されている。(4)は口縁部を欠損している。体部は二分割成形で、最大径が中位にある。底部は小さく突出する平底である。(5)は口縁部の1/4程度が残存している。口縁部は叩き出し技法が使用されている。非牛駒西麓産である。

(6)は体部上位以下が残存している。体部は三分割によるもので、中位が張らず長



第4図 第1グリッドSK-1出土遺物実測図

胴気味の形態を示す。(7)は一部が欠損するものの、ほぼ全容を知ることが可能である。底部は小さく突出する平底を呈するが変形しており、不安定である。体部外面のタタキ調整は全体に浅く不鮮明である。高杯は5点図化した。楕円形の杯部を有する(8)以外は、杯部口縁部が大きく外反するもので、脚部は中空で円錐形ないしは屈折して開く形態の高杯である。(9)

は完形に近い中型の高杯である。口径17.1cm、器高10.0cm、裾部径12.6cmを測る。透かし孔は3個である。非生駒西麓産である。(10・11)は共に口縁部のみの資料である。(10)が非生駒西麓産、(11)が生駒西麓産である。(12)は杯部口縁部と体部の境に明瞭な陵を有している。非生駒西麓産である。(13)は完形の小型鉢である。口径10.6cm、器高6.4cm、底径1.0cmを測る。生駒西麓産である。(14)は流し口を有する大型鉢で、口縁部の1/6程度が残存している。粗製の土器で、胎土中に1~2mm程度の長石・石英・チャート粒が多量に含まれている。(15・16)は逆円錐形を呈する有孔鉢である。体部の外面調整は共に、右上がりのタキである。共に焼成前に内側から外側に向かって穿孔されている。共に生駒西麓産である。

・第5層上面検出遺構

上坑(SK)

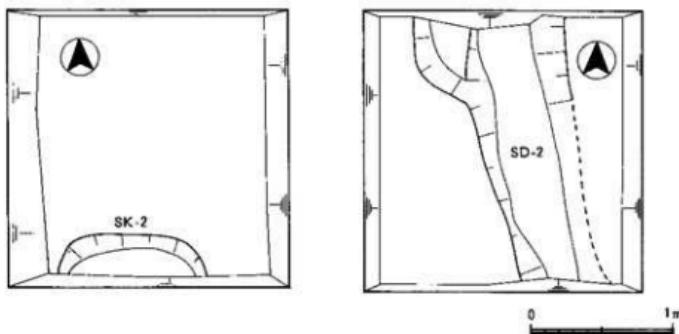
SK-2

第9グリッドの南部で検出した。南部が調査以外に立るために全容は不明である。検出部分は半円形を呈するもので、東西幅1.05m、南北幅0.3m、深さ0.1m前後を測る。埋土はN6/0灰色粘質シルトの單一層である。遺物は古墳時代前期(庄内式期)に比定される甕の小片が少量出土している。

溝(SD)

SD-1

第1グリッドの東部で検出した。調査地の北東部で屈曲した後、南北方向に直線的に伸びるもので、北部でSK-1を切っている。規模は検出部分で検出長1.5m、幅0.65m、深さ0.4mを測る。埋土は2.5Y7/2灰黄色砂質シルトと10BG6/1青灰色砂質シルトの互層である。遺物は鎌倉時代に比定される瓦器鏡の小片が極少量出土している。



第5図 第9グリッド(左)、第10グリッド(右)平面図

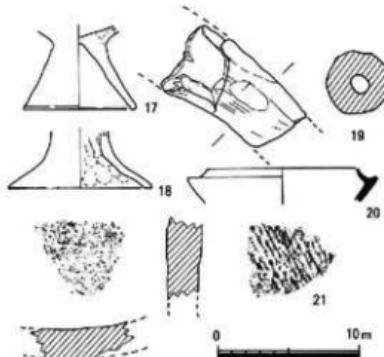
SD-2

第10グリッドで検出した。南北方向に伸びるもので、北部で幅広になる部分がある。検出長2.0m、幅0.7~1.1m、深さ0.6mを測る。断面形状は「U」の字を呈する。埋土は断面形状に沿って3層からなるもので、上層から5Y6/2灰オリーブ粘土、N5/ 灰色粘土と10YR5/3に付い黄褐色の互層、10YR5/1褐灰色シルト質粘土が堆積している。遺物は鎌倉時代に比定される瓦器腕・土師小皿の小片が少量出土している。

包含層出土遺物

第4層および第5層が古墳時代前期から中世時代の遺物を含む遺物包含層で、第2グリッド・第3グリッドを除く各調査区でその存在を認めた。全体に遺物の包含密度は粗く、しかも小片化したものが大半を占めており、量的にはコンテナ1箱にも満たない程度である。そのうち、図化し得たものは5点(17~21)である。内訳は弥生土器脚台部(17)、土師器高杯(18)、人物埴輪(19)、須恵器杯身(20)、平瓦(21)である。

(17)は脚台付きの甕または鉢と推定される。脚台部分は完存しており、裾部径7.8cm、脚部高4.7cmを測る。弥生時代後期の所産と考えられる。第10グリッド第5層出土。(18)は土師器高杯の裾部の小片である。古墳時代後期の所産と推定される。第3グリッド第4層出土。(19)は人物埴輪の左腕の一部と推定される。古墳時代中期後半に対比されよう。第9グリッド第4層出土。(20)は須恵器杯身の小片で、時期的には7世紀初頭に対比されよう。第10グリッド第5層出土。(21)は平瓦片である。全体に摩耗を受けている。凹面の調整は不明であるが凸面は縄タタキの痕跡が認められる。第8グリッド第4層出土。



第6図 第3グリッド(18)、第8グリッド(21)、
第9グリッド(19)、第10グリッド(17・
20) 出土遺物実測図

4) 出土遺物観察表

・凡例：粒径 - L 1mm以上 M 0.5~1mm未満 S 0.5mm未満 □多い ○多い △少ない ▲希少 ■赤一赤色顔化土

遺物番号	法蓋(cm)	調査・手法	色調	地 土						焼成 保存 状況	保 存 率	備考 地区
				外表面	長石	石英	角閃石	チコリト	その他の鉱物			
1 三	弥生土器 甕	(11.2) -	外表面：体部上位水平方向のタタキ。 内面：口縁部ヨコナギ。体部ハケナガ後ナギ。	淡灰褐色～ 灰褐色 灰白色～ 灰黑色	○ △ S M	△ M S M	▲ M L	▲ M L	■	良好	1/2	日暮 部 第1G SK-1
2 三	弥生土器 甕	11.4 19.5 3.3	外表面：口縁部ヨコナギ。体部二分割成形。右トガりのタタキ。 内面：口縁部ヨコナギ。体部ナギ。	茶褐色～ 灰褐色 茶褐色	○ △ S M	△ M S M	△ S M	△ S M	■	良好	ほぼ 完形	第1G SK-1
3 三	弥生土器 甕	11.5 14.5 3.9	外表面：口縁部ヨコナギ。体部下位後ナギ。中位トガ。 内面：口縁部ヨコナギ。体部ナギ、一部ハケナギ。	茶褐色 茶褐色	○ △ S M	△ M S M	○ S M	○ S M	■	良好	1/4	第1G SK-1
4 三	弥生土器 甕	- -	外表面：体部二分割成形。体部右上かりのタタキ。 内面：体部ナギ。	茶褐色 茶褐色	△ S M	△ M L	○ S M	○ S M	■	良好	1/3	第1G SK-1
5 三	弥生土器 甕	(16.8) -	外表面：口縁部ヨコナギ。口縁部ヨコナギ。体部ハケナギ。 内面：口縁部ヨコナギ。体部ナギ。	淡茶褐色 茶褐色	△ S M	△ M S	△ S M	△ S M	■	良好	口縫 部 1/4	第1G SK-1
6 三	弥生土器 甕	- 3.8	外表面：体部三分割成形。体部右上がりのタタキ。 内面：体部ナギ。	淡茶褐色 茶褐色	○ S M	△ M L	△ S M	△ S M	■	良好	1/4	第1G SK-1
7 三	弥生土器 甕	12.0 16.2 5.0	外表面：口縁部ヨコナギ。体部右上かりのタタキ。 内面：口縁部ヨコナギ。体部上部ナギ、下部トガ。	淡茶褐色～ 灰白色	○ S M	△ M L	○ S M	△ S M	■	良好	ほぼ 完形	第1G SK-1
8 三	弥生土器 高杯	(13.1) -	外表面：杯口部ヨコナギ。以下ナギ。 内面：ナギ。柱状部シボリメ。	淡赤褐色 茶褐色	○ S M	○ S M	○ S M	○ S M	■	良好	1/2	第1G SK-1
9 三	弥生土器 高杯	17.1 10.0 -	外表面：口縁部ヨコナギ。杯体部ハラミガキ。 内面：口縁部ヨコナギ。杯体部ハラミガキ。柱状部シボリメ。	黄褐色 茶褐色	○ S M	△ M L	○ S M	△ S M	■	良好	ほぼ 完形	第1G SK-1
10 三	弥生土器 高杯	(21.1) -	外表面：杯口部右および体部ヨコナギ。 内面：杯口部右および体部ヨコナギ。	黄褐色 茶褐色	○ S M	○ S M	○ S M	△ L	■	やや 不良	口縫 部 1/6	第1G SK-1
11 三	弥生土器 高杯	(19.6) -	外表面：杯口部右および体部ヨコナギ。 内面：杯口部右および体部ヨコナギ。	淡茶褐色 茶褐色	○ S M	○ S M	○ S M	△ S M	■	やや 不良 断面 剥離	口縫 部 1/4	第1G SK-1
12 三	弥生土器 高杯	-	外表面：杯口部ヨコナギ、体部ナギ。柱状部ハラミガキ。 内面：杯口部ナギ。柱状部シボリメ。把部ナギ。	灰白色～淡 赤茶色 灰白色	○ S M	△ L	▲ M	▲ L	■	良好	柱状 部 厚壁	第1G SK-1
13 四	弥生土器 甕	10.6 6.4 4.0	外表面：口縁部および体部ナギ。 内面：体部ナギの後、クナカ利のハラミガキ。	茶褐色 茶褐色	△ M L	○ S M	○ S M	○ S M	■	良好	ほぼ 完形	第1G SK-1
14 四	弥生土器 甕	(26.8) -	外表面：口縁部ヨコナギ。体部左タタキ、右ナギ。 内面：口縁部ヨコナギ。体部ナギ。	茶褐色～深 灰色 茶褐色	○ S M	○ S M	△ S M	△ S M	■	良好	口縫 部 1/4	第1G SK-1
15 四	弥生土器 底部孔 甕	14.1 9.3 4.0	外表面：体部右上がりのタタキ。 内面：体部ナギ。	淡赤褐色 茶褐色	○ S M	○ S M	○ S M	○ S M	■	良好	ほぼ 完形	第1G SK-1

遺物番号	器種	底高	底深	○ 備元	・例: 棒径-L 1cm以上 M0.5~1m未満 S0.5m未満										△多い	△少ない	▲希少	●赤-赤色鐵化土
					底径・手法		色調		胎土		チモリの付		焼成		残存率			
					外側	内面	外面	内面	素長石	石	黒	角石	チモリの付	焼成	残存率		備考地区	
					口徑	底深	外側	内面	質	石	炭	角	チモリの付	焼成	残存率			
16 西	仰転土器 底部有孔 林	16.4 9.2 3.6	外側: 体部右上にカタキ。 内面: 体部ハケナデ。	灰白色-赤褐色 淡赤褐色	やや粗	L	○	○	▲	S	▲	S	▲	M	良好	1/4	第1G SK-1	
17 四	弥生土器 脚付上 石	4.7 脚部7.8	外側: 体部および脚部ナデ。 内面: 細部ナデ。	淡赤褐色	やや粗	L	○	○	▲	S	▲	S	▲	M	良好	脚部 良好	第10G 第3層	
18	土器唇 高杯	- 国屋(10.2)	外側: 脚部ナデ。 内面: 脚部指頭圧成形後ナデ。	淡赤褐色	粗	L	△	S	▲	L	△	S	▲	S	良好	根部 1/6	第3G 第1層	
19 四	人物埴輪	- 人物埴輪	外側: ナデ。一部ハケナデ。 内面: ナデ。	赤褐色	粗	L	○	○	▲	S	▲	S	▲	S	良好	左胸 の部 第9G 第4層		
20	灰陶器 舟身	(10.6)	外蓋: 口縁部から体部下半回転、灰白色 ナデ。 内底: 口縁部から体部上下回転 ナデ。	灰白色	粗	M	▲								良好	1/12	第10G 第5層	
21	尾瓦 平瓦	- 平瓦	凹面: 部右目を残すが大半は 磨滅のため不明。 凸面: 調目タキ。	赤褐色 灰白色	やや粗	L	○	○	▲	S	▲	S	▲	S	良好	小片	第8G 第4層	

3. まとめ

今回調査では、小規模で点的な調査であったにも拘わらず弥生時代後期末・古墳時代前期(庄内式期)・古墳時代中期・鎌倉時代に比定される遺構・遺物を検出した。以下、既往調査の成果を含めて概観してみる。

弥生時代後期末に比定されるものとしては、調査地の北西部の第1グリッドで検出したSK-1がある。SK-1を検出した第6層は第1グリッドのみで検出したもので、続く東部の調査地では存在が認められない点や、後出遺物を含む包含層との標高差からみても高位置に存在することから、方形周溝墓の墳丘の一部であった可能性が想定される。従って、方形周溝墓と想定した場合、SK-1は周溝のコーナー部分であった可能性が高く、完形品を含む土器類の出土もそれら想定するうえで示唆的である。なお、第1グリッドの南東約70m地点で、八尾市教育委員会が平成3年度に公共下水道工事に伴って実施した発掘調査(91-293)のN○4人孔北区においても、幅1.7~2.0m、深さ0.3~0.4mを測る弥生時代後期末の溝状遺構(本文ではSX01)が検出されており、これらも方形周溝墓であった可能性が高い。

古墳時代前期の遺構としては、第9グリッドでSK-2を検出したのみで、当該期の遺物を包含する第5層からも遺物が少量出土した程度である。既往調査においては、調査地の北西約80m地点で当調査研究会が平成元年に実施した第2次調査(NT89-2)で、この時期の遺構・^{註1}

註2

遺物が検出されており、当該期の集落の中心が本調査地の北部一帯に存在していたようである。古墳時代中期の遺物としては第9グリッドの第4層から人物埴輪片が出土している。第9グリッドの西約30m地点で行われた八尾市教育委員会による発掘調査(91-293)のN○4人孔からは、本例より時期が遡る川西編年の第II期に対比される円筒埴輪が検出されており、4世紀後半から5世紀中葉段階には、第9グリッド付近から西部一帯に墓域が存在していたことが明らかとなった。^{註3}

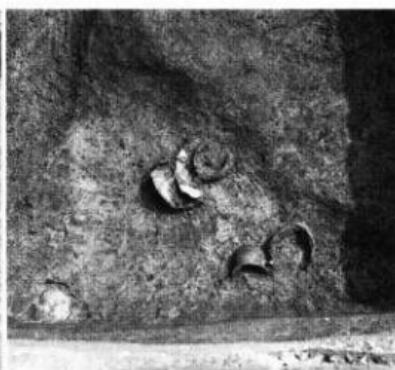
鎌倉時代の遺構としては、第1グリッドでSK-1、第10グリッドでSD-2を検出した。また、遺構は検出されていないものの、南東部に位置する第6グリッド～8グリッド・第11グリッドでは当該期の遺物を含む包含層が確認されており、遺構が存在する可能性が高い。なお、前述の八尾市教育委員会による発掘調査(91-293)では、N○4人孔の調査で、13世紀前後に比定される井戸状遺構が1基検出されている。

註記

- 註1 吉田野乃 1992-8. 中田遺跡(91-293)の調査』『八尾市内遺跡平成3年度発掘調査報告書II』
八尾市文化財調査報告26 八尾市教育委員会
- 註2 青木勘時 1990-15. 中田遺跡(N T89-2)』『八尾市文化財調査研究会年報平成元年度』(財)
八尾市文化財調査研究会報告28 (財)八尾市文化財調査研究会
- 註3 川西宏幸 1978「円筒埴輪論」『考古学雑誌』第64巻第2号 日本考古学会



第1グリッド全景（北から）



第1グリッドSK-1遺物出土状況（北から）



第2グリッド北壁（南から）



第3グリッド北壁（南から）



第4グリッド全景（北から）



第5グリッド全景（北から）



第6グリッド南壁（北から）



第7グリッド西壁（東から）



第8グリッド西壁（東から）



第9グリッド北壁（南から）

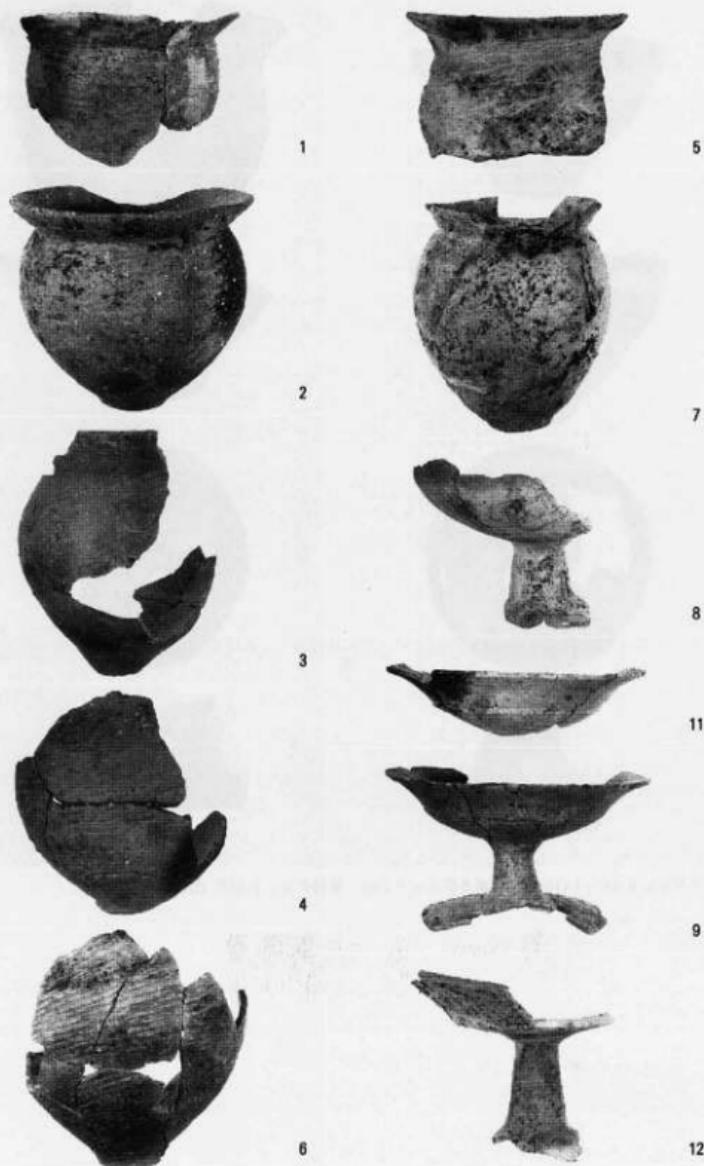


第10グリッド北壁（南から）

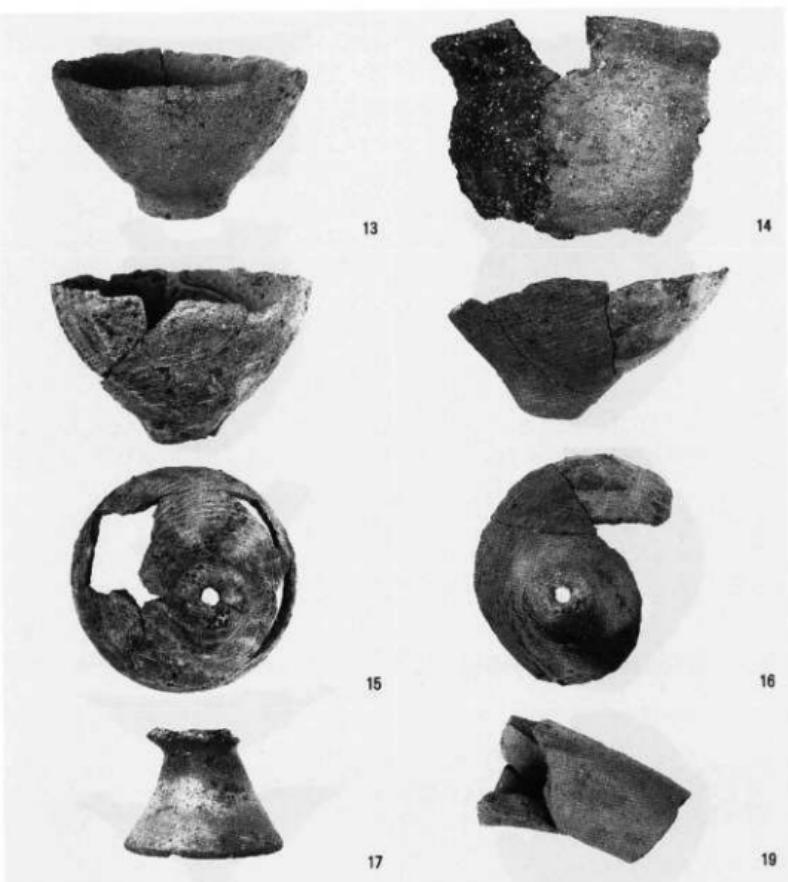


第11グリッド北壁（南から）

図版三



第1グリッド SK-1出土遺物



第1グリッドSK-1(13~16)、第9グリッド(19)、第10グリッド(17)出土遺物

XII 中田遺跡第32次調査（NT95-32）

例　　言

1. 本書は大阪府八尾市八尾木北6丁目96番地で実施した防火水槽設置工事に伴う発掘調査である。
1. 本書で報告する中田遺跡第32次調査(NT95-32)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書(八教社文埋第160-3号 平成7年11月1日)に基づき財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成7年12月18日から12月21日にかけて、高萩千秋が担当者として実施した。調査面積は32.5m²を測る。なお、調査においては八田雅美・赤澤茂美・中村百合・市森千恵子が参加した。
1. 本書に関わる業務は、遺物実測・図面レイアウト・トレースー中村・西岡・市森が行った。
1. 本書の執筆・編集は高萩が行った。

本　文　目　次

1. はじめに	107
2. 調査概要	108
1) 調査の方法と経過	108
2) 基本層序	111
3) 検出遺構と出土遺物	111
3. まとめ	112

XII 中田遺跡第32次調査（NT95-32）

1. はじめに

中田遺跡は大阪府八尾市のほぼ中央に位置し、現在の行政区画では中田1～5丁目、刑部1～4丁目、八尾木北1～6丁目の範囲にある。地理的には旧大和川の主流である長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上に立地する。同一沖積地上では西に矢作遺跡、南に東弓削遺跡、北に小阪合遺跡が接している。

当遺跡の契機は、昭和45年の区画整理事業の際発見された遺跡で、以後、中田遺跡調査会・大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・当調査研究会により断続的に発掘調査が実施され、弥



第1図 調査地位置図及び周辺図

生時代前期から近世に至る複合遺跡であることが確認されている。特にこれらの調査成果では古墳時代前期の時期を中心としたものが遺跡全般で検出されている。

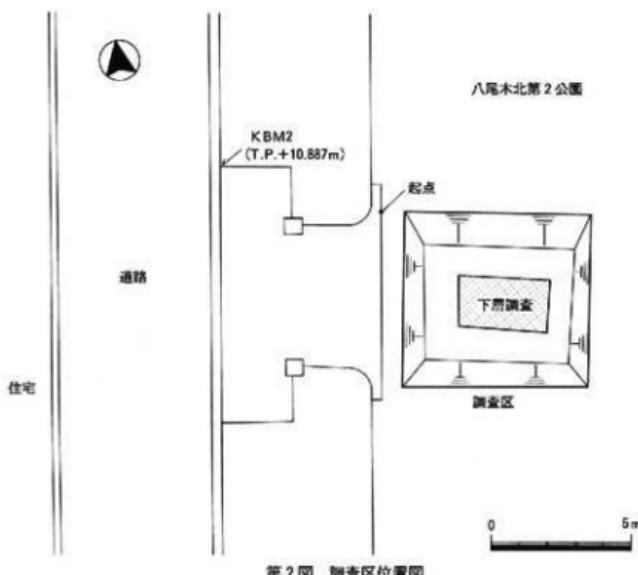
今回の調査地は中田遺跡の南東部付近の周辺では、当調査区西側の南北道路上で、当調査研究会による公共下水道工事に伴う調査（NT92-14）が実施されており、主に古墳時代前期の集落遺構が検出されている。さらにその周辺では第1図に示すように数十次の発掘調査が実施され古墳時代前期を中心とした遺構・遺物が多数検出されており、非常に密な地域であることが指摘できる。

2. 調査の概要

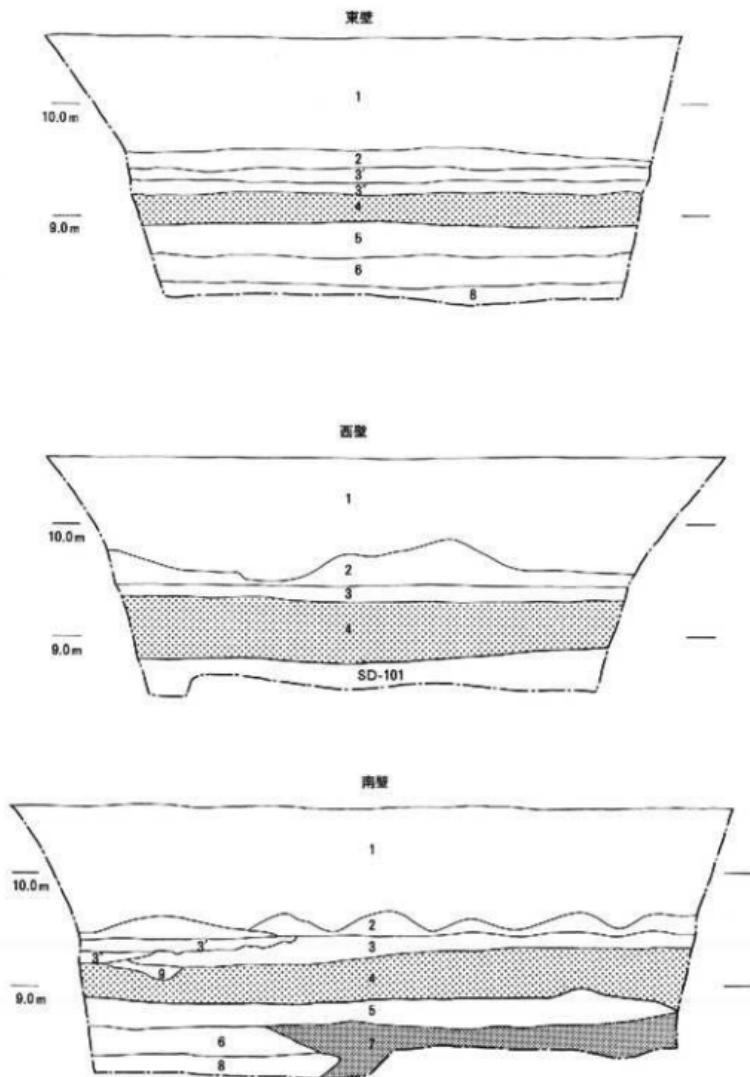
1) 調査の方法と経過

今回の発掘調査は防火水槽工事に伴うもので、当調査研究会が中田遺跡内で行った第32次調査にあたる。調査区は水槽設置により破壊される部分を対象に設定し、調査を実施した。規模は 6×6 mのグリッドを設定した。

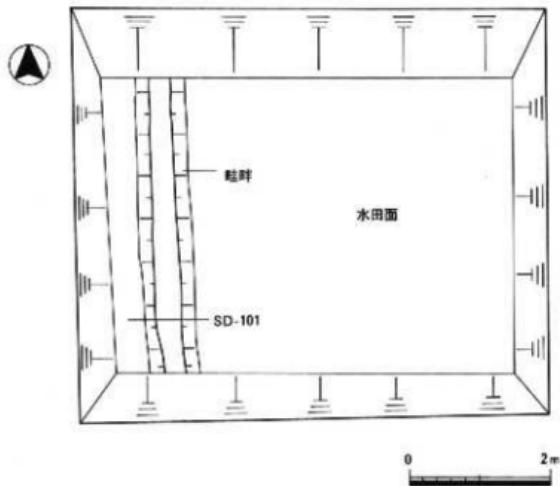
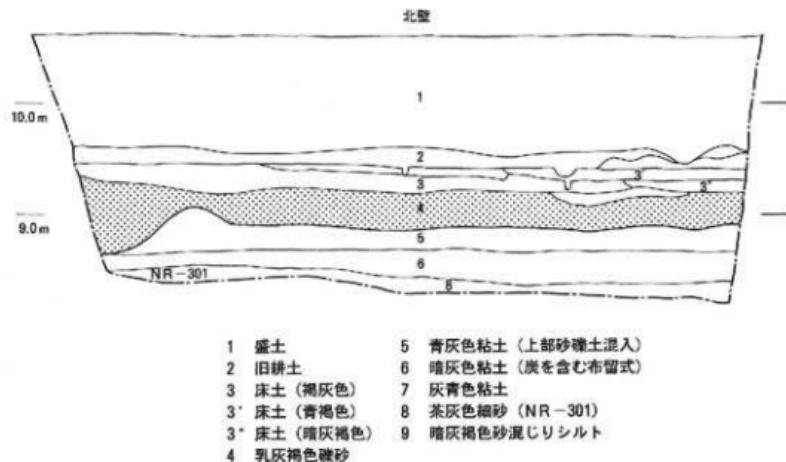
調査に際しては、現表土（T.P.+10.6m）下1.6m前後までを機械掘削した後、以下1.4m前後については人力掘削と機械掘削を併用し遺構・遺物の検出に努めた。その結果、現地表下約2.0mの第8層は弥生時代後期の河川1条（NR-301）、現地表下約1.8mの第6層で古墳時代



第2図 調査区位置図



第3図 断面図



第4図 断面図及び平面図

前期（布留期）の遺物を含む上層、現地表下約1.7mの第5層上面で鎌倉時代の時期の氾濫で埋没した水田面1箇・溝1条（SD-101）・畦畔1条（第1調査面）を検出した。

2) 基本層序

調査区は八尾木北第2公園敷地内の西部で、第14次調査（NT92-14）の調査区北端の東部にあたる。層序は普遍的に存在した8層を抽出して基本層序とした。

第1層 盛土。層厚1.0m前後。区画整理の造成により盛った土層である。上部は公園広場のため平坦である。上面の標高はT.P.+10.6mである。

第2層 旧耕土。層厚0.5~0.2m。南北方向の段の高まりが数条みられることから、畑として耕作していた時期に埋まったものと思われる。

第3層 床土。層厚0.2~0.25m。3' 層は青みがあり、3" 層は暗青色となる。

第4層 乳灰褐色礫砂。層厚0.4~0.5m。平安時代後期～鎌倉時代初頭の洪水で堆積した層である。

第5層 青灰色粘土。層厚0.2m前後。水田耕作上で、上面は足跡の深みが残存する水田面である（第1調査面）。

第6層 暗灰色粘土。層厚0.25m前後。炭・焼失した木片が含まれる。また古墳時代前期（布留期）の上器片をごく少量含む。

第7層 暗青色粘土。層厚0.2m前後。粘着性のある上層である（第2調査面）。東部へ行くに従いやや低い。

第8層 茶灰色細砂。層厚0.8m以上。1~5mmの砂粒である。弥生時代後期の遺物をごく少量出土した。層厚は多量の地下水があり、確認できなかった（第3調査面）。

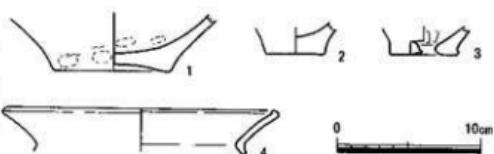
3) 採出遺構と出土遺物

▼弥生時代後期（第3調査面）

河川（NR-301）

第7層下で検出した。方向・規模は小面積な調査ため不明である。深さも多量の地下水があり、0.8mまでしか確認できなかった。河川は淡灰茶色細砂（砂粒の大きさ1~5mm）が堆積し、内部から弥生時代後期に比定される無頸壺・蓋（1・2）

・有孔鉢（3）の小片がごく少



第5図 NR-301 (1~3)・第6層 (4) 出土遺物実測図

量出土している。

▼古墳時代前期（第2調査面）

第6層内より庄内式新相～布留式古相に比定される土器が出土した。庄内式壺・布留式壺などの小片である。図示できたものは庄内式壺の口縁部（4）だけである。遺構の確認についてはその下の第7層上面を精査したがなかった。

▼鎌倉時代（第1調査面）

水田遺構（SD-101・畦畔・水田）

第4層下で水田遺構を検出した。水田は氾濫等により埋没した第10層により埋まつたものである。水田は氾濫により若干の起伏がみられた。また牛足と思われる足跡が多数残存していた。調査区の西側には南北方向に伸びる畦畔1条と水路と思われる溝1条（SD-101）を検出した。畦畔は上幅20cm、下幅50cm、高さ15cm前後を測り、その畦畔の西端から30度前後の角度で落込むSD-101である。SD-101は検出部で深さ0.6mを測り、畦畔と平行に走り、埋土内には砂粒の人気さがそろった明茶灰色細砂を堆積する。溝幅は西側が調査区外に至り不明である。遺物は第4層内より古墳時代に比定される須恵器壺蓋・土師器壺・鎌倉時代に比定される瓦器碗・土師小皿などの小片が少量出土している。

3.まとめ

今回の調査では、弥生時代後期から鎌倉時代に比定される遺構・遺物を検出した。以下、既往調査の成果を踏まえて当調査区で検出した遺構・遺物について概括する。

弥生時代後期に比定されるものとしては、当調査区では河川と思われる砂層だけである。当調査区から東部へ約150mの第17次調査（NT93-17）で大型器台を出土した土器集積が検出されている。北東部へ約250mの第15次調査（NT92-14）で長頸壺・器台等を出土した土坑が検出されている。しかし、これらの調査は当調査区と同様、小規模な調査であり具体的な遺構の性格は未だであるが、当地にも弥生時代後期の時期が存在していたことは明らかであると言える。

古墳時代前期（布留期）に比定されるものとしては、第6層内で少量出土した程度である。当調査区から南西へ約30～140mの第14次調査（NT92-14）・北西へ約140～200mの第26次調査（NT94-26）で古墳時代前期（布留古相）の集落遺構が検出されている。また、西へ約130mの第10次調査（NT91-10）では瓦質土器を含む布留土器を出土した溝状遺構が検出されている。さらに、当調査区周辺では庄内期～布留期にかけての集落が営されていたことが確認されており、当地の西側周辺は集落域であることが言えるであろう。

鎌倉時代の遺構としては、水田を検出した。この時期は当地周辺は牛產域であったことが第

14・18・20次調査で検出している。集落は当調査区から東へ約300mの第25・29・30次で検出されている。

以上、当地周辺の調査成果の状況である。

参考文献

- ・鶴村友子 1988「8. 中田遺跡(86-532)の調査」『八尾市内遺跡昭和62年度発掘調査報告書I』八尾市文化財調査報告17 八尾市教育委員会
- ・坪田真一 1990「16. 中田遺跡(NT89-03)の調査」『八尾市文化財調査研究会年報 平成元年度』八尾市文化財調査報告28(財)八尾市文化財調査研究会
- ・坪田真一 1990「17. 中田遺跡(NT89-04)の調査」『八尾市文化財調査研究会年報 平成元年度』八尾市文化財調査報告28(財)八尾市文化財調査研究会
- ・坪田真一 1992「II 中田遺跡(第3-4次調査)」「平成4年度」八尾市埋蔵文化財発掘調査報告(II)『八尾市文化財調査研究会報告35(財)八尾市文化財調査研究会
- ・坪田真一 1993「VIII 中田遺跡(NT92-11)第11次調査」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』八尾市文化財調査報告39(財)八尾市文化財調査研究会
- ・坪田真一 1993「IX 中田遺跡(NT92-13)第13次調査」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』八尾市文化財調査研究会報告 39(財)八尾市文化財調査研究会
- ・高萩千秋 1994「II 中田遺跡第17次調査(NT93-17)」「財團法人八尾市文化財調査研究会報告43」(財)八尾市文化財調査研究会
- ・成海佳子 1994「III 中田遺跡第18次調査(NT93-18)」「財團法人八尾市文化財調査研究会報告43」(財)八尾市文化財調査研究会
- ・坪田真一 1994「35 中田遺跡第19次調査(NT93-19)」「平成5年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告」(財)八尾市文化財調査研究会
- ・高萩千秋 1994「IV 中田遺跡第20次調査(NT93-20)」「財團法人八尾市文化財調査研究会報告43」(財)八尾市文化財調査研究会
- ・高萩千秋 1994「V 中田遺跡第21次調査(NT93-21)」「財團法人八尾市文化財調査研究会報告43」(財)八尾市文化財調査研究会
- ・西村公助 1994「VI 中田遺跡第22次調査(NT93-22)」「財團法人八尾市文化財調査研究会報告43」(財)八尾市文化財調査研究会
- ・原川昌則 1995「22. 中田遺跡第25次調査(NT94-25)」「平成6年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告」(財)八尾市文化財調査研究会
- ・岡田清一 1995「23. 中田遺跡第26次調査(NT94-26)」「平成6年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告」(財)八尾市文化財調査研究会
- ・坪田真一 1995「24. 中田遺跡第27次調査(NT94-27)」「平成6年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告」(財)八尾市文化財調査研究会



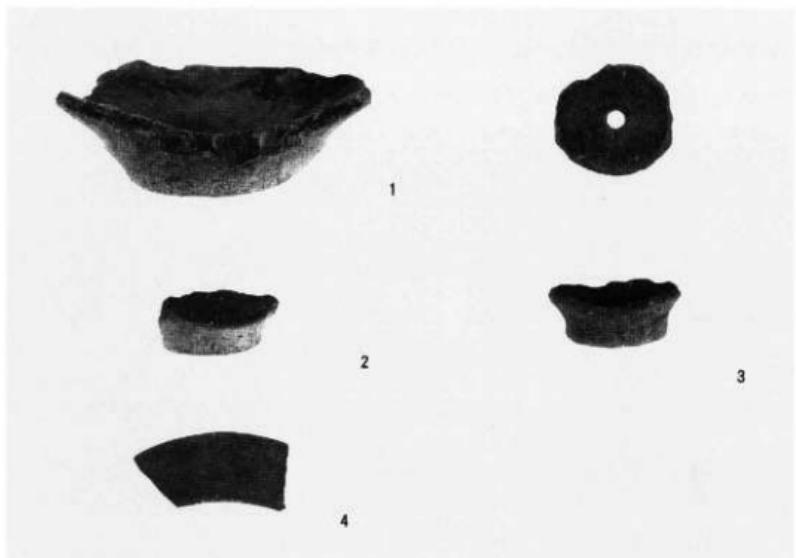
下層確認（北から）



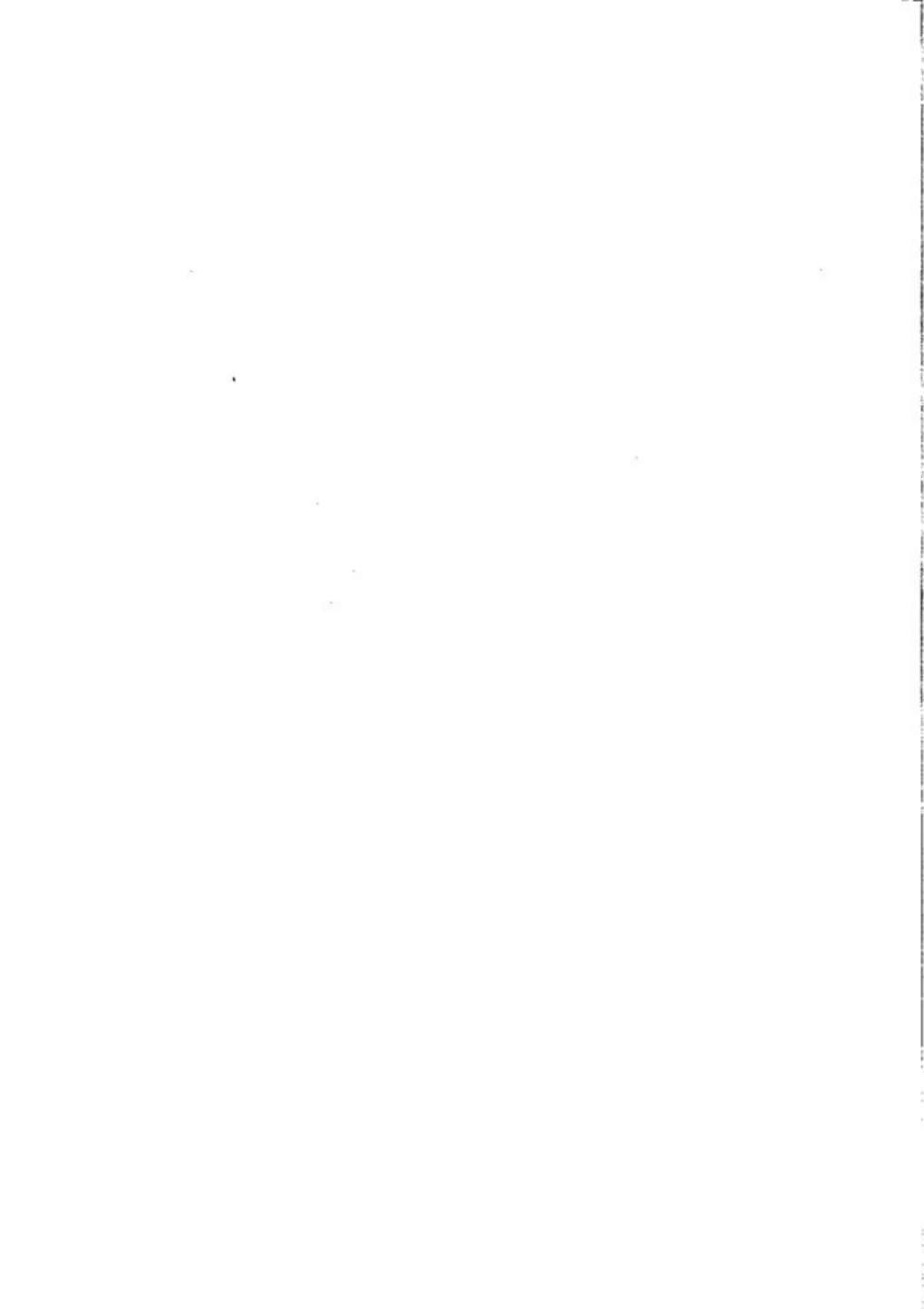
古墳時代前期の面（北から）



中世の水田面（北から）



NR-301 1~3 第6層 4 出土遺物



XIII 東弓削遺跡第9次調査(HY95-9)

大西一郎

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市東弓削1・2丁目地内で実施した公共下水道工事（平成7年度第23工区）に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する東弓削遺跡第9次調査（HY95-9）の発掘調査の業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文埋第376-3号 平成7年10月2日）に基づき、財團法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成8年3月23日から3月29日（実働3日間）にかけて、原田昌則を担当者として実施した。調査面積は140m²を測る。調査においては岸田靖子・西田真紀が参加した。
1. 内業整理は、現地調査終了後、隨時実施し平成8年9月30日に完了した。
1. 本書作成に関わる業務は、遺物実測－岸田・沢村妙子・西田、図面トレース－北原清子。
1. 本書の執筆・編集は原田が行った。

本　文　目　次

1.はじめに	117
2.調査概要	118
1) 調査の方法と経過	118
2) 基本層序	119
3) 検出遺構と出土遺物	119
4) 遺構に伴わない遺物	120
3.まとめ	121

XIII 東弓削遺跡第9次調査(HY95-9)

1. はじめに

東弓削遺跡は、八尾市南部の東弓削・東弓削1~3丁目・八尾木1~6丁目・八尾木東1~3丁目・都塚・刑部に所在しており、地理的には旧大和川の主流であった長瀬川と玉串川に挟まれた低位沖積地上の標高13~10mに位置している。東弓削遺跡は、この二大河川に挟まれて南北方向に伸びる低位沖積地の南端部に位置しており、当遺跡より北に中田遺跡・矢作遺跡・小阪合遺跡、玉串川を隔てて東に恩智遺跡、長瀬川を隔てて南に弓削遺跡、西に田井中遺跡・志紀遺跡・老原遺跡が位置している。



第1図 調査地周辺図

当遺跡一帯は、『続日本記』の神護景雲三年（769）十一月三十日の条「詔以由義宮、為西京」と記されている由義宮・西の京の推定地にあたる地域で、昭和42年に行なわれた大阪外環状線（国道170号線）の敷設工事の際、当該期に比定される土器類が出土したことにより、遺跡の存在が認識されるようになった。その後、昭和50年に八尾市教育委員会より送水管敷設工事に伴う発掘調査が遺跡内で実施されて以来、現在に至るまで八尾市教育委員会・当調査研究会により数多くの発掘調査が実施されてきた。これらの発掘調査の結果、当遺跡が弥生時代中期から鎌倉時代に至る複合遺跡であることが確認されている。

今回の調査地点である東弓削1・2丁目の周辺では、昭和50年度に八尾市教育委員会により上水道の送水管布設工事に伴う発掘調査が実施されたほか、昭和61年度には八尾市東弓削102-1で当調査研究会が鉄塔建設に伴う第2次調査（II Y86-2）を実施している。昭和50年度に行なわれた発掘調査ではB-5～B-10・C地区で奈良時代～鎌倉時代の屋瓦片と小砾を含む上層の存在が確認されており、瓦を用いた建物の存在が想定されている。また、昭和61年度の調査では鎌倉時代末期以降の水田を検出している。

今回の発掘調査は、八尾市東弓削1・2丁目地内で計画された八尾市公共下水道工事（平成7年度 第23工区）に伴うもので、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づき、八尾市教育委員会・八尾市・（財）八尾市文化財調査研究会との間で取りかわした協定書締結後、現地調査を実施した。

2. 調査概要

1) 調査の方法と経過

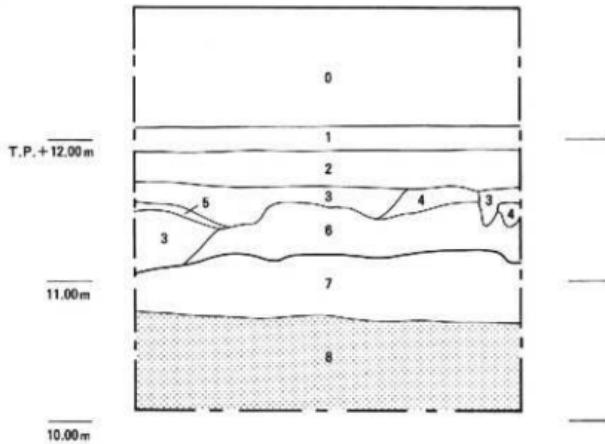
今回の発掘調査は公共下水道工事（7-23工区）の立坑設置に伴うもので、鋼矢板で開続された東西幅8.15m、南北幅8.55m、面積約70m²を調査対象とした。

調査では、T工事の進捗状況に沿って現地表下1.7m（標高11.2m）までを、機械掘削と人力掘削を併用して層理毎に遺物の包含状況と生活面の有無の確認に努めた。以下については、薬剤注入が予定されており面的な調査が不可能であるため、下層の上層堆積を確認する目的でさらに一部で1m前後の掘削を行った。

調査の結果、現地表下1.4～1.8m（標高11.6～11.2m）で江戸時代中期の遺物を包含する第6層（2.5Y5/1黄灰色極細粒砂とN7/ 灰白色細粒砂の互層）を確認したほか、第7層（N7 / 灰白色細粒砂）上面では江戸時代中期の溝1条（SD-1）を検出した。また、第7層以下においては、中粒砂～中砾を主体とする河川氾濫に起因する第8層の存在が確認されている。遺物は第6層および遺構内から出土したが、量的には少量である。

2) 基本層序

- 第0層 盛土。層厚0.85m。上面の高はT.P.+12.00mを測る。
- 第1層 10YR6/1褐灰色砂質シルト。層厚0.2m前後。
- 第2層 5Y7/3浅黄色細粒砂とN7/ 灰白色粘土質シルトの互層。層厚0.25m前後。
- 第3層 2.5GY8/1灰白色極細粒砂。層厚0.1~0.3m。
- 第4層 10YR6/1褐灰色極細粒砂と5Y8/3淡黄色細粒砂の互層。層厚0.15~0.2m。
- 第5層 N7/ 灰白色粘土質シルト。層厚0.05m前後。
- 第6層 2.5Y5/1黄灰色極細粒砂とN7/ 灰白色細粒砂の互層。層厚0.3m前後。江戸時代中期の遺物を含む。
- 第7層 N7/ 灰白色細粒砂。層厚0.25~0.5m。江戸時代中期遺構検出面。
- 第8層 5Y8/3淡黄色中粒砂~中疊。層厚0.6m以上。中世遺物を含む。



第2図 南壁断面図 (S=1/40)

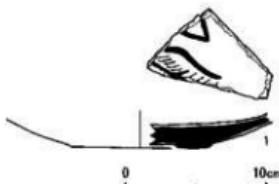
3) 検出遺構と出土遺物

溝(SD)

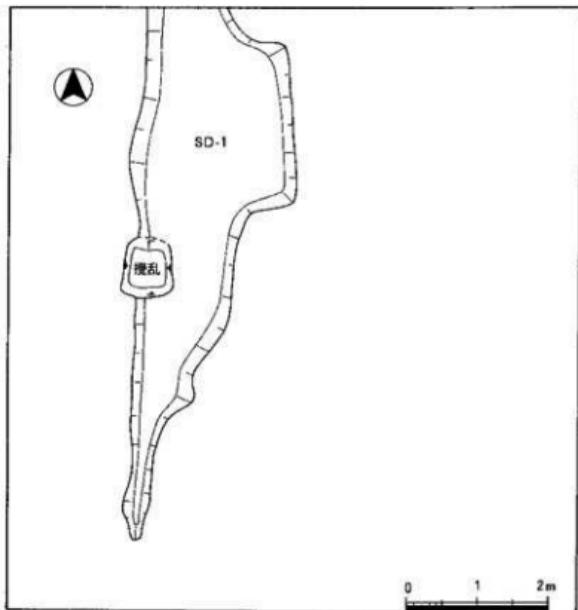
SD-1

南北方向に伸びるもので、南部が幅狭で北に行くに従って幅を増している。検出長7.5m、幅0.35~2.3m、深さ0.2mを測る。埋土は褐灰色砂質シルトと明緑灰色シルトの互層である。遺物は近世に比定される伊万里焼の青磁皿(1)が1点のみ出土している。(1)は皿の底部付近の小片である。見込み部分に有文が認められるが、小片のため文様構成は判然としない。

高台は削り出しによる蛇ノ目高台である。釉は若干厚目で施釉されているが、置付部は釉がふき取られている。釉は光沢のある明緑灰色で、釉全体にやや粗い質人がみられる。胎土は精緻で灰白色を呈する。なお、高台置付を幅広く削り出し、蛇ノ目状に作る等の特長から、17世紀中葉の製作時期が推定される。



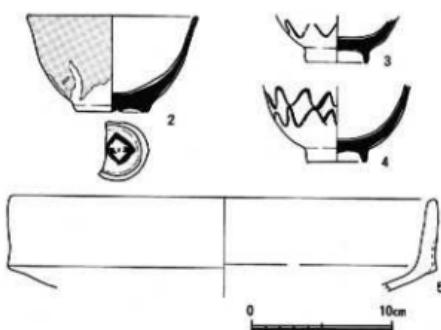
第3図 SD-1出土遺物実測図



第4図 検出遺構平面図

4) 遺構に伴わない遺物

第6層から近世時期の遺物が少量出土している。その内1点(2~5)を図化した。(2)は唐津焼の丸碗で、兜巾高台を有する。復元口径11.9cm、器高6.8cm、高台径5.2cmを測る。釉は白色で高台脇まで施釉されている。胎土はやや粗く、淡赤茶褐色を呈する。高台裏面に△と墨書きされている。(3)は伊万里焼の染付碗の底部である。高台径4.4cm、高台高1.0cmを測る。体部外面には発色の悪い呉須により、一重綱目文が施文されている。釉は光沢のある淡青白色で薄く施釉されているが、置付部については釉がカキ取られている。胎土は緻密で灰白色を呈している。(4)は(3)と同様、伊万里焼の染付碗の底部で、高台径4.2cm、高台高1.0



第5図 第6層出土遺物実測図

部内面はヨコナデ、底部外面は弱いナテ調整が行われている。色調は茶褐色で、胎土には石英・長石・雲母・チャートの小砂粒が多く含まれている。積山洋氏分類の大坂産とされるD類にあたるもので、17世紀末～18世紀初頭以降成立したものとされている。これら図化した4点の遺物は、概ね17世紀代の所産と推定される。

3.まとめ

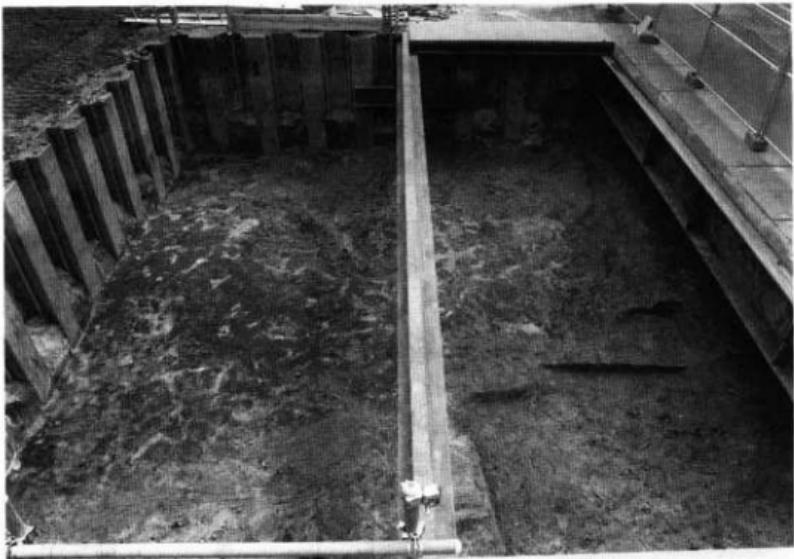
今回の発掘調査は、工法上の問題から調査深度が限定されていたが、第7層上面で近世時期(江戸時代中期)の遺構と下層調査で中世時期の自然河川を検出した。

近世時期(江戸時代中期)の遺構についてはSD-1を検出したのみで、遺構の分布密度としては粗い。上層で検出した遺物包含層である第6層においても、近世時期(江戸時代中期)を中心とした日常雑器が少量出土した程度であり、遺構の分布密度に符合した遺物包含層の形成状況が窺われる。一方、自然河川は現地表下2.15m(標高10.8m)以下で検出した。中粒砂～中疊が優勢な土質を主体とするもので、調査地点の西部に広がる旧大和川の主流であった長瀬川の流路に関連したものと推定される。なお、層中から瓦器碗の小片が検出されており、当調査地付近では少なくとも鎌倉時代後期段階には埋没していたようである。

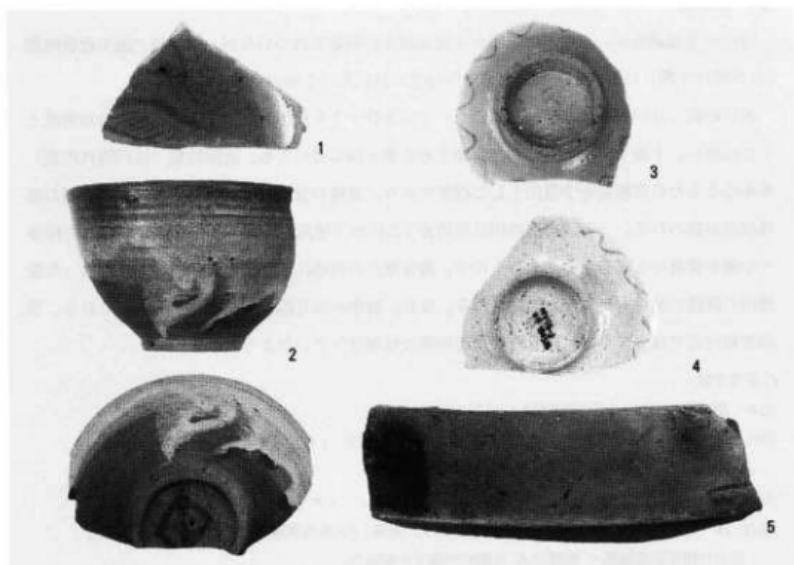
参考文献

- 山本 昭ほか 1976 『東弓削遺跡』 八尾市教育委員会
- 西村公助 1987 「5 東弓削遺跡(第2次調査: 東弓削102-1他)」『昭和61年度事業概要報告』
(財)八尾市文化財調査研究会報告4
- 大橋康二 1989 『考古学ライブラリー-55肥前陶磁器』 ニュー・サイエンス社
- 積山 洋 1995 『近世大坂出土の土師質土器編年、素描』『大阪府埋蔵文化財協会研究共紀要3』
-設立10周年記念論集- 財團法人 大阪府埋蔵文化財協会

cmを測る。高台疊付部分に離れ砂が付着している。体部外面には発色の悪い呉須により、一重網目文が施されている。釉は透明感がない灰白色で、体部外面下半に袖肌が認められる。胎土は(3)と同様である。(5)は炮烙の小片で、復元口径30.2cmを測る。口縁部は直線的に伸びるもので、口縁端部は内傾してやや丸味のある面を有する。口縁部外面および底



調査区全景（北から）



SD-1 (1)、第6層 (2~5) 出土遺物

XIV 美園遺跡第4次調査(MS95-4)

大　目　録

調査概要	1
調査実施	2
地質	3
植物	4
動物	5
遺物	6
参考文献	7
著者	8

例　　言

1. 本書は大阪府八尾市美園町2丁目地内で実施した公共下水道工事に伴う発掘調査である。
1. 本書で報告する美園遺跡第4次調査(MS95-4)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書(八教社文埋第135-3号 平成7年6月29日)に基づき財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成7年10月3日から10月5日にかけて、西村公助を担当者として実施した。調査面積は17m²を測る。
1. 本書に関わる業務は、遺物実測—西村和子、図面レイアウト トレースー中西明美、西村(和)、西村(公)が行った。
1. 本書の執筆、編集は西村公助が行った。

本 文 目 次

1.はじめに	123
2.調査概要	125
1) 調査の方法と経過	125
2) 基本層序	125
3) 検出遺構と出土遺物	126
3.まとめ	126

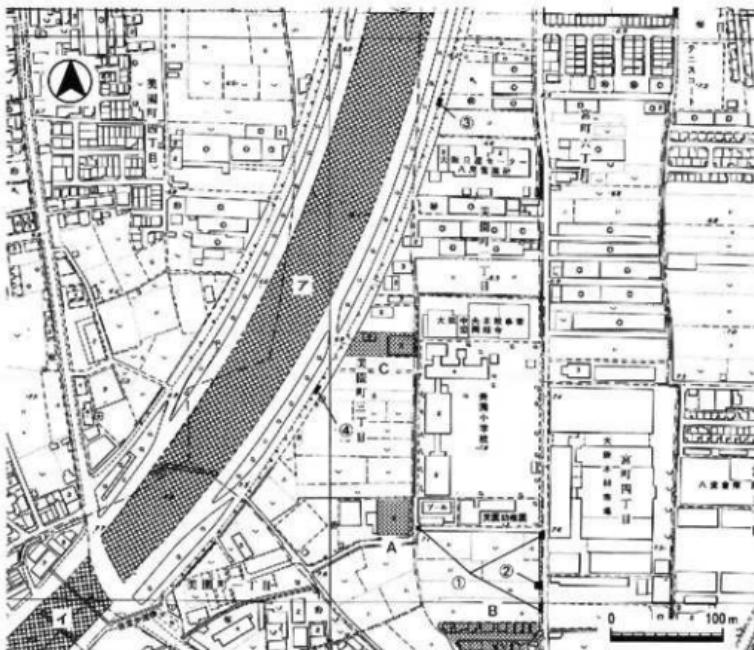
XIV 美園遺跡第4次調査 (MS95-4)

1. はじめに

美園遺跡は八尾市の西部に位置し、現在の行政区画では美園町1～4丁目、および西と北側は東大阪市域に広がっている遺跡である。

当遺跡の周辺には北東に山賀遺跡、南西に佐堂遺跡、南東に宮町遺跡および穴太庵寺が存在している。

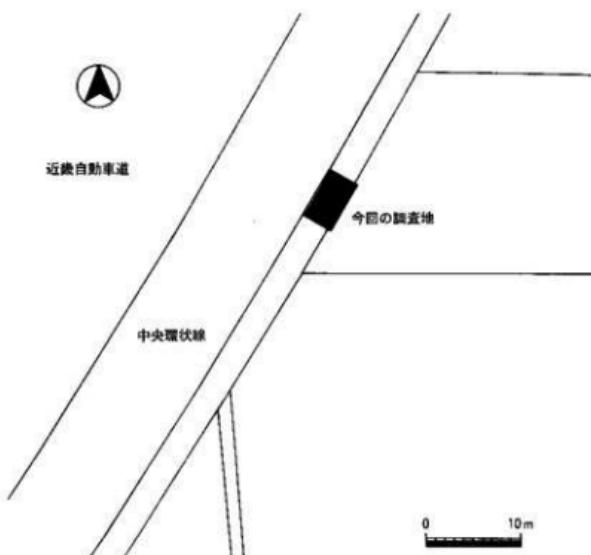
当遺跡内および佐堂遺跡では、昭和55年度から昭和59年度にかけて近畿自動車道建設に伴う調査を大阪府教育委員会と財団法人大阪文化財センター^{註1・2}が行っており、縄文時代から近世に至る遺構の検出および遺物の出土があった。また、昭和53～54年度・昭和56年度には八尾市教育委員会^{註3・4}が、平成4年度・平成6年度には当調査研究会^{註5・6}が調査を実施している。これらの調査でも、弥生時代後期から平安時代にかけての遺構の検出および遺物の出土があった。



第1図 調査地周辺図

調査位置	遺跡	略号	調査地	調査原因	面積 (m ²)	調査期間	調査機関	備考
①	美國	MS92-01	美國町2丁目 宮町4丁目	公共下水道第1工区	100	H040908～ 1213	研究会	
②	美國	MS92-02	美國町2丁目 101-1	防火水槽工事	40	H041216～ 1219	研究会	
③	美國	MS94-03	美國町2丁目 地内	公共下水道23工区	25	H060513～ 0519	研究会	
④	美國	MS95-04	美國2丁目地 内	公共下水道7-7工区	17	H071003～ 1005	研究会	今回の 調査地
ア	美國		美國2丁目～ 4丁目	近畿自動車道建設		S551201～ S590331	(財)大阪文化 財センター	
イ	佐堂		佐堂町	近畿自動車道建設		S560319～ S590331	(財)大阪文化 財センター	
A	美國		美國2丁目	屋内水泳場建設		S53	市教委	
B	美國		美國2丁目 109-3	分譲住宅建設		S54	市教委	
C	美國		美國2丁目 48-1	倉庫建設		S560715～ 0620	市教委	

第1表 美國遺跡・佐堂遺跡調査一覧表



第2図 調査位置図

2. 調査概要

1) 調査方法と経過

今回の調査は、公共下水道工事(7-7T区)に伴って掘削される部分17m²を対象に実施した。現地表下約2mまでを機械で掘削し、以下の1m前後の上層については人力と機械を併用し調査を実施した。また、上記の調査終了後、工事掘削の最終深度である現地表下約6.3mまでの上層の堆積状況を確認した。なお、今回の工事予定地は店舗の前に位置しており、昼間に工事ができないため、夜間に工事を行なうことから、調査も夜間に実施した。

2) 基本層序

第0層は、盛土で層厚2.0mを測る。第1層は古墳時代前期以後の洪水等の要因により堆積した土層で、層厚0.4~0.5mを測る。第2層は古墳時代前期の堆積上で、層厚0.1~0.2mを測る。遺構の検出はなかった。第3層は弥生時代から古墳時代前期の堆積上で、上面では南側へ低くなる落ち込み(SO1)を検出した。第4層以下の層は弥生時代後期以前の堆積で、ほぼ水平に堆積している。第4層~第12層内からは遺物は出土していない。

第0層 盛土。層厚2.0m。上面の現地表面の標高はT.P.+7.2m前後である。

第1層 褐色(10YR4/4)微細砂。層厚0.4~0.5m。

第2層 灰色(10Y4/1)粘土。層厚0.1~0.2m古墳時代前期の堆積土。

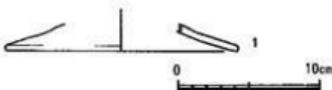
第3層 暗青灰色(5B3/1)シルト混粘土。0.2~0.3m。弥生時代から古墳時代前期の堆積上で、上面では南側へ低くなる落ち込み(SO1)を検出した。層内からは土師器の破片【高环の裾部】(1)が出上している。

第4層 青灰色(5B5/1)粘土。

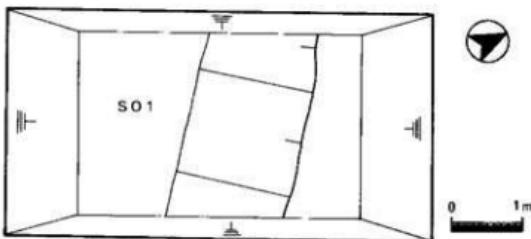
層厚0.5m。

第5層 灰白色(N7/)細砂。

層厚0.5~0.6m。



第3図 第3層内出土遺物実測図



第4図 第3層上面検出遺構平面図

第6層 灰色(10Y4/1)細砂混粘土。

層厚0.3m。

第7層 青灰色(10BG6/1)シルト。層厚0.3m。

第8層 黒色(N2/)粘土。層厚0.3m。

第9層 青灰色(5BG5/1)粘土。層厚0.3m。

第10層 暗灰色(N3/)粘土。層厚0.25m。

第11層 明青灰色(10BG7/1)シルト混粘土。層厚0.35m。

第12層 青灰色(5B6/1)シルト混細砂。層厚0.5m以上。

3) 検出遺構と出土遺物

第2層を除去した第3層上面の標高T.P.+4.6mで落ち込みを検出した。

S O 1

調査地の北側から南に落ち込む。幅3.5m以上、深さ0.5m以上を測る。落ち込みの堆積土は、

a 暗灰色(N3/)粘土、b 黒色(N2/)粘土である。落ち込み内からの遺物は出土していない。時期は弥生時代～古墳時代前期と推定される。

3.まとめ

今回の調査では弥生時代～古墳時代前期の落ち込み遺構(S O 1)を検出した。落ち込みは、a層およびb層とともに粘土の堆積で、特にb層には腐敗した植物が多く含まれており、沼地の堆積であると推定できる。この遺構は、集落の特に居住域を示しているものではなく、今回の調査地点は、集落から離れた地域であったと推定される。なお、同時期の居住域は、今回の調査地の西に近接している近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う発掘調査地や、北東に近接する八尾市教育委員会附和56年度調査地^{註1}で検出している。

註

註1 渡辺昌宏他 1985.3「美園」近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書 大阪府教育委員会 財團法人大阪文化財センター

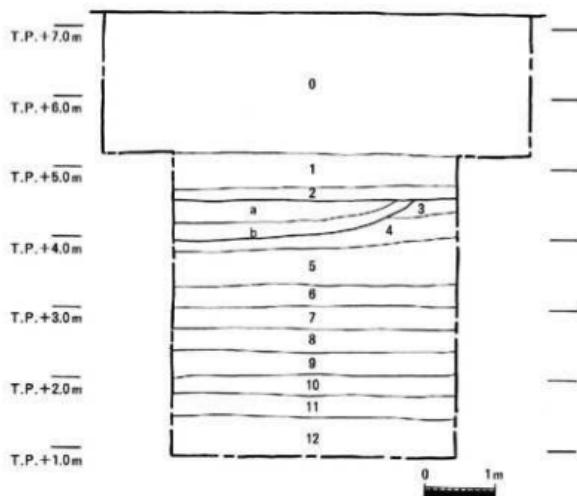
註2 三宅正浩 1985.1「佐堂」(その1)近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書 大阪府教育委員会 財團法人大阪文化財センター

註3 原田昌則他 1981.3「昭和53・54年度埋蔵文化財発掘調査年報」八尾市教育委員会 八尾市文化財調査報告7

註4 米田敏幸他 1983.8「第5章 美國遺跡発掘調査概要報告」「八尾市埋蔵文化財発掘調査概報 1980・1981年度」(財)八尾市文化財調査研究会報告2

註5 成海伸子 岡田清一他 1993「X 美園遺跡(第1次調査)」「X I 美園遺跡(第2次調査)」「八尾市埋蔵文化財発掘調査報告書」財團法人八尾市文化財調査研究会報告39

註6 高萩千秋他 1996「財團法人八尾市文化財調査研究会報告50」「VI 美園遺跡(第3次調査)」財團法人八尾市文化財調査研究会



- | | |
|-------------------------|---|
| 第0層 盛土 | 第7層 青灰色 (10BG6/1) シルト |
| 第1層 褐色 (10YR4/4) 微細砂 | 第8層 黒色 (N2/) 粘土 |
| 第2層 灰色 (10Y4/1) 粘土 | 第9層 青灰色 (5BG5/1) 粘土 |
| 第3層 暗青灰色 (5B3/1) シルト混粘土 | 第10層 暗灰色 (N3/) 粘土 |
| 第4層 青灰色 (5B5/1) 粘土 | 第11層 明青灰色 (10BG7/1) シルト混細砂 |
| 第5層 灰白色 (N7/) 細砂 | 第12層 青灰色 (5B6/1) シルト混細砂 |
| 第6層 灰色 (10Y4/1) 細砂混粘土 | a 暗灰色 (N3/) 粘土
b 黒色 (N2/) 粘土〔植物遺体含む〕 |

第5図 西壁面実測図



第3層上面突出造構全景 (南から)

西壁面 (東から)

報告書抄録

ふりがな 書名	ざいだんほうじん やおしょんかいかいちょうさけんきゅうかいのうこく 樹倒法入 八尾市文化財調査研究会報告 33						
刊行者名	I 路跡遺跡（第19次調査） ■ 留城遺跡（第30次調査） □ 五跡部遺跡（第21次調査） IV 太田遺跡（第2次調査） V 留城遺跡（第16次調査） ■ 留城遺跡（第19次調査） VI 留城遺跡（第20次調査） VII 小阪合遺跡（第31次調査） IX 成法寺遺跡（第16次調査） X 竹瀬遺跡（第6次調査） XI 中田遺跡（第29次調査） XII 中田遺跡（第32次調査） ■ 留城・引羽遺跡（第9次調査） ■ 留城遺跡（第4次調査）						
巻次							
シリーズ名	《別》八尾市文化財調査研究会報告						
シリーズ番号	53						
編集者名	II・Ⅲ・留城萬千秋 ■・X・加・留原昌吉郎 IV・VI・区・岸内村公利 伊田真一 V・柳岡田清一						
編集機関	財團法人 八尾市文化財調査研究会						
所在地	〒581 八尾市東町 4丁目58の3 TEL 0729-94-4700						
発行年月日	西暦 1996年9月30日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 度数 度分秒	東經 度数 度分秒	調査期間	測量 距離 (m)	調査原因
I 路跡遺跡 (第13次調査)	おおさかふやおしかかがちょう 大阪府八尾市春日町 4丁目地内	27212	34度 36分 53秒	135度 35分 41秒	1995.08.21～ 08.20	17	公共下水道工事 に伴う事前調査
あとべ 路跡遺跡 (第20次調査)	おおさかふやおしかかがちょう 大阪府八尾市春日町 4丁目地内	27212	34度 36分 51秒	135度 35分 30秒	1995.11.09～ 11.15	23	公共下水道工事 に伴う事前調査
あとべ III 留城遺跡 (第21次調査)	おおさかふやおしひがしたいしどう 大阪府八尾市東条本木 1丁目地内	27212	34度 36分 39秒	135度 35分 38秒	1995.12.04～ 12.05	147	公共下水道工事 に伴う事前調査
おおた IV 太田遺跡 (第2次調査)	おむさかふやおしおおた 大阪府八尾市太田2・3・5丁目地内	27212	34度 36分 17秒	135度 35分 37秒	1995.07.12～ 08.28	77.81	公共下水道工事 に伴う事前調査
かやふり V 留城遺跡 (第16次調査)	おおさかふやおしかかちりょう 大阪府八尾市西門町 2丁目地内	27212	34度 36分 19秒	135度 36分 20秒	1995.08.03～ 11.09	58	公共下水道工事 に伴う事前調査
かやふり VI 留城遺跡 (第19次調査)	おおさかふやおしかかふりちょう 大阪府八尾市垂井町 1丁目地内	27212	34度 36分 17秒	135度 36分 31秒	1995.09.28～ 10.23	36.4	公共下水道工事 に伴う事前調査
かやふり VII 留城遺跡 (第20次調査)	おおさかふやおしこわいちらじょう 大阪府八尾市垂井町 5・6丁目地内	27212	34度 36分 47秒	135度 36分 40秒	1996.01.16～ 01.26	43.2	公共下水道工事 に伴う事前調査
こざかあい VIII 小阪合遺跡 (第21次調査)	おおさかふやおしあひやまちょう 大阪府八尾市青山町 5丁目21番地	27212	34度 37分 05秒	135度 36分 55秒	1996.01.29～ 02.02	36	防火水槽設置工事 に伴う事前調査
じこはううじ IX 成法寺遺跡 (第16次調査)	おおさかふやおしたからちょう 大阪府八尾市萬葉町 1丁目地内	27212	34度 37分 17秒	135度 36分 42秒	1995.07.17～ 07.28	15	公共下水道工事 に伴う事前調査
だけふち X 竹瀬遺跡 (第6次調査)	おおさかふやおしたけふち 大阪府八尾市垂井 1丁目4丁目	27212	34度 36分 54秒	135度 36分 12秒	1995.01.13～ 11.28	89	公共下水道工事 に伴う事前調査
なかか XI 中田遺跡 (第20次調査)	おおさかふやおしなかた 大阪府八尾市中田 3丁目30番地先	27212	34度 36分 52秒	135度 36分 52秒	1995.08.17～ 08.31	44	公共下水道工事 に伴う事前調査
なかか XII 中田遺跡 (第30次調査)	おおさかふやおしよぎさきた 大阪府八尾市尾木本木 5丁目36番地	27212	34度 36分 39秒	135度 37分 05秒	1995.11.18～ 12.21	32.5	防火水槽設置工事 に伴う事前調査
ひがしゆげ XIII 留城遺跡 (第9次調査)	おおさかふやおしひがしゆげ 大阪府八尾市東垂井 1・2丁目地内	27212	34度 36分 01秒	135度 37分 12秒	1996.03.23～ 03.29	140	公共下水道工事 に伴う事前調査
あそこの XIV 留城遺跡 (第3次調査)	おおさかふやおしもそのちう 大阪府八尾市美南町 2丁目地内	27212	34度 38分 07秒	135度 35分 46秒	1995.10.03～ 10.05	17	公共下水道工事 に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	上古時代	古之遺物	古之遺物	特記事項		
留城遺跡 第19次	集落遺構	平安時代	唐 唐 唐	須恵器・土師器 弥生土器 土師器			
留城遺跡 第20次	集落遺構	弥生時代	河川	河川			
留城遺跡 第21次	集落遺構	奈良時代	川戸	土師器			
太田遺跡 第1次	集落遺構	古墳時代	河川	河川			
豈瀬遺跡 第18次	集落遺構	弥生時代	河川	河川			
豈瀬遺跡 第19次	集落遺構	平安時代	河川	土師器			
豈瀬遺跡 第20次	集落遺構	平安時代	河川	土師器			
小阪合遺跡 第31次	集落遺構	平安時代	畦	土師器・瓦器			
成法寺遺跡 第15次	集落遺構	弥生時代	河川	河川			
竹瀬遺跡 第6次	集落遺構	古墳時代	落ち込み	土師器			
中田遺跡 第29次	集落遺構	弥生時代後期	土坑・溝	土師器			
中田遺跡 第30次	集落遺構	縄文時代	井戸・水田	土師器・瓦			
東弓削遺跡 第9次	集落遺構	江戸時代中期	溝	伊万里焼き			
美南遺跡 第4次	集落遺構	古墳時代	落ち込み	土師器			

財團法人 八尾市文化財調査研究会報告53

- I 跡部遺跡（第19次調査）
- II 跡部遺跡（第20次調査）
- III 跡部遺跡（第21次調査）
- IV 大田遺跡（第2次調査）
- V 登振遺跡（第18次調査）
- VI 登振遺跡（第19次調査）
- VII 登振遺跡（第20次調査）
- VIII 小阪合遺跡（第31次調査）
- IX 成法寺遺跡（第16次調査）
- X 竹瀬遺跡（第6次調査）
- XI 中田遺跡（第29次調査）
- XII 中山遺跡（第32次調査）
- XIII 東弓削遺跡（第9次調査）
- XIV 美園遺跡（第4次調査）

発行 1996年9月

編集 財團法人 八尾市文化財調査研究会
〒581 大阪府八尾市寺町4丁目58の2
TEL. 0729 94 4700

印刷 明新印刷株式会社

表紙 レザック66 <260kg>
本文 ニューアG <70kg>
図版 ニューアG <70kg>

093